

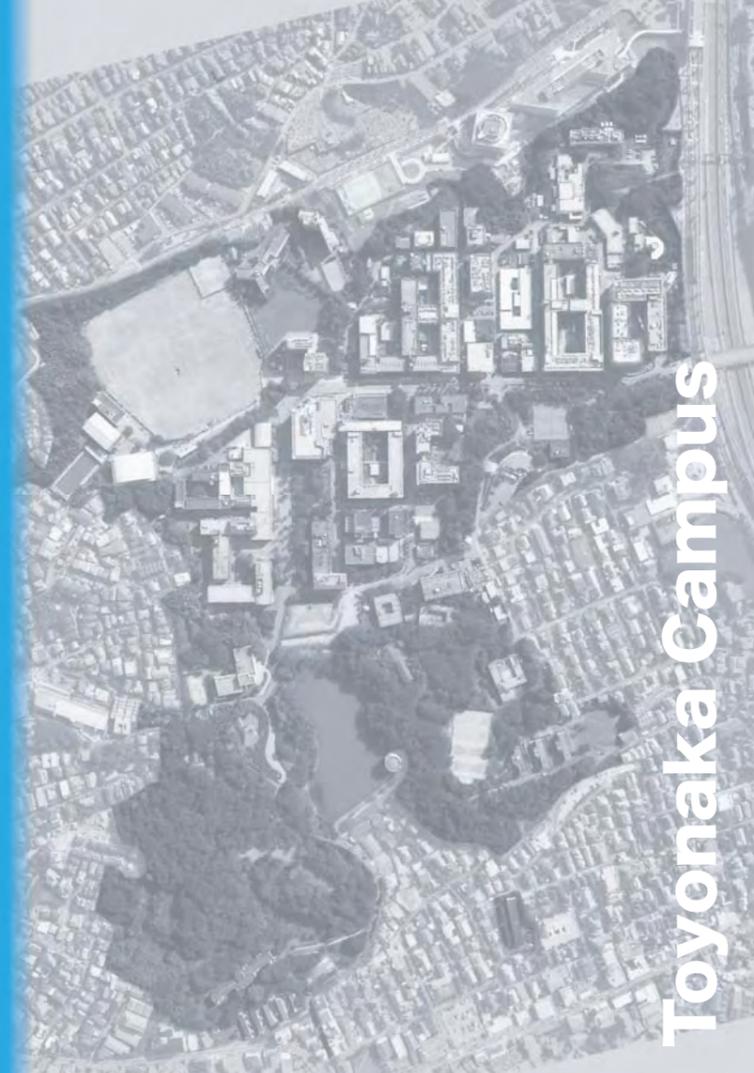
大阪大学キャンパスマスタープラン

個性と魅力にあふれた阪大キャンパス像

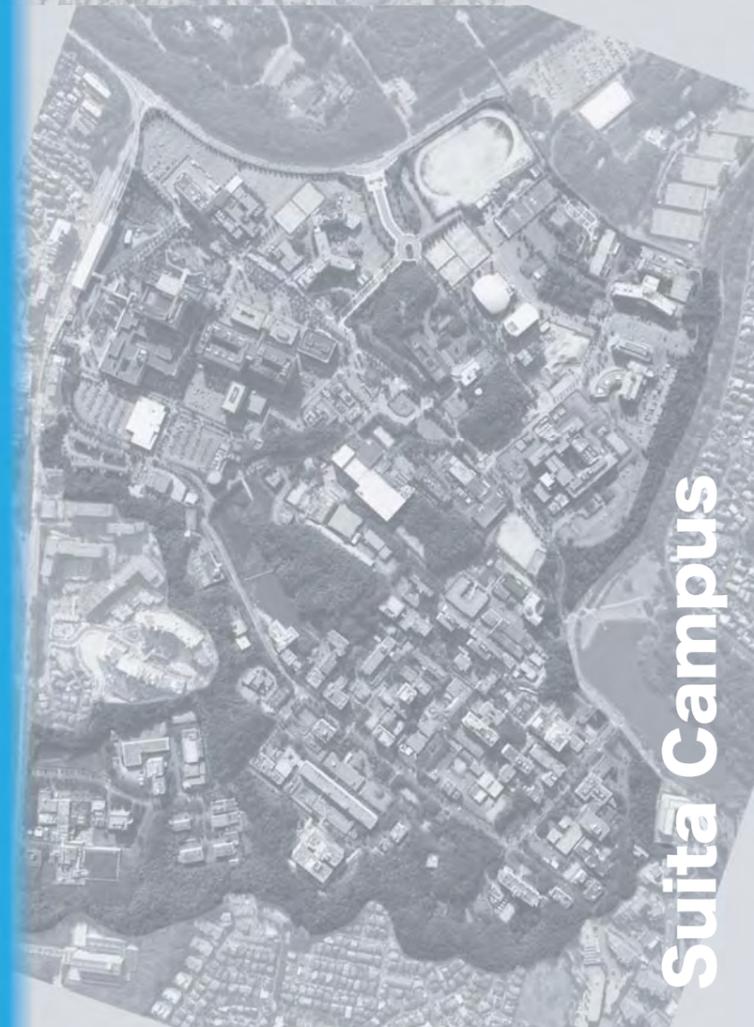
豊中・吹田キャンパスおよび全体コンセプト編
on Toyonaka Campus, Suita Campus and Total Concept

平成24(2012)年 4月 部分改訂版
Revised edition Apr. 2012

大阪大学 施設マネジメント委員会
Osaka University Facility Management Committee



Toyonaka Campus



Suita Campus

目次

1. キャンパスマスタープランのコンセプト		
1-1. キャンパスマスタープラン策定の経緯	-----	2
1-2. キャンパスマスタープランのコンセプトとその達成手法	-----	3
1-3. キャンパスマスタープランの構成	-----	4
2. キャンパスの伸ばすべき個性と空間像の読みとり		
2-1. 豊中キャンパスの個性と空間像		
1) 伸ばすべき個性・空間像・資源および問題箇所の読みとり	-----	5
2) 継承すべき場所・風景	-----	6
2-2. 吹田キャンパスの個性と空間像		
1) 伸ばすべき個性・空間像・資源および問題箇所の読みとり	-----	7
2) 継承すべき場所・風景	-----	8
3. キャンパスマスタープランに対する期待と評価検証		
3-1. キャンパスマスタープラン策定作業時の調査・意見集約	-----	9
3-2. その後の関連する各種調査	-----	10
3-3. 平成23(2011)年の評価・点検	-----	12
3-4. 期待と評価検証のまとめ	-----	12
4. ゾーンおよび骨格・核の構成		
4-1. 豊中キャンパスの空間像		
1) 骨格イメージ	-----	14
2) 整備イメージ	-----	15
4-2. 吹田キャンパスの空間像		
1) 骨格イメージ	-----	16
2) 整備イメージ	-----	17
5. 自然資源の継承と形成	-----	18
6. すべての人が安全に快適に移動できる環境の形成		
6-1. 交通ネットワークにおける問題点の整理	-----	20
6-2. 豊中キャンパスの交通ネットワーク	-----	21
6-3. 吹田キャンパスの交通ネットワーク	-----	23
7. 達成手法		
7-1. リーディングプロジェクト	-----	24
1) キャンパスライフコアの形成(豊中・吹田)	-----	25
2) 豊中キャンパスのシンボル空間の形成	-----	26
3) 待兼山博物館・周辺環境の整備	-----	27
4) 柴原通り周辺の空間再編	-----	28
5) 吹田キャンパスのシンボル空間の形成	-----	29
6) 千里門周辺環境整備	-----	30
7) 吹田分館前オープンスペースの再生	-----	31
7-2. デザインガイドライン		
1) デザインガイドラインの考え方	-----	32
2) 豊中キャンパスでの適用	-----	33
3) 吹田キャンパスでの適用	-----	36
7-3. キャンパスアクションプラン	-----	39
8. 今後の課題	-----	41

※ 本キャンパスマスタープランは平成17年に策定されたキャンパスマスタープランの平成24(2012)年部分改訂版であり、主に豊中・吹田両キャンパスについて記述している。箕面キャンパスについては、コンセプトに関連する部分等については記述しているが、詳細は平成21(2009)年策定の「箕面キャンパスマスタープラン」を参照されたい。



はじめに

大阪大学は、平成16年4月より国立大学から国立大学法人へと組織形態を改め、新たな出発を迎えた。その後、第1期中期目標・中期計画(平成16年4月～平成22年3月)を達成しながら、平成22年からは第2期中期目標・中期計画期間(平成22年4月～平成28年3月)を迎えている。以下に第2期中期目標前文を抜粋する。

大阪大学は、その精神的源流である適塾と懐徳堂の学風を継承しつつ、合理的な学知と豊かな教養を究めることを通じて、世界に冠たる知の創造と継承の場となることを目指す。

そのために、研究における「基本」と「ときめき」と「責任」を強く意識しながら、基礎研究に深く根を下ろし、かつ学知の新しい地平を切りひらく先端的な研究をさらに推進することによって、世界最高レベルの研究拠点大学として、その国際的なプレゼンスを示す。

また、これら第一線の研究成果に基づき、研ぎ澄まされた専門性の教育を深化させるとともに、学生の「教養」と「デザイン力」と「国際性」を涵養することによって、広い視野と豊かな教養をもち、確かな社会的判断に基づいて行動することのできる研究者・社会人を育成する。

このような研究と教育の成果を広く企業や社会に問い、その活用に供することにより、地域の学術・文化機関、国際的な学術機関としての大学の役割を積極的に担う。そして、大学という、教育・研究を通じて優れた人材を育成する機関への社会の信託に厚く応えることにより、「地域に生き世界に伸びる」という大阪大学の理念を実現する。

(第2期中期目標より抜粋)

また、平成15年策定の大阪大学憲章では、下記の基本理念、指針、キーワードを挙げており、これらは現在でもその重要性に変わりはない。

歴史の大きな転換点をむかえつつあるいま、大阪大学が国立大学法人として新たな出発をするこの機に臨み、将来の豊かな発展を期して、あらためて自らの基本理念を以下のとおり宣言し、大阪大学全構成員の指針とする。

- | | | |
|---------------|-------------|------------|
| 1. 世界水準の研究の遂行 | 2. 高度な教育の推進 | 3. 社会への貢献 |
| 4. 学問の独立性と市民性 | 5. 基礎的研究の尊重 | 6. 実学の重視 |
| 7. 総合性の強化 | 8. 改革の伝統の継承 | 9. 人権の擁護 |
| 10. 対話の促進 | 11. 自律性の堅持 | (大阪大学憲章より) |

またグラウンドビジョンあるいはイメージを明確にするため、教育に関する3つの目標と、研究・教育を特徴付ける2つのキーワードが掲げられている。

- ・教育に関する3つの目標：教養、デザイン力、国際性
- ・研究・教育を特徴付ける2つのキーワード：インターフェイス、ネットワーク

キャンパスの概況

大阪大学は、主たるキャンパスとして、豊中キャンパス、吹田キャンパス、箕面キャンパスによって構成される。その他に、草創の地に整備した中之島センターのある中之島キャンパス、宿舎等がある。

なお、平成19年10月に大阪外国語大学は大阪大学と統合し、その校地は大阪大学箕面キャンパスとなった。平成17年にキャンパスマスタープランを策定した時点では、豊中キャンパスと吹田キャンパスがその対象であったが、平成21年3月には箕面キャンパスマスタープランを、別冊として策定している。

豊中キャンパス

豊中キャンパスは旧制浪速高等学校以来の歴史あるキャンパスであり、全ての学生が共通教育を受け大学生活を始める思い出の地である。現在、文・法・経済学の文科系学部・研究科、理学、基礎工学の理工系学部・研究科、言語文化研究科及び全学教育推進機構(平成24年度に大学教育実践センターから改組)、総合図書館、総合学術博物館、課外活動施設等が設置されている。待兼山、浪高庭園、大高の森、中山池等が残り歴史のある自然豊かな起伏に富んだ地形であり敷地面積445,351㎡、建物の延べ床面積258,621㎡、学生数約10,000人を擁するキャンパスである。

吹田キャンパス

豊中キャンパスから約7キロ離れた千里丘陵に、昭和40年代の始めから整備されたキャンパスであり、工学部・研究科、多くの工学・理学・医学系の研究所・センター、及び昭和40年代後半から整備が始まった薬学部、歯学部、大学本部、また平成5年に移転統合が完了した医学部及び附属病院等がある。

ほぼ平坦な地形の中に各研究科単位でまとまった施設配置となっており、敷地面積996,659㎡、建物の延べ面積658,368㎡、学生数約12,000人を擁し、豊中キャンパスのほぼ2倍の敷地を持っている、広大なキャンパスである。

箕面キャンパス

箕面キャンパスは、昭和54年9月に箕面市栗生間谷に造成開発され、当時の大阪外国語大学がそれまでの天王寺区上本町から移転して出来たキャンパスである。

栗生間谷の住宅街と、開発・入居が続いている彩都に隣接し、背後に北摂山系が広がっている。キャンパス内は、グラウンドを中心として校舎が囲むように配置され、高低差が大きい。箕面キャンパスは、敷地面積145,125㎡、建物の延べ面積62,290㎡、学生数約3,000人を擁している。

これまでのキャンパス計画の経緯

- ・「大阪大学 1999」では①大学院重点化に伴う整備、②老朽狭隘化が著しい建物の改修・改築、③共通教育校舎の整備、④基幹・環境整備の4点を掲げ、歴史と伝統を継承し、衿を正して学ぶ姿勢が自ずと想起させるようなキャンパス雰囲気をもつ魅力ある教育研究環境の整備が求められる、と記述している。
- ・平成11年10月には、大阪大学「21世紀ドリーム・プラン」が策定された。
- ・平成12年9月には施設長期計画委員会(平成12年9月20日にキャンパス計画委員会に改称)での議論を踏まえて長期計画書を作成し、①老朽狭隘建物の計画的解消、②キャンパス環境整備、③教育研究活動の流動化に対する対応、④環境に配慮した施設整備、⑤社会に開かれた大学、⑥教育研究拠点としての大学院施設の整備を目標としている。
- ・平成15年3月には、工学研究科の教官を中心としたワーキングにおいて、交通環境の改善計画、外部空間のバリアフリー化、外部空間・ランドスケープの計画とデザイン、工学研究科エリア重点地区の空間改善の提案を内容とした、「キャンパス環境整備計画・デザイン検討プロジェクト2」が報告された。
- ・平成16年4月に、国立大学から国立大学法人へと組織形態を改めた。
このとき、第1期中期目標・中期計画等の施策を着実に実行するため、総合計画室(室長は理事副学長)の下に施設マネジメント委員会が設置され、その中に4つの検討部会が組織された(04ページ図)。
- ・平成17年に、「大阪大学キャンパスマスタープラン」が策定された。
またこのとき、マスタープランの長期的かつ総合的な運用をはかるため、施設マネジメント委員会委員長を室長として、工学研究科教員2名と施設部長からなる、キャンパスデザイン室が発足した。
- ・平成19年10月に、大阪外国語大学と大阪大学の統合により、箕面キャンパスが大阪大学のキャンパスとなった。
- ・平成20年11月に、「グラウンドプラン」が策定された。
- ・平成21年4月に、「大阪大学箕面キャンパスマスタープラン」が策定された。
- ・平成22年11月に、キャンパスマスタープランの下位指針として、「大阪大学バリアフリーとサインのフレームワークプラン」が策定された。
- ・平成23年3月に、同じくキャンパスマスタープランの下位指針として、「大阪大学緑のフレームワークプラン」が策定された。

キャンパスマスタープランの必要性

本学の法人化に際し策定された、第1期中期目標・中期計画におけるキャンパス整備関連の内容は、「本学の教育研究の目標・計画を達成するため全学的・長期的視点から各キャンパスの整備方針に基づきグラウンドデザインを策定し、世界的水準の教育研究にふさわしい施設設備の整備を図る」と明記している。

平成22年4月からはじまった第2期中期目標・中期計画でも、キャンパス整備関連の内容は、

「環境に配慮しつつ、世界的水準の教育研究にふさわしい施設とキャンパスの実現を目指す」とされている。

キャンパスは教育研究の進展に伴い、常に変化し続けるものであり、調和のとれたキャンパス環境を実現するため、また、良好なキャンパス形成のためには、大学を取り巻く様々な状況の変化や個々の建物の実態に柔軟に対応しつつも、一貫したコンセプトを保持していくことが重要である。（参照：知の拠点）

本学における教育研究、社会貢献等の展開を考えるうえにおいて、その活動を支えるキャンパス環境の整備充実は今後に亘り継続的に実施されるべき必要不可欠な課題であり、魅力的な施設整備、既存施設の効率的運用等を戦略的に推進するためには、キャンパスマスタープランが必要である。

キャンパス環境の充実は、平成17年以前は、組織の拡充等に対応した教育研究施設の量的な整備を中心に進められてきた。しかし今後は所有する既存施設の現状を踏まえ、教育研究の進展や学生教職員、また地域の人々の要望に応じた機能の向上や有効利用を図ることが重要であり、新たな施設整備はキャンパス環境に配慮し学内における十分な検討を踏まえて実施すべきである。

またキャンパスの利便性や快適性を向上させるため、適切な緑地・広場や適正な規模の駐車場・駐輪場の確保等、屋外環境を含めた調和のとれた魅力あるキャンパスを創る取り組みがより一層求められる。

キャンパスマスタープランの目標・基本方針

大阪大学のキャンパスは、大阪大学憲章、中期目標、中期計画に示されるアカデミック・プランに沿った、研究・教育等の諸活動が展開する舞台であり、それにふさわしい環境の整備と質の確保を目的とする。これを検討する枠組みとして、以下を設定した。

<目標>

- ・誇りと愛着がもてるキャンパス
- ・多様で豊かな交流が生まれるキャンパス
- ・地域社会や世界に開かれたキャンパス
- ・キャンパス間や周辺関連施設との連携をもったキャンパス

<基本方針>

- ・資源・歴史を継承し育てる、個性ある環境づくり
- ・将来にわたり世界水準の教育・研究が実効的に展開できる環境づくり
- ・学生・教職員が充実したキャンパスライフを展開できる環境づくり
- ・アクセシビリティの高い交通環境と情報環境づくり
- ・地域に貢献できるキャンパスづくり
- ・国際交流に貢献できるキャンパスづくり
- ・省エネ・低炭素化、生物多様性など、地球環境的視野に配慮したキャンパスづくり
- ・災害対策などの整った安全・安心のキャンパスづくり

キャンパス整備の対象と経費

キャンパスの施設・環境整備の対象、及び実現するための経費等については以下のように整理できる。

施設・環境整備の対象

- ・教育研究の拡充や新たな展開にともなって必要とされる施設の整備
- ・教育・研究・生活環境の向上及び国際交流の支援に必要とされる施設の整備
- ・老朽化した施設の計画的な改善及び施設の定期的な維持管理・補修等の実施
- ・屋外の公共的な空間、広場、緑地等の整備・利用・管理の実施
- ・駐車場・駐輪場、構内道路等の交通施設の整備及び管理

これらの施設・環境整備を実施する経費等を整理すると以下ようになる。

- ・国への概算要求に基づいた予算の確保（施設整備補助金、施設費交付金、施設費貸付金）
- ・学内配分における予算の確保（総長裁量経費、教育研究等重点推進経費）
- ・民間の資金を活用する方法
- ・寄付等による方法
- ・奉仕活動的な内部マンパワーの活用による方法

このような仕組みが学生教職員に十分に認識されておらず、そのことが施設や環境整備は要求すれば誰かがやってくれるものという意識を増長させていたといえる。今後益々、施設関係の予算的措置は競争的となり、厳しいものとなると思われる。

キャンパスマスタープランの達成手法

前掲の目標を実現して、大学に通うすべての人が魅力を感じ、また地域の人々に愛されるキャンパスをつくるために、共用性の高い施設や空間に重点をおきながら、下記のように達成手法を整理して考える。

リーディングプロジェクト

できるだけ早期に、大学全体として取り組むべき重点整備項目として、7-1節各項目のような、屋外共用空間や全学的な福利厚生施設を中心に設定する計画。7-1節各項目以外でも、施設マネジメント委員会等で決定された計画も含めて考える。

概算要求事項による整備

各部局等が主体となって行う施設整備。教育研究施設や講義棟などが中心となるが、リーディングプロジェクトをできるだけ取り込みながら、下記デザインガイドラインに従って整備を行う。

デザインガイドライン

整備の主体や資金にかかわらず、計画・設計時に留意し、守るべき考え方であり、7-2節に示している。一般に言われるデザインガイドラインでは、色や形態など具体的な決まりを指定することが多いが、本キャンパスマスタープランでは、あえて細かい具体的な決まりを設けず、時代の流れに即して柔軟に検討できるスタイルをとっている。

キャンパスアクションプラン

上記以外の施設マネジメントに関する実行計画。平成17(2005)年策定時に下記が示されている。

- (1) 大学が主として行うもの
- (2) サポート型（参加・提案型）の取り組み
- (3) 地域、社会、産業と連携して実施する取り組み

7-3節では主に(2)、(3)に焦点をあてて記述する。



キャンパスマスタープランの内容・構成

大学に通う全ての人が魅力を感じ、また地域の人々に愛されるキャンパスをつくるために、基本的な考え方と方策をまとめる。

共用施設、共用空間に関する整備方針を示す。→ **キャンパスコモンの整備方針**

内容・構成

1) ゾーン及び骨格・核の構成

- ① 一体として空間形成の方針を設定することが望ましいゾーンの構成
- ② キャンパスの顔を形成する軸となる空間-メインストリート等
- ③ キャンパスのイメージの核・シンボルとなる空間-広場、モニュメント等
- ④ 賑わいと交流の核となる空間
- ⑤ 副次的ストリートの良好な景観の形成

2) 自然を活かしたアメニティの形成

緑地、街路樹、沿道緑化、法面緑地等の適切な造成と維持・管理

3) 全ての人が安全に快適に移動できる環境の形成

歩行者、自転車、自動車の環境

4) 達成手法

- ① リーディングプロジェクト（早期整備が必要なプロジェクト）
- ② 概算要求事項による整備（各部局等が主体となって行う施設整備）
- ③ デザインガイドライン（順次整備を進める際の環境整備指針）
- ④ キャンパスアクションプラン（美化活動などの活動計画）

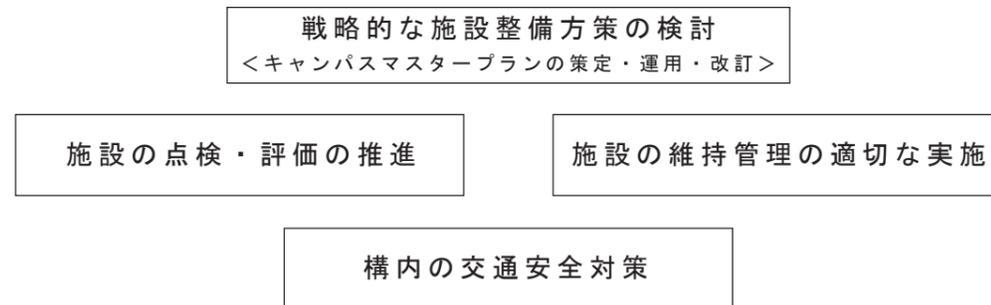
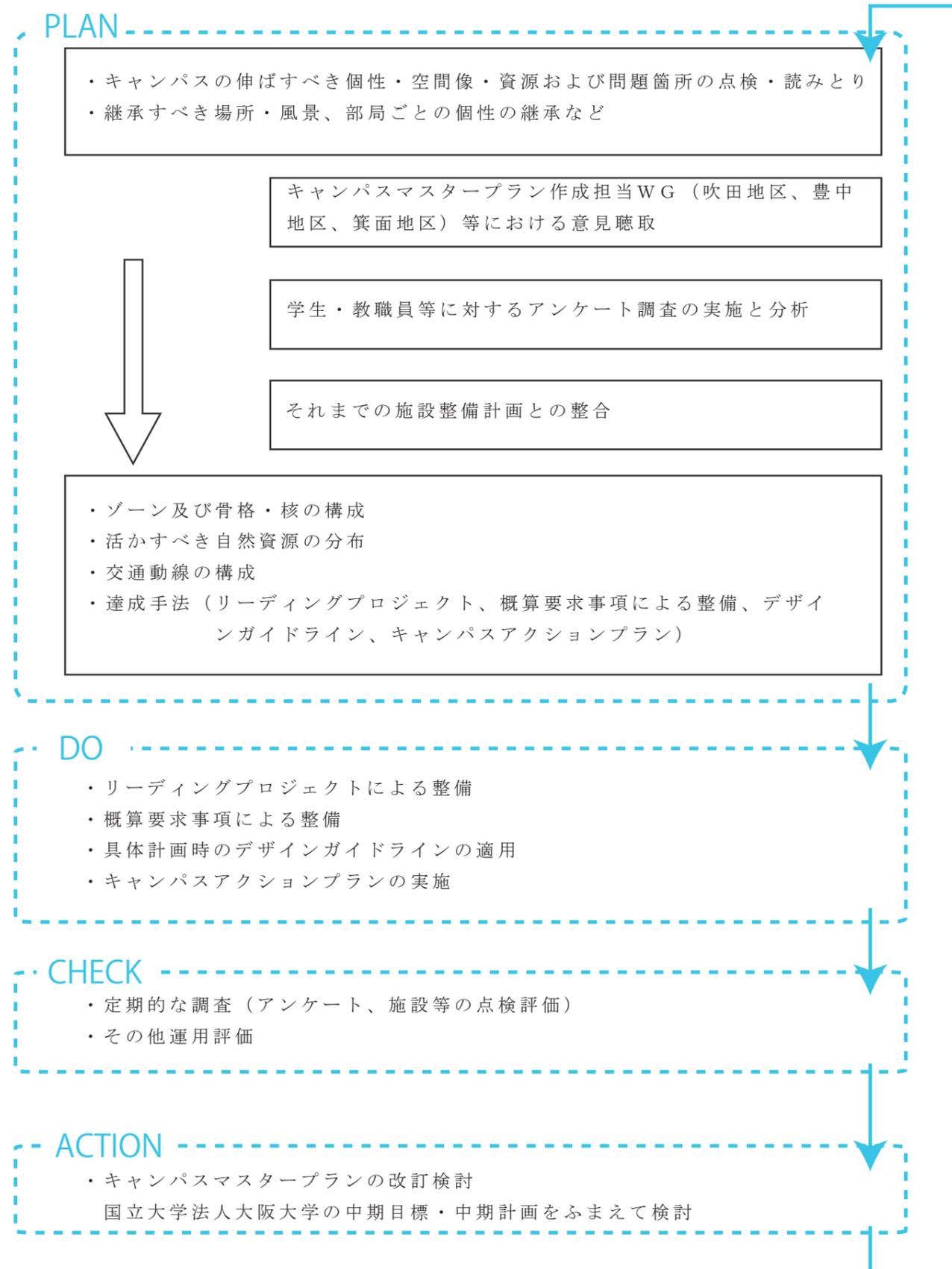


図. 施設マネジメント委員会の所掌事項における4つの検討部会

キャンパスマスタープラン作成と運用・更新の流れ



4. 石橋口

- ポテンシャルと、従前の問題
 - 大阪大学会館がアイストップとなり、庭園、待兼山の緑が目に入るロケーションで、中山池も近い。
 - 平成17年整備以前は、警備員詰所が美観を損ね、案内表示もなかった。
- 整備成果
 - 平成17年に石橋口の警備員詰所、案内サイン等が整備された。
- 残された課題
 - 庭園の景観が十分に活かされているとは言えない。
- 整備方針
 - 現況の豊かな緑を残しながら、より人が集い、くつろげる空間に変えてゆく。
 - 維持管理に費用がかからない形態を目指す。

3. 阪大坂

- ポテンシャルと、従前の問題
 - 湾曲した坂道は、ドラマチックなアプローチとなりうる。
 - 中山池越しに大阪大学会館までの眺望が得られる。
 - 平成17年整備以前は駐輪が多く、自転車が坂を駆け下り大変危険で、貧弱な公道のようだった。
- 整備成果
 - 歩行者アプローチとして魅力ある整備がされた。
 - 平成18年の自転車通行禁止措置により、歩行者の安全性が高められた。
 - 平成22年度に中山池周辺が整備された。
- 残された課題
 - 緑陰が少なく、夏期の舗装の照り返しが厳しい。
- 整備方針
 - 歩行者アプローチとしてより一層魅力的にする。
 - 交通安全対策検討を継続的に行う。
 - 緑陰（並木）の形成を検討する。

2. 阪大坂下

- ポテンシャルと、従前の問題
 - 背景に待兼山の豊かな緑を持ち大学の顔となる位置。
 - 平成17年整備以前は、貧弱な公道のようだった。
- 整備成果
 - 阪大の顔として広がりある空間に整備された。
 - 歩行者アプローチとしての整備がされた。
 - 大規模な駐輪場が整備された。
- 残された課題
 - 緑陰が少なく、夏期の舗装の照り返しが厳しい。
 - 小舗石舗装の歩行感が悪く、バリアフリー性に難がある。
 - 駐輪場が一部荒れている。
- 整備方針
 - 歩行者アプローチとしてより一層魅力的にする。
 - 緑陰をとりいれ、舗装の歩行感、バリアフリー性を改善する。
 - 駐輪場のさらなる有効活用をはかる。
 - 総合学術博物館と駐輪場の一体的な計画を行う。

1. 待兼山

- ポテンシャルと、従前の問題
 - 豊かな里山の景観を良く残している。
 - 阪大の主たる歩行者アプローチに近接。
 - 平成17年以前は、旧医短の建物と敷地が、十分に整備・活用されていなかった。
- 整備成果
 - 修学館（総合学術博物館）が、元々の建築意匠を活かし、景観に溶け込むように整備された。
- 残された課題
 - 里山としての保全方法に課題がある。
- 整備方針
 - 里山を保全しながら博物館との一体的計画を行う。

5. 大阪大学会館周辺

- ポテンシャルと、従前の問題
 - キャンパス内で最も歴史ある建物であり、丘の上でランドマークとなっている。
 - 中山池とセットで、阪大坂方向からの眺望の重要な要素となっている。
 - 平成23年(80周年)整備以前は、イ号館(現 大阪大学会館)の全学利用が少なく、また学生交流棟北側も仮設駐車場に利用され、水辺の快適性が活かされていなかった。
- 整備成果
 - 80周年記念事業により、大阪大学会館が建築意匠を保ちながら改修され、同時にバリアフリー対応の為に屋外エレベーターが設置されたほか、学生交流棟の北側にあるキャンパスの中心的な位置づけとなる親水空間としての広場等も新たに整備された。
- 整備方針
 - 広場や周辺の、緑の維持管理を徹底する。

6. 共通教育メインストリート周辺(コミュニティゾーン)

- ポテンシャル
 - 歩行者空間らしい整備がなされ銀杏並木が美しい。
 - 浪高庭園など、豊かな緑に囲まれている。
 - 共通教育メインストリートとして歩車分離が計られ、美しく整備されている。
- 現状の問題
 - 駐輪が非常に多く、見苦しい上、歩きにくい。
 - 浪高庭園は樹木が茂りすぎて陰鬱な重たい空間となっており、休憩に利用する人も少ない。
 - 中央の街路と建物との間の空間が有効に使われていない。特に言語文化研究科北側の植栽は剪定が行き届かず閉鎖的な空間となっている。
- 整備方針
 - 駐輪場を整備する。
 - 中山池～乳母谷池の軸線を重視し、見通しよい街路として整備。
 - 上記に伴い、浪高庭園は豊かな緑を活かしながら、くつろぎやすい空間の広がりで見通しの良さを持った庭園として整備する。
 - 言語文化研究科北側の樹林地は、適切な剪定を行い、くつろぐことができる開かれた空間として整備する。

7. 総合図書館・サイバーメディアセンター周辺

- ポテンシャル
 - 最重要な交通結節点であり、銀杏通り、全学教育推進機構方面、グランド・東口方面へと動線・景観の繋がりをしている。
 - 総合図書館、食堂によって人の活気のある場所である。
 - 総合図書館、サイバーメディアセンターがそれぞれ、現代的で美しいファサードを持っている。
 - 乳母谷池が近接し、景観上取り込むことが可能。
- 現状の問題
 - バスがここで転回し大変危険な状況にある。他にも一般車両と人の動線交錯が著しく、危険。
- 整備方針
 - 歩行者専用化し、大阪大学会館前と対をなすシンボリック空間として整備する。
 - 乳母谷池親水空間と一体整備して池の景観を生かし、中山池からの軸線も活かした整備を行う。

8. 銀杏通り(基礎工前)

- ポテンシャル
 - 正門から続く銀杏並木が美しい。
- 現状の問題
 - 図書館近くで、実質上歩車分離があやふやである。
 - 柴原口からの重要な歩行者動線が意識されていない。
- 整備方針
 - バスロータリーを整備し、これより北側では歩行者専用空間としての整備を行う。
 - 浪高庭園方面、図書館前方面、柴原口方面、福利ゾーン方面、それぞれへの快適な歩行者アクセスを実現する。

9. 科学教育機器リノベーションセンター周辺

- ポテンシャル
 - 歩行者動線上、柴原口と銀杏通りを結ぶ重要な位置。
 - 建物が低層で、周辺が比較的明るい。
 - 西向きに見ると、らふおれ(食堂)や待兼池周辺がアイストップ的位置を占める。また柴原口から北向きには、基礎工学研究科新館が美しく見える。
 - 待兼池周辺は、空間的に比較的開けている。
- 現状の問題
 - 主要な歩行者動線なのに、車のための道の様相。
 - 建物が老朽化している他、プレハブや、受変電設備などが多く露出し見苦しい。
- 整備方針
 - 主要な歩行者経路として快適な街路を形成。
 - 現科学教育機器リノベーションセンター北側～柴原口は歩行者優先を強化する。
 - 可能な限り緑地、広場化をはかる。
 - 将来計画建物が歩行者街路・広場に悪影響を及ぼさないようにする。
 - 待兼池周辺の空間の広がりを保全し活かす。

10. 柴原口周辺

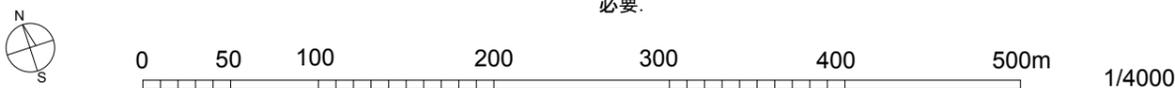
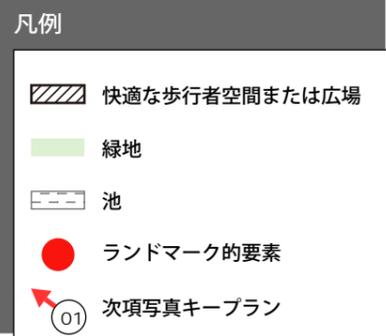
- ポテンシャルと、従前の問題
 - 原子核実験施設以南では、歩行者専用の小径になっており、草が刈られた状態では静かで快適な、比較的見通しの良い歩行者空間になっている。
 - 平成24年整備以前は、貧弱な裏口であり、隣接する駐輪場跡地も管理が行き届かず景観を損ねていた。
- 整備成果
 - 新柴原口が快適な歩行者用の入口として整備された。
- 残された課題
 - 主要な歩行者動線としては有効幅員が全体に狭く、かつ空間の広がりにもネック部分がある。
- 整備方針
 - 主要な歩行者経路として快適な街路を拡張・形成する。
 - 周辺の老朽建物を含むエリア全体の再編を検討する。

全体共通の問題(デザインガイドで解決提案)

- 総合図書館など、歩行者に圧迫感を感じさせる建物がある。
- 歩車分離・融合が不明確な部分が多い。
- 駐輪があふれている。
- 植栽が過剰とも思えるほど茂ったり、道に対して過剰に重層的に存在して閉鎖感を与えている部分が多い。
- 建物入口部分に人を惹きつける工夫がほしい。
- 車で常時入構出来るのが正門しか無く、その他の出入口(石橋口・柴原口以外)の運用方針が明確でない。災害時の利用などの想定が必要。

11. 福利ゾーン

- ポテンシャル
 - 人の賑わいのある空間である。
 - 文法経講義棟西側など、土地に若干ゆとりがある。
- 現状の問題
 - 十分に歩車分離が計られていない。
 - 縦列駐車がが多く、放置車両も見受けられる。
- 整備方針
 - 可能な限り歩行者街路としての快適性を高めるが、重要な車動線にもあたるので歩車分離を徹底する。





01 総合学術博物館（修学館）の門周辺
豊かな緑を背に、大学の顔となるべき場所



02A 阪大坂
湾曲した坂は、ドラマチックなアプローチとなりうる。



02B 中山池堤防から大阪大学会館方向をみる
中山池と大阪大学会館が一体となって景観を形成している。



03 石橋口
記念庭園と一体で整備されている。



04 大阪大学会館
メインストリートからもランドマークとして見える。



05A 共通教育メインストリート（コミュニティゾーン）
歩行者専用空間として美しく整備されている。



05B 浪高庭園
豊かな緑を持ち、キャンパスに潤いを与えている。



06A 総合図書館・サイバーメディアセンター前
キャンパス内で最も賑わいがある。



06B 総合図書館・サイバーメディアセンター前
キャンパス内で最も賑わいがある。



07A 銀杏通り周辺
歩車分離され、並木と共に美しく整備されている。



07B 銀杏通り（待兼池）
オープンスペースが整備されている。



08 科学教育機器リノベーションセンター周辺
キャンパス内で最も施設密度が低く、街路が明るい。



09 柴原口
草が刈られた状態では、静かで快適な歩行者空間。



10 福利ゾーン
賑わいがある空間。歩車分離が不十分。



11A 理系ゾーン
現代的な統一のイメージを前面に出している。



11B 理系ゾーン
高密度な土地利用がなされている。



12A 文系ゾーン
建物の入り口が街路からの引きを多くとっている。



12B 文系ゾーン
緑が多く、歩行者専用空間を多く持つ。



13 待兼谷
緑豊かな里山の景観を良くのこしている。



14 乳母谷池・東口
豊かな緑をのこしており、歩行者入口として整備されている。



1. 医学部附属病院
高層棟は周辺地域のランドマークとなっている



2. ホスピタルパーク
患者の憩いの空間として活用されている



3. 医学部校舎と芝生広場
古典的なデザインと芝生広場のキャンパスらしい景観



4. 生命科学図書館
正門からのアプローチのアイストップとなっている



5. 中央通り
豊かな緑に囲まれたシンボルロード



6. 正門アプローチ
常に手入れが行き届き、特別な場所となっている



7. コンベンションセンター・体育館前
心地よい広場空間は人気の高いエリアである



8. 大阪大学本部棟南側広場
キャンパスの中心的な広場として整備されている



9. 犬飼池の眺め
里山と池、工学部のモダニズム建築が生み出す景観



10. 里山の散策路
キャンパス中央に残された自然



11. 銀杏会館前
植栽で修景された法面が緑の壁をつくっている



12. けやき通り
春には桜の並木道となる



13. 楠本会館周辺の桜
隠れた花見の名所



14. 遺伝情報実験センター横のしだれ桜
キャンパス内には、いくつかの桜の名所がある



15. さくら環状通りの植栽（アジサイ）
自主的に植えられた様々な草花が、法面を彩る



16. 西門アプローチ
緑のトンネルを上っていくようなアプローチ



17. 工学部広場
工学部エリアでは最も賑わう場所である



18. 工学U1M棟（GSE高層棟）
高層棟はキャンパス西部のランドマークである



19. 産業科学研究所アプローチ周辺
緑と広がりのあるオープンスペースをもっている



20. 工学部中庭
人々に安らぎの景観を与えている



3. キャンパスマスタープランに対する期待と評価検証 3-1. キャンパスマスタープラン作成時の調査・意見集約

平成16(2004)年の策定作業時から平成24(2012)年現在までの、キャンパスマスタープランに関連する各種調査等の概略結果とそのまとめを順を追って解説(3-1、3-2節)したのち、平成24年現在の意見集約(3-3節)結果をまとめる。これと合わせて、これまでの整備成果との関係を概観・検証したうえで、キャンパスマスタープランへの期待と評価検証をまとめる(3-4節)。

3-1. キャンパスマスタープラン策定作業時の調査・意見集約

キャンパスマスタープランを作成立案するにあたって、豊中・吹田地区の構成員や地域住民を対象としたアンケート調査と、各キャンパスのワーキングメンバーに対するヒアリング調査を行っている。

さらに、平成19年の大阪外国語大学との統合をうけて、平成20年にも、箕面キャンパスマスタープランを策定するためのアンケート調査等を、箕面地区の構成員と近隣住民を対象に行っている。

3-1-1. 豊中・吹田キャンパスアンケート調査(平成16(2004)年)

<調査概要>

平成16年10～11月にハガキ配布とインターネットによるアンケートを実施した。回答数は364、うち大学構成員は80%、それ以外が20%であり、当時の大学構成員の約1.4%に相当する。回答者の活動地区の割合は、吹田31%、豊中48%、両方が10%であり、吹田地区の方が、教職員の割合が、豊中地区よりも多かった。

<調査結果>

a. メンテナンス・マネジメントへの要求と期待

- ・ 食堂、トイレの充実、滞留スペースの確保、外部空間の充実、駐車駐輪場の整備、清掃、植栽などの維持管理に関する意見が多く、従来はメインと考えてこなかったジャンルであった。
- ・ 建物の老朽化に対する不満よりも維持管理の不十分なことによる汚さや、ゴミ処理に対する苦情を指摘する意見が見られた。

b. キャンパス計画への期待の全体的な傾向

- ・ 「キャンパスであなたが最もくつろげる場所」に対する回答で、「職場(研究室等)」、「豊中附属図書館(現総合図書館)」が多くを占めたのは、それ以外に「くつろげる場所」が阪大にいかにも不足しているかを物語っている。
- ・ 「阪大のシンボルといえば何をイメージしますか」に対する回答で、「イチョウ」という回答が他を圧して占めたのは、阪大にシンボルとなるような魅力的な建物がないという事実を示している。なお、3位であったイ号館は平成23年に、大阪大学会館として生まれ変わり、周辺広場の整備と合わせて、より強いシンボル性格を獲得している。
- ・ 「阪大キャンパスを魅力的にするためには何が重要だと思いますか」への回答では、「きれいでおしゃれな飲食店」が、「シンボリックな建物」、「芝生の大きな広場」を引き離しており、身近で、楽しく、現実性のある環境へのベーシックな欲求を示している。
- ・ 「その他阪大について日頃感じていることについて具体的に書いてください」への回答の「食堂の充実が必要」、「憩える施設・場の整備」にも、キャンパスへの最も基本的な期待が現れている。
- ・ 「あなたのお気に入りの場所・風景はどこですか」に対する回答では「共通教育前広場」、「大阪大学会館からの眺め」「待兼池周辺」と意見が分かれた。
- ・ 「これからの大学に何を期待しますか」への回答には「開かれた大学」「地域との交流」といった答えが多数を占めた。
- ・ 全体的に見て魅力のある場所、お気に入りの場所は的確に捉えられている。無いという否定的な意見も多いが、ポテンシャルのある場所はそれなりによく認識されていると判断できる。そのポテンシャルを活かす工夫が必要で、そのためにはハード整備だけではなくソフト対策も重要である。
- ・ 魅力のある場所、お気に入りの場所は、キャンパス全体で見れば「図」として浮き上がって見える部分である。これに対して「地」としてのきめ細かい対応の重要性の指摘も多い。「自然を活かすこと」、「その状態を良好に保つべきこと」、「公共・共用部分のメンテナンス・清掃等を適切にすること」などに意見があり環境整備上は極めて重要な指摘である。

3-1-2. 豊中・吹田各キャンパスワーキングでの意見(平成16(2004)年)

a. 豊中地区

- ・ 大学が何を望んでいるかの議論が大切である。
- ・ 歩行者が裏道のような汚いイメージのある環境(柴原口～基礎工裏)を歩いている。
- ・ 学生が集まる屋外の場所が少ない。建物中心の計画が先行しており広場計画が欠けている。
- ・ ここには建物を建てないで空地を残すという計画が大切ではないか。
- ・ 施設の整備計画と同様に施設の改築計画も大切ではないか。これ以上緑地、駐車場のスペースを無くしてよいのか。
- ・ 会議場、ゲストハウスの必要性、旧医短跡地の活用、歴史的建造物の保全と活用
- ・ 運動施設の拡充
- ・ コミュニティ・キャンパスの実現ー「ユニバーシティ・ミュージアム」(総合学術博物館の活用)
- ・ 両キャンパスの「自然環境の開放」
- ・ 知的財産(図書や学術標本など)の保存の重要性

b. 吹田地区

- ・ 外部からのアイデア募集、コンペの実施等が考えられないか、またマスコミも巻き込んで作成。
- ・ 建物計画よりもキャンパスにおける道路、駐車場、駐輪場、広場、植栽、及び建物と建物を繋ぐ空間をどう構築するのが大切である。
- ・ 学生、教職員の健康増進を図るような施設(ジム等)
- ・ 大学の顔となるようなものが必要であり、現在の阪大にはそのような施設がない。
- ・ 学生の溜まり場、学生が長く大学に滞在するような場の整備が必要である。また夜間に利用できる施設も大切。利用にあたっては学生のモラル教育も大切となる。
- ・ 理念目標の設定はよいことであり、これまでの計画に比べ次元が高くなった。
- ・ ばらばらな施設整備にならないように、デザインの統一を図ることが大切
- ・ 犬飼池周辺を公園あるいは憩いの広場に
- ・ 豊中キャンパスー千里中央ー吹田キャンパスーJR茨木間の回遊バス
- ・ 民博との協調
- ・ 阪大病院前を地域住民が徒歩で進入可能な交流空間、ビオトープ回遊庭園にする。阪大が駅ビル機能をもつ建物を作った方がよい。

3-1-3. キャンパスマスタープランの中核とすべき考え方(平成17(2005)年)

以上の調査・ヒアリングを元に、平成17(2005)年度のキャンパスマスタープラン策定ワーキングメンバーは、下記の5項目を重視することとした。

A. 長期的指針と短期的にすぐに取り組む部分の明確化

土地利用計画など長期的に取り組む部分と、すぐに着手できるもの、必要最低限として整えるべきものを明示。土地利用計画は、緑地、道路、駐車場・駐輪場を有効に整備する方針を明示することで、いわば乱開発を未然に防ぐ。

B. キャンパスにおける魅力の核、シンボリック空間の形成

シンボリック空間は、

- ①人の活動との適合、
- ②意味性(歴史性、記念性やメッセージ性)
- ③形態の個性(色、形、周囲の風景とのコントラスト)
- ④空間の広がり

の4要素が重要であり、「くつろげる場所」、「歴史・伝統・研究・先進性の表現」、「おしゃれな建物」、「芝生広場」等と一体的に、キャンパスの全体構成に則して考える。

◇イメージの骨格(パス、ノード、ランドマーク)をつくる。



3-2. その後の関連する各種調査

C. 交通計画の方針の明確化

(1) すべての人が安全に快適に移動できる空間形成

◇施設整備

- ・自転車駐輪場の分散配置
- ・自動車駐車場の周辺配置（歩行者、自転車と自動車との交錯回避）
- ・空間の機能に合わせた道路空間の再配分
- ・バリアフリー化された道路と施設へのアクセス

◇啓発・教育

- ・自転車マナーの周知徹底等

(2) 利便性の高い環境づくり

◇キャンパス間連絡バスのサービス向上

◇キャンパス内の移動、自転車の利用

D. 賑わい、交流の核の形成

- ・レストランやカフェ、コンビニ、書店などに民間企業を誘致し、福利厚生面を充実させ周辺地域の住民も気軽に訪れるようにする。
- ・書店には専門書を充実させ、本を座って茶を飲みながら読めるようにしたり、セミナー室等を併設して公開講座を開くなどで、地域に開かれた大学をアピールする。

E. 自然資源を活かした魅力の形成

◇活かすことのできる緑空間の把握

- ・骨格となる緑地（街路樹、路傍の低木など）にはシンボリックな性格を持たせる。
- ・法面緑地、その他の緑地についても整備のガイドラインを作る。

3-1-4. 箕面キャンパスでの調査（平成20（2008）年）

箕面キャンパスマスタープラン策定にあたっては、構成員、地域住民へのヒアリングやアンケート調査（10～12月、合計回答数585通）が実施された。詳細は「箕面キャンパスマスタープラン」2章を参照されたい。ここでは2-1-4節「意見聴取のまとめとマスタープランへの援用」から抜粋引用する。

a. キャンパスのアイデンティティ・個性・シンボル

キャンパスのイメージに関しては、中庭・大階段（通称：墓石階段）に関するものが支配的であった。また眺望・夜景に関する記述が非常に多く、これらを活かす計画が今後も必要である。

b. 現在のキャンパスのよいところ

「まとまりあるコンパクトなキャンパス」、「地域との交流が盛ん」、「眺望のよい地形」、「緑が豊か」といったイメージがあることがわかった。

c. 維持管理、特にプリメンテナンスの重要性

維持管理に関する回答は大きな比重を占めており、改めて維持管理の重要性が確認できた。

d. 全体イメージコンセプトへのヒント

「明るく、かつ静かで、活気がある」というイメージコンセプトを導き出すことが可能で、コンパクトなキャンパス・眺望の良い地形・緑が豊かといった条件ともに良く合うと思われる。

3-2. その後の関連する各種調査

3-2-1. 交通安全アンケート（平成22（2010）年6月）

キャンパス内の交通安全対策を有効に実施するため、危険箇所、要因、通勤通学に用いる交通機関、概略居住地域を問うことと同時に、バスロータリー+集約駐輪場計画案(当時案、現在は凍結)、ならびに自転車有料登録制(当時案、現在は凍結)への賛否を問う、ハガキ配布形式のアンケートを行った。

合計回答489通（豊中152、吹田296、箕面41）。なお、豊中・吹田では概ね有効なサンプルが得られたが、回答が教職員に偏っていること、配布方法に問題があり、特に箕面では学生の回答が0%であったことは注意を要する。以下に得られた意見・知見の概略をまとめる。なお6章でも、キャンパス内各所の危険要因を指摘する意見をまとめている。

- 各キャンパスの危険個所のプロットと危険要因まとめが得られた（6-1節参照）。
- 自転車入構規制案について、利便性低下（通学、学内移動）に対する反発が極めて大きい。自転車有料登録制案に対する反発も大きい。
- 集約駐輪場建設自体に関しては賛否が分かれるが、駐輪場の分散配置と十分な容量が求められている。
- バスロータリー建設の必要性は認知されているが、位置については賛否がやや分かれる。駐輪場問題を別にすれば、理学部前案に対する賛成は、反対よりも多い。
- バス・自転車の危険性は概ね認知されているが、駐輪は景観上の問題とは考えられていない。
- 自転車入構規制・有料登録制に関して、不正を防ぎきれない・制度運用に失敗する、という意見が多い。
- 自転車入構規制・有料登録制を導入した場合、周辺地域への悪影響が懸念される、という意見も多い。
- 自転車よりも自動車・バイクを規制するのが先決、という意見が多い。
- 自転車レーン（歩行者/自転車分離、特に阪大坂）を求める意見が多い。
※阪大坂を歩行者/自転車分離にした場合、自転車の速度が上がり、死亡事故の発生が充分想定される。
- 阪大坂入構規制（H18年実施）に対して、現在でも反発が大きく、意義が理解されていない。
- 本アンケートの情報提示、告知の方法、大学の整備姿勢などに対する不信感が非常に大きい。

3-2-2. 第22回学生生活調査（平成22（2010）年）

学生生活委員会ではほぼ4年おきに、学部学生および大学院学生の経済状態、生活環境、健康状態、修学状況、課外活動、就職活動等を中心に、学生生活の実態や意識・要望を把握するための調査を、継続実施している。第22回調査では、特に各種広報で周知を計った上でインターネットにより学部学生2297名、大学院生693名からの回答を得た。

以下に、キャンパス計画に関連すると考えられる項目を挙げる。

a. 通学状況

・通学手段

学部生・大学院生ともに公共交通機関・自転車・徒歩が全体の8割を占め、前回の調査よりも自動二輪・原付や自動車の割合が減少しており、経済的な状況が関係していると考えられる。

・通学所要時間

学部生・大学院生ともに下宿生はほとんどが30分未満であり、自宅生はほぼ全員が30分以上かかるという結果になり、全体的に前回の調査と変わらない結果である。

・車両所有、使用

前回の調査と比較して運転免許を取得していない割合が増加している。特に、学部生では自動車の取得割合が大きく減少している。また自由に使用できる自動車の割合も大きく減少し、バイクについては大学院生では変化が少なかったが、学部生では減少している。

・土日通学

文系よりも理系の方が土曜日に登校する学生が多く、大学院生の方が学部生より多い。日曜日も土曜日と同様だが、全体的に登校する学生の割合が減少する。

b. 授業の合間に過ごす場所

学部生では教室等・図書館・食堂等で過ごす割合が多く、前回の調査に比べて教室等が10%以上も減少し、その分図書館が増加している。大学院生では教室等で過ごす人がほとんどだが、前年に比べ教室等は若干減少し、その分図書館やコンピュータ室がわずかに増加している。

c. 食生活の状況

・主に利用する学生食堂

豊中では図書館下食堂の割合がその他のものに比べて多い。吹田では工学部学生食堂ファミールの割合が多いが、これは工学部の学生数が多いからだと考えられる。箕面では箕面福利会館レインボーの割合が多くなっている。

・学生食堂の食事内容の満足度

回答数が非常に少ないものを除いて、ほとんどの食堂で満足している学生が50%以上を占める。食事内容が美味しくないという不満が減少している反面、品数が限られている、値段が高いという不満は増加している。

・学内食堂での待ち時間

全ての食堂において待ち時間は5分程度であるが、学内食堂の好ましくない点として学部生、大学院生ともに「混雑していること」が多く挙げられており、待ち時間に関して不満をもっている学生は多い。

・学内食堂の快適度

少数意見を除いて、ほとんどの食堂で満足している学生が50%以上を占める。しかし、工学部学生食堂ファミールは、どちらとも言えないと回答している学生が40%を占めており、他の食堂に比べて快適度は低いと言える。



3-2. その後の関連する各種調査（その2）

- d. **キャンパスへの意見（自由記述）**
 「図書館の開館時間を長くしてほしい」「24時間利用できる施設がほしい」「整備されていない部分が多い」「各キャンパス間での格差が激しい」「建物が汚い」などの意見があった。
- e. **授業出席状況**
 70%強が「9割以上出席している」、10数%が「7割以上出席している」と回答している。ただ学生調査に回答する学生は比較的大学生活へのコミットメントが大きく、出席率が高いということもあり得る。この出席率は、教員の実感よりは多少高いという印象がある。また、1、2年時の方が3年生以上より多少出席率が良い傾向が見られる。
- f. **施設・設備の満足度**
- ・教育用施設・設備
 全体として教育用施設・設備等には50%以上の学生が満足している。しかし吹田・箕面キャンパスの学生からは、建物自体が古く汚い、設備の充実度における豊中キャンパスとの格差が大きいという意見が挙げられている。
 - ・研究用施設・設備
 50%以上の学生が満足している。しかし、泊まり込みで研究をする学生が多いため、研究室の狭さや衛生面、設備の整備の不十分さなどが指摘されている。また外部の音がうるさいという苦情も多い。
- g. **サークル活動**
 学内外でサークル活動をしている学生は増加傾向である。文化系と体育系のサークルに加入している学生の割合はほぼ拮抗しているが、前回調査に比べ、体育系サークルに加入している学生の割合はかなり低下している。サークルが不満足である理由として「施設が足りない」「自分の時間がもてなくなる」「施設が自由に使えない」であり、施設関係の不満が多い。
- h. **ボランティア活動**
 ボランティア活動を経験している学生は増加傾向であり、活動内容は「地域社会での奉仕活動」が際だっている。また経験のない学生も半数程度がボランティア活動に関心を持っており、特に女子にその傾向が強い。活動の感想としては、肯定的に評価する感想が大半を占めているが、活動と学業・自分の生活とのバランスに悩む感想や、活動は自己満足に過ぎないのではないかと、懐疑的に見る感想もいくつかあった。
- i. **研究室について（大学院生のみ。スペース満足度、施設満足度）**
 研究体的におおむね肯定的な評価がなされていた。ただし、研究スペースや施設設備について理系学生よりも文系学生の方が不満度が高い。
- j. **学内連絡バス（利用率、ダイヤ・土日運行、要望）**
 全体の30%がバスを利用している。回答のあった外国語学部生のほとんどが「少ない」もしくは「時間帯によって工夫が必要」と評価している。土曜日や授業休業期間のスクールバスの運行を希望する学生は多いが、現在のスクールバスの利用状況を考えると、土日の利用者は少ないと推測される。要望としては、「授業の時間割に合わせた運行スケジュールの改善」「運行時間の延長」「朝夕等の混雑の緩和」「豊中―吹田―箕面便の本数が少ない」「土日祝の運行」「豊中―箕面直通バスの開通」などが挙げられていた。
- k. **その他要望**
 「自転車で校内に入れない所があり不便」「路面状況が悪い」「学生食堂の混雑の緩和」「教室が汚い」「図書館を24時間開館してほしい」「建物が古い」等がある。



3-2-3. 留学生生活調査（平成22（2010）年）

平成21年から始動した「留学生30万人計画」とその中核施策である「国際化拠点整備事業」の一環として、留学生受入れ体制や留学生サポートの現状を把握し、5年後に事業成果を評価する前提として、事業開始時の留学生受入れ体制や留学生サポートに関する現状把握を目的に行った調査である。全留学生に対して5割を越える回収率（有効回答数842）を得ている。

- a. **食堂**
 「満足」および「非常に満足」の割合が、55.6%で少し不満、非常に不満の割合が、15.4%となっている。
- b. **店舗**
 購買部については、60%以上の留学生が満足と答え、不満に思う留学生は全体の9%あまりである。書店においては60%以上の留学生が満足しており、不満は7%程度である。購買部、書店ともに満足度が高い。
- c. **安全性** … 80%程度の留学生が満足。不満は全体の2%程度。
- d. **案内サイン** … 60%程度の留学生が満足。不満は全体の10%程度。
- e. **キャンパス間移動** … 60%以上の留学生が満足。不満は全体の10%程度。
- f. **その他自由意見では、下記に対する要望や意見が見られた。**
- ・留学生宿舎の不足、24時間使える自習室や一人で集中できるスペースの必要性
 - ・図書館の利用時間延長・土日利用・英文専門書や参考書の充実・返却期限延長
 - ・ハラル（イスラム教で認められた）メニュー、健康的で（野菜が多い）安いメニュー、食堂営業時間の延長
 - ・コンビニの充実、ファーストフード、営業時間、生協商品の低価格化
 - ・フィットネス、プール、テニスコート等、運動施設の充実と、自由に個人利用できること



3-2-4. キャンパスイメージアンケート（平成23（2011）年1月）

キャンパス整備の成果を今後継続的に追跡調査するために、キャンパスの屋外空間の全体的なイメージ、および近年行われた屋外空間改修の、キャンパス環境向上への寄与の程度について、ハガキ配布とホームページで調査し、回答数330（豊中150、吹田122、箕面58）を得た。以下に結果まとめを示す。

- a. **キャンパス全体のイメージについて**
 表a.の通り、案内標識類（サイン）のわかりやすさや、バリアフリー、美しさ、居心地の良さなど、キャンパス全体についての満足度が得られた。
- b. **屋外空間改修のキャンパス環境向上への寄与の程度**
 表b.の通り、平成19年度以降の各所整備について、通行しやすさ、居心地の良さ、利便さなど、整備目的に応じた環境向上の満足度を得ることができた。
- c. **自由記述において、以下の意見が得られた。**

豊中キャンパス

- ・建物の統一感に欠ける
- ・キャンパスが狭い（狭隘）
- ・大学を代表するモニュメント的な建物がない
- ・憩いの場が少ない
- ・東口通路が狭く通りにくい、階段が滑りやすく危険
- ・自転車、バイク、自動車の交通マナーが悪く危険
- ・迷惑駐車が多い
- ・外灯が少なく暗い、盗難が多い、夜間の人の出入り制限がない等の防犯上の問題がある
- ・案内標識が分かりにくい
- ・スロープ斜度がきつい、石畳が歩きにくい等の、バリアフリー上の問題がある
- ・清掃状況や植栽の維持管理状況が悪い
- ・喫煙マナーが悪い

吹田キャンパス

- ・建物の統一感に欠ける
- ・車中心のキャンパスで、歩行者や自転車が移動しにくい
- ・建物の老朽化に対する意見が多い
- ・自転車、バイク、自動車の交通マナーが悪く危険
- ・外灯が少なく暗い、盗難が多い等の防犯上の問題がある
- ・案内標識が分かりにくい、自動車誘導標識が分かりにくい
- ・段差が多い、歩道の路面状態が悪い等のバリアフリー上の問題がある
- ・清掃状況や植栽の維持管理状況が悪い
- ・喫煙マナーが悪い
- ・食堂の混雑を改善してほしい

箕面キャンパス

- ・他のキャンパスに比べ閉鎖的、活気がない、暗いイメージである
- ・建物の老朽化に対する意見が多い
- ・憩いの場が少ない
- ・外灯が少なく暗い等の防犯上の問題がある
- ・階段や段差が多い等のバリアフリー上の問題がある
- ・スクールバスを増便してほしい

表a. キャンパスの屋外空間の全体的なイメージについての満足度

	豊中		吹田		箕面		全体	
	満足度	加重平均満足点	満足度	加重平均満足点	満足度	加重平均満足点	満足度	加重平均満足点
1)入りやすい雰囲気かどうか	59%	0.7	42%	0.3	22%	▲0.6	46%	0.2
2)キャンパス全体における案内標識類(サイン)について	39%	0.0	25%	▲0.4	28%	▲0.4	32%	▲0.2
3)防犯上の問題について	21%	▲0.4	17%	▲0.4	14%	▲1.0	18%	▲0.5
4)歩行者のバリアフリー(車椅子・杖・重たい荷物をもったときなど)の危険性や不便さ	32%	▲0.1	22%	▲0.5	14%	▲1.1	25%	▲0.4
5)美しさについて	43%	0.1	36%	▲0.1	34%	▲0.2	39%	▲0.0
6)親しみやすさについて	52%	0.4	21%	▲0.2	38%	▲0.2	38%	0.1
7)居心地の良さについて	61%	0.5	31%	▲0.0	40%	▲0.1	46%	0.2
8)清掃の状況について	73%	0.9	49%	0.4	50%	0.3	60%	0.6
9)樹木などの剪定や除草などの状態について	69%	0.8	48%	0.4	62%	0.7	60%	0.6
10)キャンパス内でのマナー(学生・教職員・その他の方々)について	45%	0.2	31%	0.1	53%	0.6	41%	0.2
平均値	49%	0.3	32%	▲0.1	36%	▲0.2	41%	0.1

表b. 近年行われた屋外空間整備・改修の、キャンパス環境向上への寄与の程度についての満足度

整備・改修項目	利便性・快適性				美しさ		
	回答数	アンケート事項	満足度	加重平均満足点	回答数	満足度	加重平均満足点
1)文法経中通り周辺(平成21年度整備)	141	通行しやすさ	75%	1.2	135	82%	1.4
2)チューデント commons 南側(平成21年度整備)	132	居心地の良さ	55%	0.8	129	67%	1.0
3)東口(平成20年度整備)	125	通行しやすさ	54%	0.7	125	62%	0.9
4)豊中総合学館1階ビロティ(平成19年度整備)	129	居心地の良さ	50%	0.5	130	57%	0.7
5)理工学図書館改修(ビロティ)(平成20年度整備)	91	居心地の良さ	65%	1.0	90	71%	1.1
6)病院北通り歩道整備(平成21年度整備)	81	通行しやすさ	43%	0.4	79	49%	0.6
7)U3棟エレベーター新設及び周辺手摺設置	79	利便さ	39%	0.4	79	46%	0.4
8)ウエストフロント新築(郵便局等、平成19年度整備)	86	利便さ	64%	0.8	82	78%	1.2
9)彩都口整備(平成21年度整備)	50	通行しやすさ	56%	0.6	49	59%	0.8
10)各所バリアフリー化(スロープ・扉改修等)整備(平成21年度整備)	51	通行しやすさ	49%	0.6	51	37%	0.4
平均値	-	-	55%	0.7	-	61%	0.9



3-3. 平成23(2011)年の評価・点検

平成23(2011)年に、策定から6年が経過した大阪大学キャンパスマスタープランを全体的に評価・点検するため、豊中・吹田両キャンパスの各部局の施設関係担当・委員に対して、ヒアリングを行った。なお、箕面キャンパスでは、平成19年に同様のヒアリングを行っているため、今回は調査していない。その結果、下記および右表に示す通り、大きく10の項目に分類することができた(各部局個別の問題や要望等は、割愛している)。

1. 広場等の場所性の豊かさ
2. シンボル性やイメージ等
3. 福利施設等
4. 構内交通安全やバリアフリーの問題
5. 防犯対策
6. サインや案内の分かり易さ
7. 建物全般・維持管理
8. 樹木の維持管理等
9. 通学・通勤の利便性(バスの要望等)
10. その他

特に 10. その他には、キャンパス全体の計画にかかわる、下記のような注目すべき指摘があった。

- A. 長期的(20~30年)観点で、病院を含むキャンパス全体の建替えや再編の計画が必要
- B. 広域の防災拠点の観点を盛り込むこと
および
防災の観点からオープンスペースの整備と保全が必要
- C. 地域住民コミュニティとの関わりを深めていくこと
および
「地域に生き世界に伸びる」の理念から、門や遊水池などの位置づけを明確にし、地域との関わりを深める必要性
- D. 省エネや低炭素化の理念を強調する必要がある

3-4. 期待と評価検証のまとめ

前節までの各調査や評価・点検と、平成17(2005)年以来の整備など、キャンパスマスタープランに基づく成果を、次ページの一覧表にまとめた。本キャンパスマスタープラン(平成24(2012)年 部分改定版)は、これらを元にして改定作業を行っている。すぐに対処することが困難な諸問題については、今後の課題として8章にまとめ、次期の全面改訂時に一定の方向性を示すこととする。

豊中・吹田両キャンパスでのヒアリング結果まとめ(平成23(2011)年10月)

分類項目	豊中キャンパス	吹田キャンパス
1. 広場等の場所性の豊かさ	<ul style="list-style-type: none"> 待兼山庭園へ散策路や休憩所をつくるよ 豊中保健センターには学生が使える多目的スペースがあり、利用者に喜ばれている 学生がスポーツできる場所 基礎工学部卓球場付近 	<ul style="list-style-type: none"> 芝生広場、ベンチ、スチューデントコモンズ等が必要 吹田にも学生が自由に使えるスペース(豊中保健センターのような)が必要 体育施設を充実して欲しい
2. シンボル性やイメージ等	<ul style="list-style-type: none"> 総合学術博物館周辺は歴史と自然ゾーンである 大阪大学会館はシンボルとして浸透しておらず、シンボルとなる建物が無い。 大阪大学会館の外壁色が悪いとの意見がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 千里門整備を心待ちにしている 近年整備された新棟は統一的外観デザインとなっている
3. 福利施設等	<ul style="list-style-type: none"> 食堂の充実 その他の福利施設や全般について 	<ul style="list-style-type: none"> 社研付近には食堂がない 温水プールやジム、外国人や老若男女が使えるものをソフトウエア(音楽会等)の充実が必要 深夜や早朝の営業をしてほしい コンビニの設置を求める キャンパス南東部に福利施設を
4. 構内交通安全やバリアフリー等	<ul style="list-style-type: none"> 動線の交錯 駐輪問題 駐車場問題 道路構造や構成、バリアフリーなど 	<ul style="list-style-type: none"> 幹線道路から人科駐車場へ入る箇所は視界が悪い 言語文化研究科北側で駐輪がひどい 自転車置き場の整備を求める 幹線通り沿い駐輪場一杯で放置自転車が多い 施設建設の際、駐輪場の整備目標値(付置義務)が必要 駐車スペースが足りない 施設建設の際、駐車場の整備目標値(付置義務)が必要 微研裏側は法面造成で駐車場を造り同時に緑化した 外来患者数は当初想定1.5倍となり駐車場の全体計画が必要 千里門の信号が時差式になったが、逆に渋滞が増えた 道路幅と右折レーン設置が望ましい 北門を今のまま開閉すると、事故が予想される。北門はバス専用として開閉することも考えられる。開かれたキャンパスを目指してほしい 北門から車が入構できるようになれば、周辺の有効活用と東門の渋滞解消に期待できる 本部前福利会館近くのハンパの段差が大きい H23に整備した医病前ロータリーにより、渋滞が解消した 外灯を増設して欲しい。特に駐車場
5. 防犯対策	<ul style="list-style-type: none"> 屋外照明設置要望 セキュリティシステム その他防犯 	<ul style="list-style-type: none"> 外灯を増設工事が実施されたが、まだ暗い場所がある 学部と病院の間でIDカードセキュリティが欲しい 部局を超えたセキュリティカードの統一が必要 キャンパス入構に関して、関係者以外立入禁止と看板にあるが、実際は黙認。整合性が必要
6. サイン(案内表示)の分かり易さ	<ul style="list-style-type: none"> 外来者にはわかりやすい統一の館名看板を整備 建物名称の変更(豊中総合学館)に関し周知が必要 	<ul style="list-style-type: none"> サインの改善を求める 案内サインに表記がない部局名がある 保健センターに来る人が迷う
7. 建物全般・維持管理	<ul style="list-style-type: none"> 講義室の大きさが不適切 全学生を収容できる講義室がない ゲストルームが不足している 法経講義棟周辺の建物が老朽化している 文法経本館は、現行バリアフリー基準を満たしていない 法学、高等司法では研究室と講義室が混在しているため、各講義室の防音対策が必要である 大雨時、正門近くの側溝から2~3日水が溢れていた 	<ul style="list-style-type: none"> 施設の老朽化が目立つ 細胞棟の老朽・狭域化が進んでいる。トイレの改修や省エネ対策のためフィルム貼りを実施した 空調設備の更新、プレハブ棟の取り扱い問題がある
8. 樹木の維持管理等	<ul style="list-style-type: none"> 維持管理 保全 	<ul style="list-style-type: none"> 調整池が含まれる部局では、雑草管理が大変 池や竹やぶなどの緑の維持管理をお願いしたい 芝生の除草を年2~3回実施。建物維持管理に経費がかかり、建物裏側の剪定等が実施できない。緑地管理費の捻出に苦労する。全学で実施して欲しい 薬用植物園の維持管理に苦勞している 最近竹林が無くなった箇所がある。緑化を望む。 情報科学研究科周辺では外構の緑化整備を進めている バス停に屋根を設置してほしい 通勤バスが廃止され、非常勤は交通費支給がないので、コミュニティバスがほしい コミュニティバスは患者利用の想定が必要。北千里~歯病~医病~モルニール駅がよい 医病~歯病への患者は160人/日。医療循環バスを要望
9. 通学・通勤の利便性(バスに対する要望)	<ul style="list-style-type: none"> 学生からスクールバスの増便要望がある 	<ul style="list-style-type: none"> 地域住民コミュニティとの関わりを深めていくことが必要 長期的(20~30年)観点で、病院を含むキャンパス全体の建替えや再編の計画が必要 防災の観点からオープンスペースの整備と保全が必要 「地域に生き...」の理念から、門や遊水池の位置づけを明確にし、地域との関わりを深める必要がある 広域の防災拠点の観点をCMPに記載してはどうか 省エネや低炭素化の理念をCMPに入れて欲しい 貯水池や樹林地が近くにあるため、虫が多い ここ1~2年でキャンパス空間がきれいになった
10. その他	<ul style="list-style-type: none"> サークル棟の騒音の問題がある 言語文化研究科北側で騒音(学生の話し声)の問題が出ないように、配慮してほしい カラスが多いので糞を駆除して欲しい 公共性の高い建物には無線LAN設備の設置を望む 	



3-4. 期待と運用評価・検証のまとめ

表. 構成員の意見概要とマスタープランの目標達成度一覧

略号 : CMP キャンパスマスタープラン LDP リーディングプロジェクト DGL デザインガイドライン (豊) 豊中キャンパス (吹) 吹田キャンパス

分類項目	2004~2011年調査で共通の構成員意見	左記の意見等の達成度	2010・2011年調査で顕著な構成員の意見	左記の意見等の達成度	マスタープラン(2005年豊中・吹田、2009年箕面)で設定した目標等	CMPで設定した目標等の達成度	具体的な達成内容	備考	
1. 広場等の場所性の豊かさ	集える空間、くつろげる空間	<ul style="list-style-type: none"> ・屋外の広場、芝生の広場が欲しい ・カフェなどがほしい ・集い憩えるスペースが少ない欲しい ・きれいでおしゃれな食堂が欲しい 	△ × △ △ ×	・スチューデントコモンズのような場所がもっとほしい	△	○ ○ ○ △ × × × × × × △ △ × △ × △	○ ○ ○ △ × × △ △ △ △ △ △ △ △ △ △	中山池周辺整備 学生交流棟北側広場整備 豊中東口整備 文法経中通り整備 大阪大学会館整備 各キャンパス屋外パリアフリー整備 箕面キャンパス北側整備 箕面キャンパス彩都口整備	
	余裕ある活動空間	・スペースの充実を望む	×	・体育施設	×				
	未利用地有効利用	・一部に十分活用できていない土地がある	△						
2. シンボル性やイメージ等	<ul style="list-style-type: none"> ・シンボルとなる建物がない、 ・統一感がない、雑然とした、殺風景な印象 ・柴原口は酷い、豊中東口は狭い(豊) 	△ △ △	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪大学会館はシンボルとして十分浸透していない ・近年の建物は統一感ある ・文系中通りは良くなった ・ゲートが迎え入れる雰囲気でない、千里門整備に期待(吹) 	△ ○ ○ ○ △	<ul style="list-style-type: none"> DGL オープンスペースとの連続性 DGL 景観の文脈の尊重 DGL 図/地となるべき建物 DGL リニューアル成果の表現 DGL 共通・交流スペース充実 DGL キャンパス骨格との整合 DGL 建物と街路の関係性 	△	具体整備物件ではDGLに即して計画している		
3. 福利施設等	食堂の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・食堂の混雑を解消、日曜も営業してほしい ・ゲストを招くことができるレストランが必要 	× ×	・周辺に飲食店がなく、食事できる場所がない	×			総合図書館下食堂改修 スチューデントコモンズ設置(改修)	
	その他の福利施設や全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・温水プールやジム、外国人や老若男女が使えるものを ・ソフトウェア(音楽会等)の充実が必要 ・コンビニの設置、深夜や早朝の営業をしてほしい 	× △ △	・ショートステイ留学生の宿舎などが必要	△	LDP 吹田キャンパスライフロア(豊中や箕面の目標設定は無し)	×	春日丘ハウス整備 21世紀徳徳堂などの活動	
4. 構内交通安全やバリアフリー等	動線の交錯	・自動車、自転車、人の動線を分離すべき	△	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館前でバスと歩行者が交錯→ローラー必要(豊) ・体育会部室前で学生と車が交錯する(豊) 	× ×	<ul style="list-style-type: none"> 豊中キャンパスの歩行者優先強化 吹田キャンパスの交通網整理 箕面キャンパスのバス環境改善 LDP 箕面キャンパスの新北門整備 	△ ○ △ ×	車両入構規制 吹田東門(医病前)動線改善 バス停上屋設置	
	駐輪など、自転車の問題	・駐輪場が不足している、十分な数を適切な場所に	×	<ul style="list-style-type: none"> ・施設建設の際、駐輪場の整備目標値(付置義務)が必要 ・自転車やバイクマナーが劣悪、阪大規制が理解不能 	× ×	(分散駐輪場設置 → 方針再検討の必要が発生)	×	交通マナー教育	
	駐車場や自動車などの問題			<ul style="list-style-type: none"> ・環境面からも自動車こそ入構規制を強化すべき ・施設建設の際、駐車場の整備目標値(付置義務)が必要 ・立体駐車場が必要、入構料により整備すべき(豊) ・外来患者の駐車場の充足が必要(吹) 	△ × × △	(立体駐車場設置 → 方針再検討の必要が発生)	△	車両入構規制 医学部立体駐車場 歯病駐車場改修 吹田共用駐車場整備	
道路構造や構成、バリアフリーなど	・車両進入禁止障害物が歩行者やバリアフリーの障害となる	△	<ul style="list-style-type: none"> ・阪大坂や東口など、破損や滑りやすい場所がある(豊) ・阪大坂は夏の日射が厳しい、木陰や休憩所が欲しい(豊) ・千里門渋滞改善や北門活用が必要(吹) ・H23にできた医病前整備は効果大だった(吹) ・歩行者経路に段差が非常に多い(吹) ・液体窒素等の寒剤運搬が不便で危険 	△ × △ ○ △ △ △	(バリアフリーとサインのフレームワークプランが策定された)	△	バリアフリーとサインのフレームワークプランを策定 阪大坂下並木等整備 吹田さくら環状(工学部北側)通り歩道等整備		
5. 防犯対策	屋外照明設置要望		・まだまだ外灯が足りなく暗い場所がある	△	◇	△	△	各キャンパス外灯増設	
	セキュリティシステム		・セキュリティと学外者立入に関して考え方の整理が必要	◇	◇	×	×	セキュリティの検討	
	その他防犯		<ul style="list-style-type: none"> ・暗い場所や、繁みが多い ・盗難が多い 	△ ◇	◇ ◇	△ △	△ △	各キャンパス外灯増設	
6. サイン(案内表示)の分かり易さなど	・外来者にわかりやすい統一的館名看板が必要	△	<ul style="list-style-type: none"> ・建物名称の変更に関し周知が必要 ・キャンパス全域がわかる地図が少ない 	△ △	(バリアフリーとサインのフレームワークプランが策定された)	○	各キャンパスサイン(案内板類)改修整備		
7. 建物全般・維持管理	<ul style="list-style-type: none"> ・現行バリアフリー基準を満たしていない建物がある ・清掃や塗装等のメンテが行き届いていない場所がある ・特にトイレがきたない 	△ △ △	<ul style="list-style-type: none"> ・老朽化が激しい建物が多い、特に学生生活の建物 ・講義室の大きさ、ゲストルームが無いこと、狭小化も問題 ・無線LAN等の設置を望む ・図書館の開館時間を延長を望む 	× △ △ ×	(維持保全マニュアルが策定された)	△	維持管理マニュアルが運用されはじめています		
8. 樹木の維持管理・保全等	<ul style="list-style-type: none"> ・剪定などの維持管理を充分できていない ・緑地の保全をはかるべき 	△ △	<ul style="list-style-type: none"> ・緑の維持管理はある程度一括発注されているが発注漏れや境界部、樹林地等のバランスが悪いなど問題がある 	△	(緑のフレームワークプランが策定された)	△	緑のフレームワークプランを元にした維持管理の最適化を検討中		
9. 通学・通勤の利便性(バスに対する要望)	・スクールバス増便、土日や時間帯・ダイヤ調整の要望多い	△	・医療循環バスがあると患者の利便向上になる	△	◇	△	学生生活委員会により要望調査と調整を継続実施		
10. その他			<ul style="list-style-type: none"> ・長期的(20~30年)視点で、病院を含む全体の建替・再編計画、緑地や駐車場含めたバランスが必要 ・「地域に生き…」の理念から、門や遊水池の位置づけを明確化、地域住民コミュニティとの関わりを深めることが必要 ・広域の防災拠点の視点をCMPに記載してはどうか ・省エネや低炭素化の理念をCMPに入れて欲しい ・貯水池や樹林地に近いので虫が多い、カラスを駆除 ・サークル棟や学生の話し声等の騒音問題がある ・ここ数年でキャンパス空間がきれいになった ・キャンパスのアートソースの活用が必要 	× △ ◇ ◇ ◇ ◇ ○ ○ ×	キャンパスアクションプラン(2005年版・2009年版)での「アクションプラン」	△	キャンパスアクションプランの一部が効果を上げている		

達成度の記号凡例 … ○:概ね目標や期待通りの効果 △:部分的に達成した ×:未着手または効果なし ◇:CMPでは目標設定が無かった

意見・期待



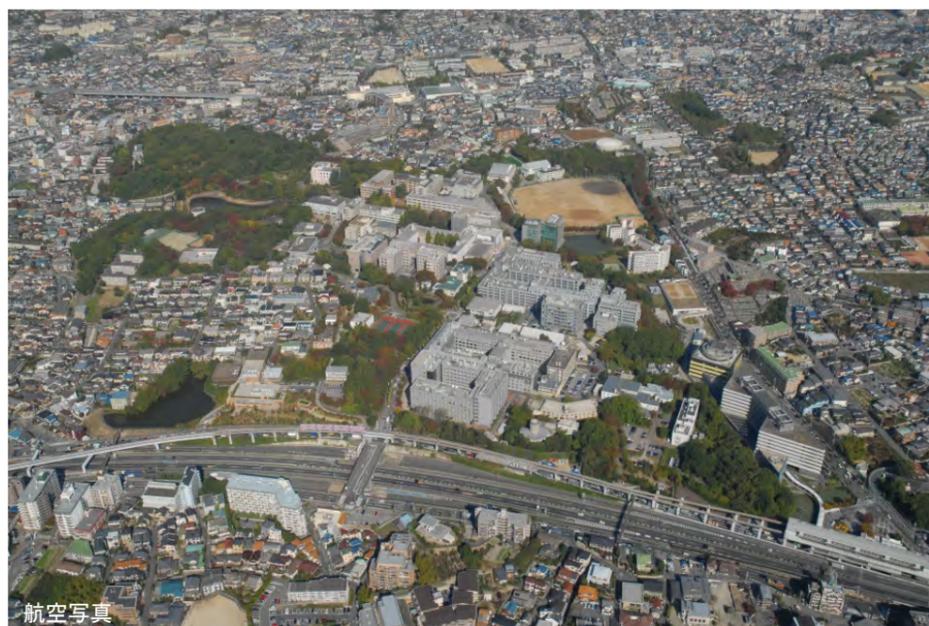
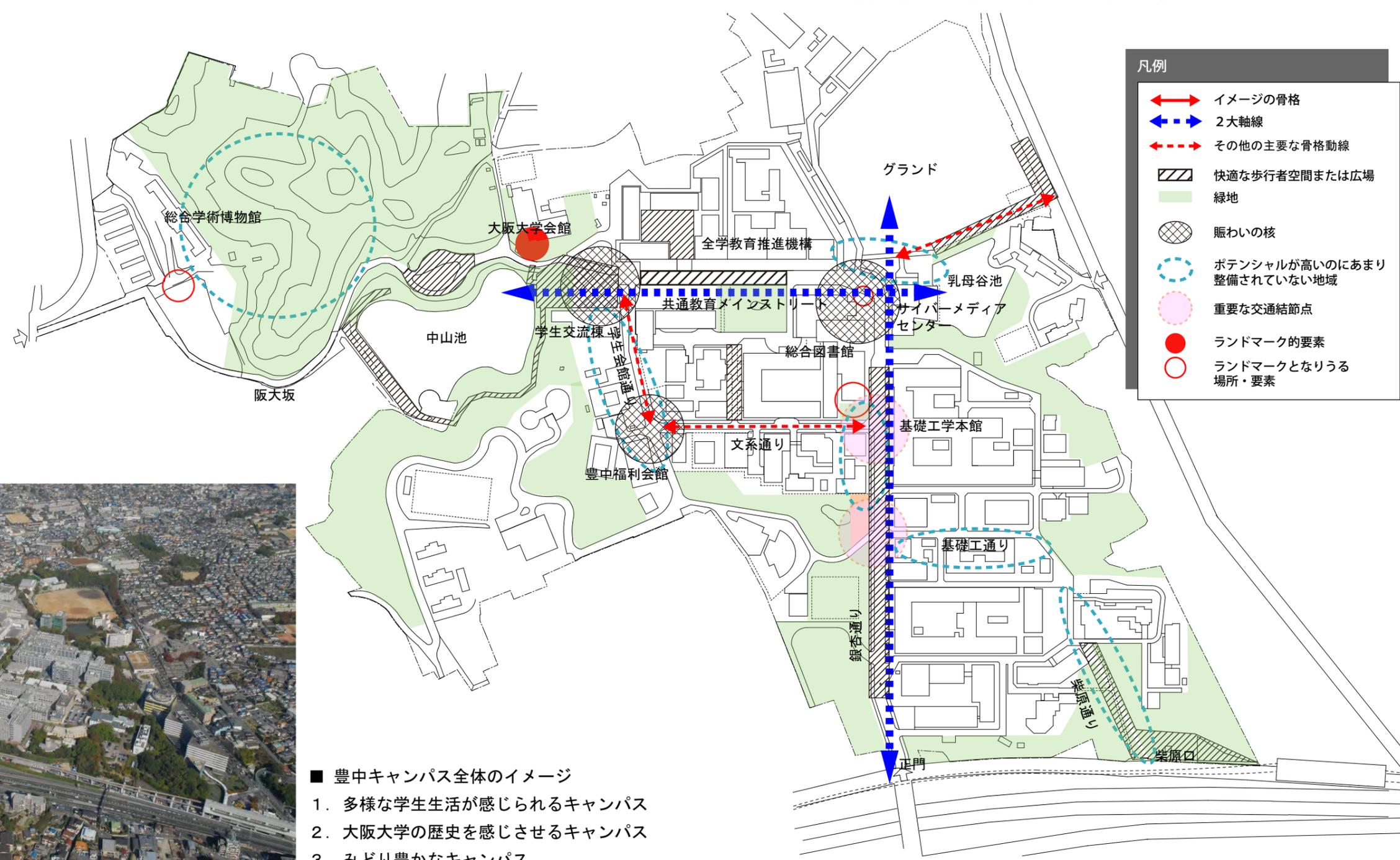
4. ゾーンおよび骨格・核の形成
4-1. 1) 骨格イメージ 豊中キャンパス

■イメージ骨格形成の方針

1. 2章で抽出した伸ばすべき資源のうち、特に「快適な歩行者空間」「緑地」に注目する。
2. これに別項で検討した「交通動線骨格」を加味する。
3. ランドマーク（大阪学生会館）、および賑わいの核との整合を検証する。

■イメージ骨格の形成

1. 阪大坂～全学教育推進機構前～银杏通り～基礎工通り～柴原口（図中赤矢印 ←→）は一筆書き状の主要な歩行者動線であり、強いイメージ骨格をなすことが解る。
2. 一方、正門～グランドまでの银杏通り、および全学教育推進機構の中山池～乳母谷池までの通りは従前からのキャンパスの2大軸線（図中青点線矢印 ←- - ->）であり上記の主要な歩行者動線と多くが重なる。
3. 現況の最も強いランドマークである大阪学生会館（図中赤●印）は、従来は賑わいの空間から遊離しており、キャンパスのシンボルとしての力が弱かったが、80周年記念整備事業の完成により、賑わい空間との相乗効果と強いシンボル性を獲得した。
4. シンボル要素としてはこの他、阪大坂の玄関口に位置する総合学術博物館、および、キャンパス内で最も賑わいのある総合図書館・サイバーメディアセンター前、及び基礎工前が、副次的なシンボル空間となる（図中○印）。
5. これらに継ぐ骨格要素として、豊中福利会館と大阪学生会館、および基礎工前を結ぶ街路（学生会館通り、文系通り）が揚げられる（図中赤点線矢印 ←- - ->）。



■豊中キャンパス全体のイメージ

1. 多様な学生生活が感じられるキャンパス
2. 大阪大学の歴史を感じさせるキャンパス
3. みどり豊かなキャンパス



0 50 100 200 300 400 500m 1/4000



1. 阪大坂下
- ・新しい阪大の顔となる整備を行う。
 - ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・総合学術博物館と駐輪場と一体的な計画を行う。

2. 阪大坂
- ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・中山池から大阪大学会館方向への眺望を生かす。
 - ・待兼山尾根とのつながりを生かす。

3. 石橋口
- ・主たる歩行者の入口としてふさわしい整備をする。
 - ・現況の豊かな緑を残しながら、より人が集い、くつろげる空間に変えてゆく。
 - ・維持管理に費用がかからない形態を目指す。

4. 大阪大学会館周辺
- ・学生交流棟とセットでシンボル空間となっている。
 - ・総合図書館方向、中山池方向への見通しの良い空間にする。

5. 全学教育推進機構前ゾーン（コミュニティゾーン）
- ・中山池～乳母谷池の軸線を重視し、見通しよい街路として整備する。
 - ・言語文化研究科北側～浪高庭園は、豊かな緑を活かしながら、くつろぎやすい空間の広がりを見通しの良さを持った広場として整備してゆく。

計画条件

1. 空間の骨格イメージを元に良いところを伸ばす計画とする。
2. 交通ネットワークの検討を反映する。
3. 現在の駐車台数をできるだけ減らさない
4. 柴原からの歩行者動線を整備する。
5. 保全緑地、保全空地を定義する。
6. 将来計画建物が、主要な歩行者動線に悪影響を与えないように配慮する。

*豊中キャンパスは、外部空間再編の余地が比較的限定されていることから、道路、歩道、広場、保全緑地等の配置計画を、より具体的かつ詳細に行う（凡例参照）。

6. 総合図書館・サイバーメディアセンター周辺
- ・歩行者専用化し、大阪大学会館前と対をなすシンボリック空間として整備する。
 - ・乳母谷池親水空間と一体整備して池の景観を生かし、中山池からの軸線も生かした整備を行う。

7. 基礎工前
- ・バスロータリーを整備（ほかの場所も検討する）し、交通結節の核として整備する。
 - ・浪高庭園、総合図書館前、柴原口、福利ゾーンの各方面へ、それぞれへの快適な歩行者アクセスを実現する。

8. 科学教育機器リノベーションセンターA棟周辺
- ・主要な歩行者経路として快適な街路を形成。
 - ・現科学教育機器リノベーションセンターA棟北側～柴原口は歩行者専用化する。
 - ・可能な限り緑地、広場化をはかる。
 - ・将来計画建物が歩行者街路・広場に悪影響を及ぼさないようにする。

9. 柴原口
- ・古い建物の建て替え等に伴い、周辺の空間全体の再構成を検討する。

その他の、または、今後の重要な検討項目

- A. 待兼谷広場整備
- ・博物館との一体的計画を行う必要がある。
 - ・待兼山ゾーンの核となる広場として、里山を保全しながら整備してゆく。
 - ・阪大坂にかわる新たな主歩行者動線として、旧医短門から石橋口へ至る経路の一体整備を検討する。
 - ・上記のネックは、尾根高さが石橋門より6m高いことである。待兼谷と石橋口間の尾根開削や、トンネル掘削も案としては考えられる。

- B. 各所のキャンパス出入口（図中▲）
- ・東口は、バリアフリー化の整備が完了し、かつ、国際交流会館からテニスコートを介し、グラウンドに緊急車両が進入できるように整備された。
 - ・北口、刀根山口、極限量子化学センター裏側の緊急用、その他出入口の役割を明確にする。

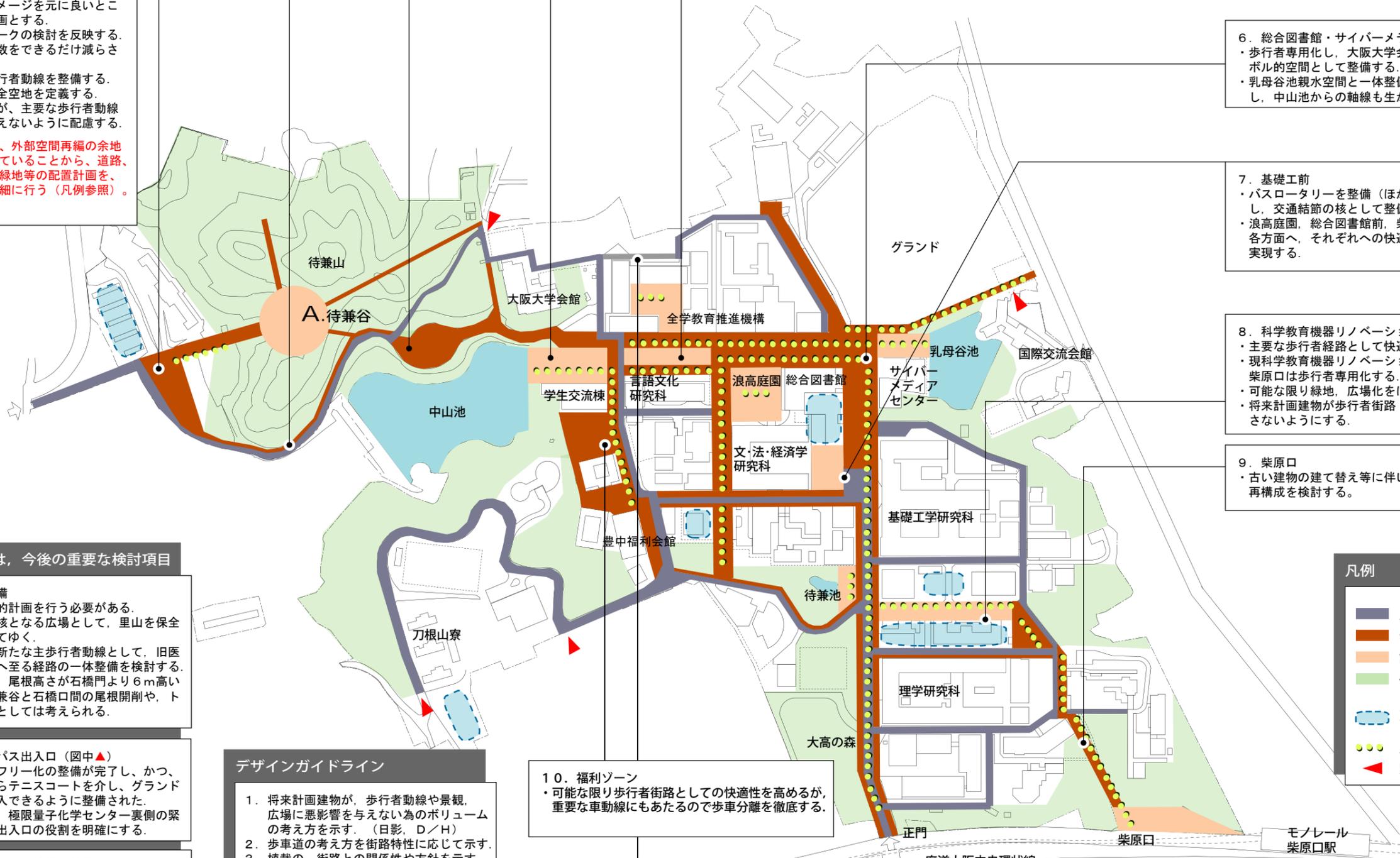
- C. バスロータリーと駐輪場の整備
- ・現在、総合図書館前で転回しているバスのロータリーを、歩行者と交錯が少なく位置に整備する必要がある。
 - ・全体に駐輪場が不足しており、集約化も含めて検討する必要がある。

デザインガイドライン

1. 将来計画建物が、歩行者動線や景観、広場に悪影響を与えない為のボリュームの考え方を示す。（日影、D/H）
2. 歩車道の考え方を街路特性に応じて示す。
3. 植栽の、街路との関係性や方針を示す。
4. 中庭（将来新規・改修）の方針を示す。
5. 建物入口と街路の関係性や方針を示す。

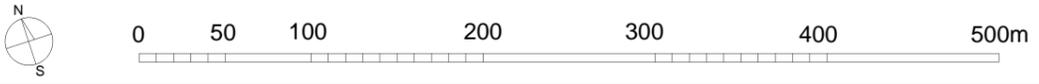
10. 福利ゾーン
- ・可能な限り歩行者街路としての快適性を高めるが、重要な車動線にもあたるので歩車分離を徹底する。

11. 全学教育機構裏側の道路整備
- ・交通動線の整理上、非常に重要である。
 - ・石垣、地山を切り崩す必要があり、やや大がかりな工事になる。



凡例

- 主な道路（車道）
- 歩行者専用街路・歩道
- 計画広場・保全空地
- 保全緑地
- 建物計画を考える場所
- 主要な並木
- ▲ 緊急時車両入構口

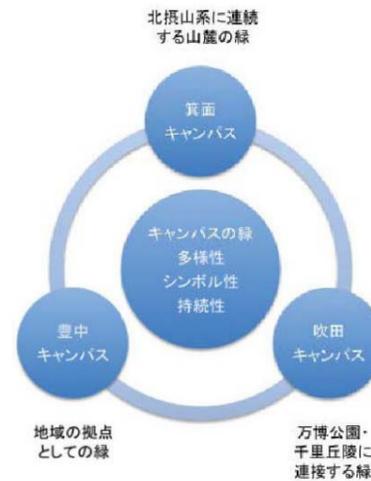


1/4000

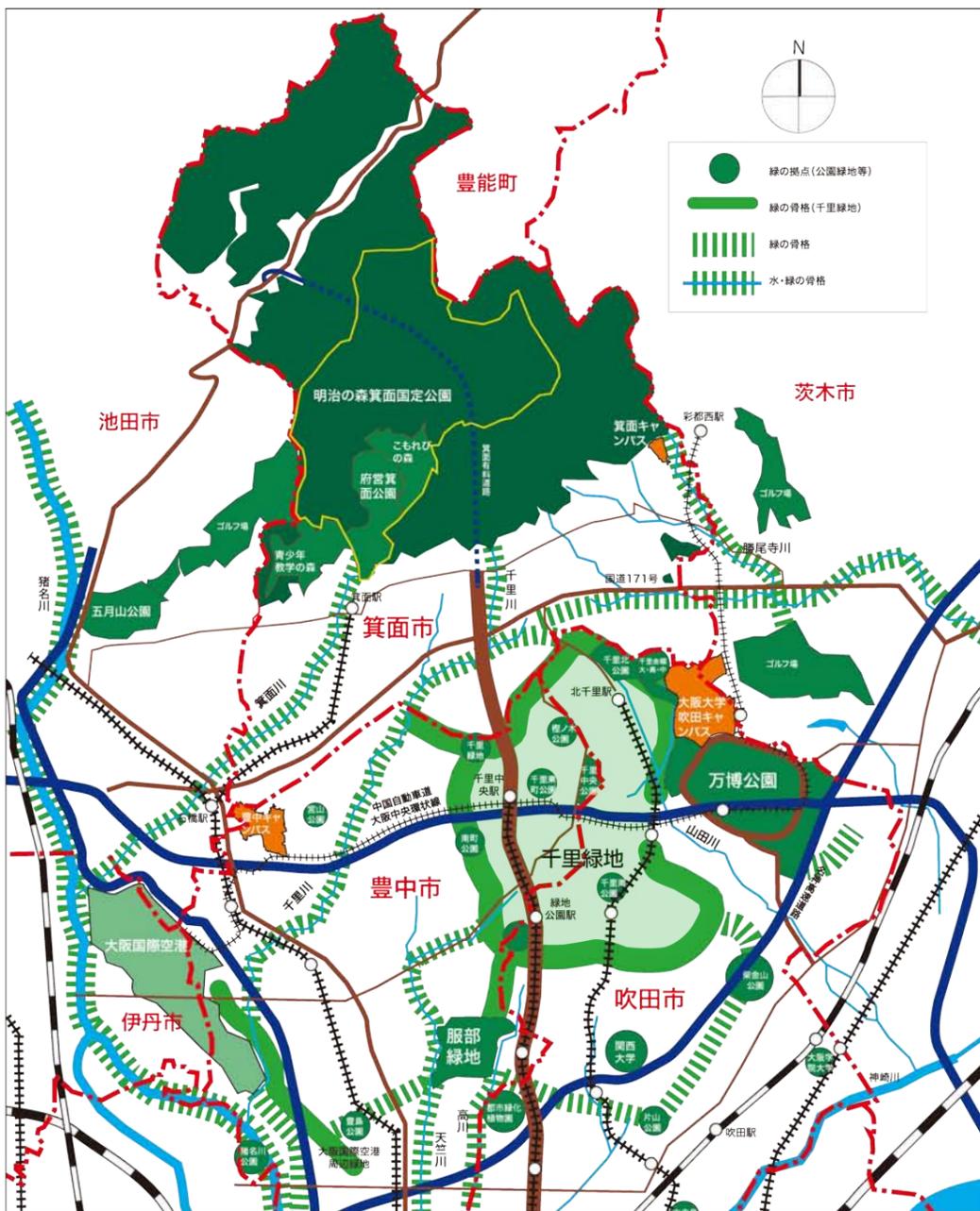
キャンパスの快適性や景観を向上させるためには、緑地等(植栽、並木、樹林地など)を、一体的、統合的な考え方のもとに、かつ継続的に、整備・維持管理することが必要である。平成23(2011)年には、「大阪大学緑のフレームワークプラン」が策定された(そのスタートラインは2005年版キャンパスマスタープラン6章が元となっている)。広域におけるキャンパス緑地の位置づけや、生物多様性の重要性を確認しつつ、緑地および、広場や街路等の緑の整備と維持管理の方針をまとめているので、詳細はそちらを参照されたい。

問題意識
と
コンセプト

- ・北摂地域全体におけるキャンパス緑地の位置づけと、守るべき各キャンパスの良い点を明示
- ・維持管理(剪定や除草)から整備(工事)まで通した視点を設定
- ・生物の多様性や希少種についても配慮
- ・周辺自治体や地元、学生教職員との連携を進める



各キャンパスのコンセプト



3キャンパスを取り巻く水と緑のネットワークの図

豊中キャンパス

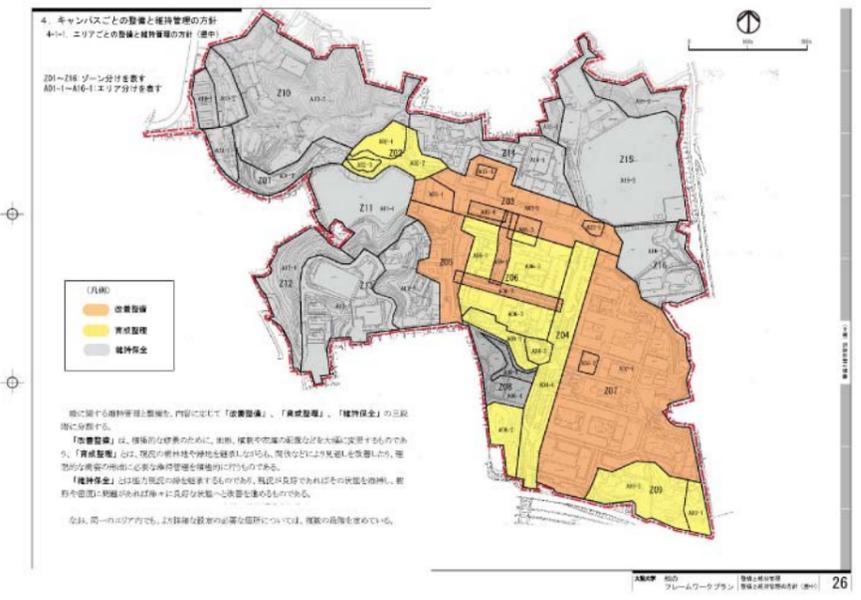
豊中キャンパスは全般に、剪定や間引きの行き届いていない過密な緑地が多い。またササやタケに侵食されて、生物の多様性を失いつつある部分もある。防犯上も見通しのよさは有効である。全体として密度を減らしながら、風や視線の通りがよい空間を形成してゆく必要がある。

特徴的なイチョウ並木の黄色や、サクラなどの色合いを大切にしながら、一年草や、池にあっては水生植物なども取り入れて、季節感や色合いがより豊かなキャンパスをめざしてゆく。



緑のフレームワークプラン 2章 緑の現状分析(豊中)

緑のフレームワークプラン 4章 エリアごとの整備と維持管理の方針(豊中)



吹田キャンパス

吹田キャンパスは広大である。キャンパス内での緑の量と質のバランスに鑑みて、広域の緑との「生態回廊としての連続性」に配慮したものとする必要があり。その中で、豊中キャンパスと同様に、ササやタケの侵入をできるだけ限定的な範囲にとどめて行かなければならない(意匠上、部分限定的にササやタケを植栽として用いることはありうる)。

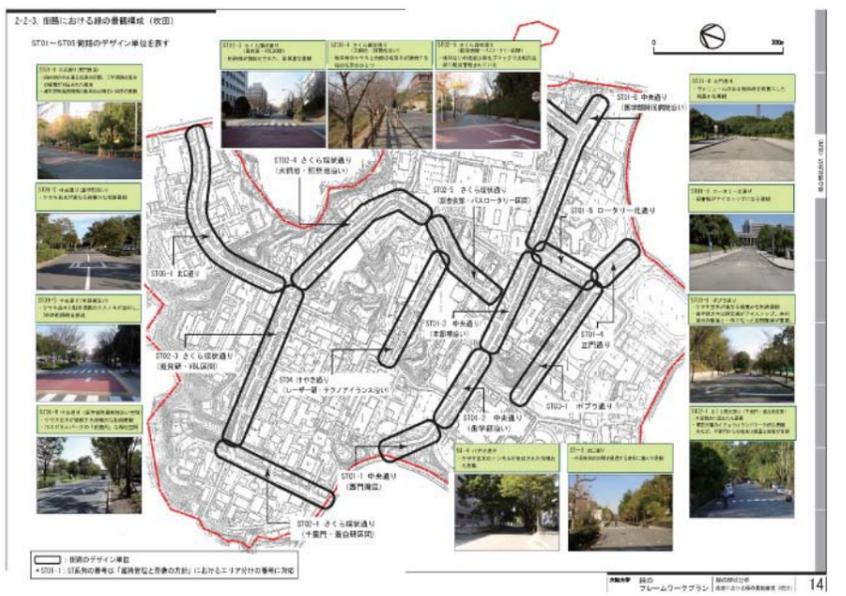
また、吹田キャンパスはサクラ、ケヤキ、クス、ポプラなどの並木が樹木のトンネルを構成し、街路景観の重要な要素となっている部分が多い。

なお、除草によって夏以降に開花する植物もあるので、今後吹田キャンパスに限らず、このような保護すべき植物を特定しながら、それらの開花時期に配慮して除草時期を調整することが望ましい。

箕面キャンパス

箕面キャンパスの外周部は、北摂山系の山麓部でアカマツを主体とする植生であった。わずかに残る自生植物の中には、吹田にも豊中にも見られない植物が観察できる。彩都の開発とともに周辺の自然が大幅に失われた。広域としてみると、みどりの骨格(河川・景観・道路軸)に沿った自然回復が必要である。

箕面キャンパスは、大阪平野を見渡せる位置にあると同時に、これら北側の山麓部が借景となって、グランド周囲の緑と一体的な、雄大な景観を持っている。特に秋には見事な紅葉が見られる。これらの資源を守り育てる整備と維持管理が必要となる。



緑のフレームワークプラン 2章
緑の現状分析(吹田・通り系)

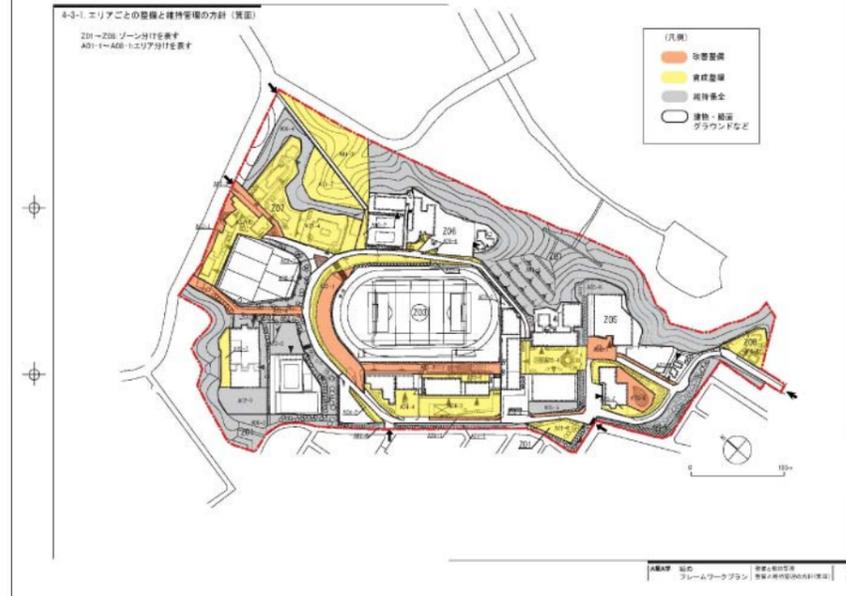
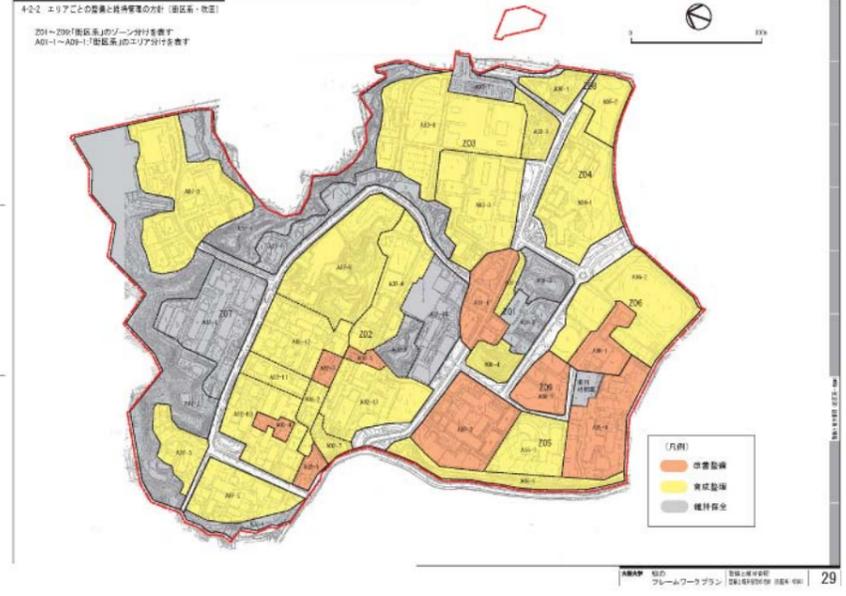
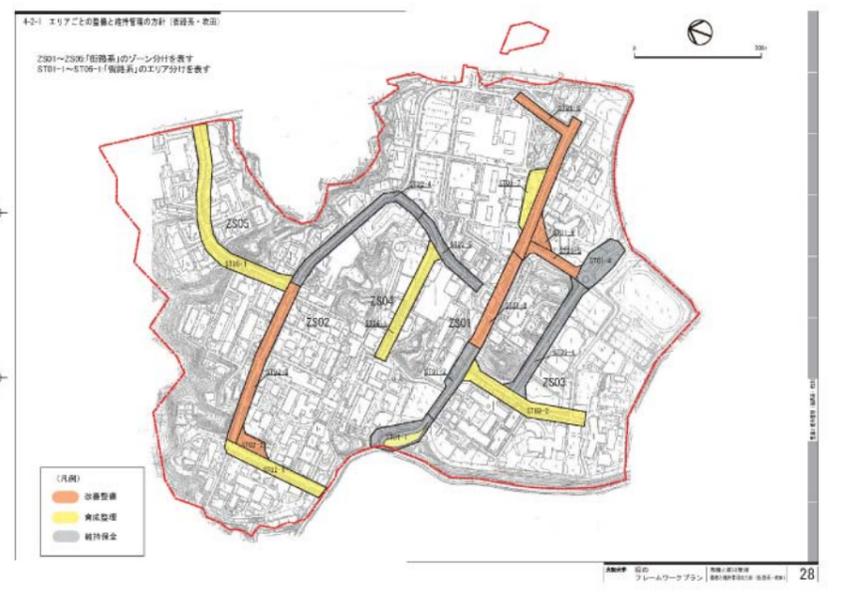
緑のフレームワークプラン 4章
エリアごとの整備と維持管理の方針(吹田・通り系)

緑のフレームワークプラン 2章
緑の現状分析(吹田・エリア系)

緑のフレームワークプラン 4章
エリアごとの整備と維持管理の方針(吹田・エリア系)

緑のフレームワークプラン 2章
緑の現状分析(箕面)

緑のフレームワークプラン 4章
エリアごとの整備と維持管理の方針(箕面)





6. すべての人が安全に快適に移動できる環境の形成

6-1. 交通ネットワークにおける問題点の整理

従前から、キャンパス内にはさまざまな構内交通安全上の問題が指摘されていた。図は平成22(2010)年に実施(概要は3-2-1節参照)した調査の結果プロットである。

下記に各キャンパスごとの要点をしめす。

1) 豊中キャンパス

- ・歩行者が危険を感じる対象は、
 - ①自転車(25%)、
 - ②自動車(20%)、
 - ③舗装等の道路構成要素(17%)、
 - ④道路構成そのもの(13%)
 となっている。
- ・自動車が危険を感じる対象は、
 - ①道路構成要素(37%)、
 - ②自動車(11%)、
 - ③自転車(15%)、
 - ④歩行者(9%)
 となっている。

場所別にみると、**阪大坂で危険を感じる**という回答が非常に多く、自転車通行規制を敷いても(平成18年)、なお危険であること、マナー啓発等の活動が引き続き必要であることが明確になっている。

そのほか、**銀杏通りや柴原口での自転車との交錯・接触の危険**が指摘されている。

個別意見では図書館前での**バス転回による危険**の指摘も多くみられた。

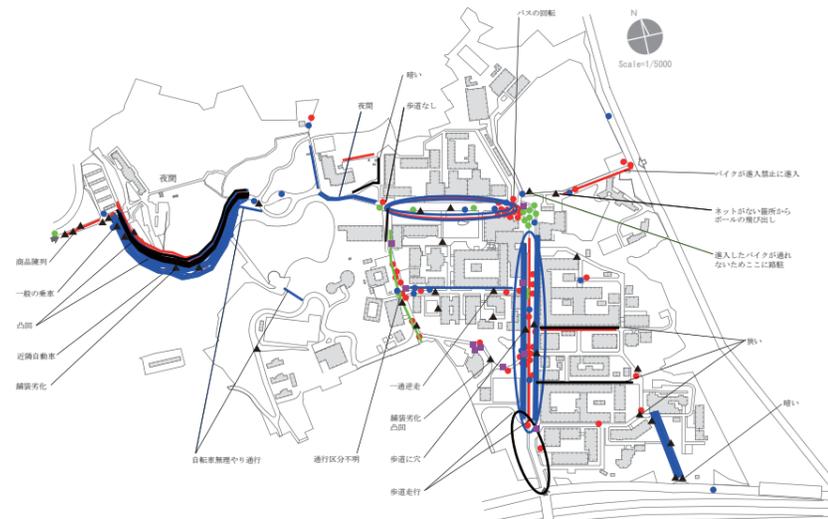
なおこれら調査の他、平成19年の箕面キャンパス統合以来、豊中キャンパスに1年生が大幅に増え、**阪急石橋駅からの通行ルートの混雑・集中**が大変危険となったことが、各方面から指摘されている。

2) 吹田キャンパス

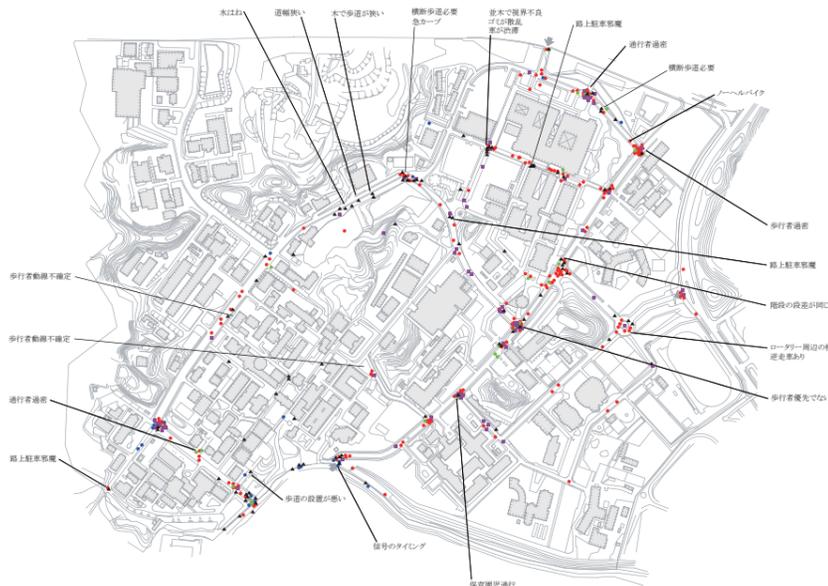
- ・歩行者が危険を感じる対象は、
 - ①自動車(40%)、
 - ②舗装等の道路構成要素(25%)、
 - ③道路構成そのもの(20%)、
 の3点で85%が占められている。
- ・自動車が危険を感じる対象は、
 - ①道路要素・構成(40%)以外は、
 - ②自動車、③自転車、④歩行者がそれぞれ18~17%ずつとなった。

凡例(各図共通)

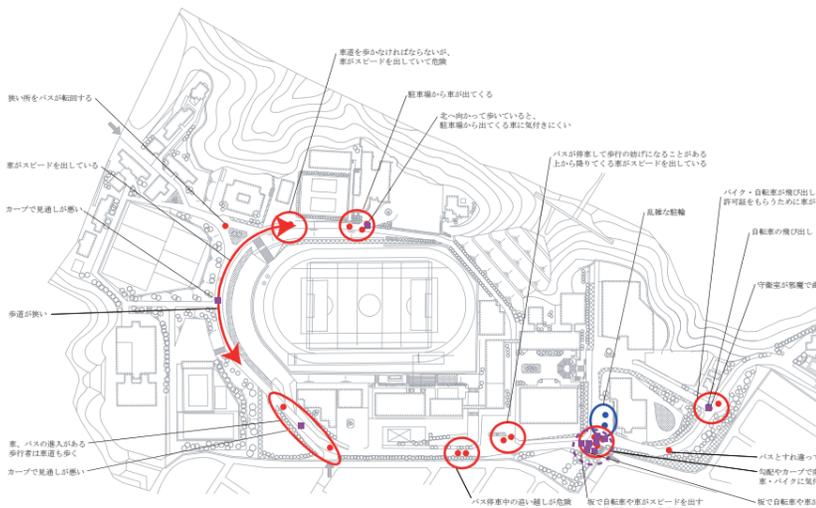
- 車・バイクに対して危険を感じる箇所
- 歩行者に対して危険を感じる箇所
- 自転車に対して危険を感じる箇所
- 視界不良による危険を感じる箇所
- ▲ 道路環境(劣化等)に危険を感じる箇所(路上駐車を含む)



図a1. 歩行者の視点による危険箇所図(豊中)



図b1. 歩行者の視点による危険箇所図(吹田)



図c1. 歩行者の視点による危険箇所図(箕面)

吹田キャンパスが広大で「自動車型キャンパス」であることが明らかである。歩車分離と、**自動車の速度を低減させ歩行者優先が守られる環境**をつくるのが肝要である。

3) 箕面キャンパス

- ・歩行者が危険を感じる対象は、
 - ①道路構成そのもの(38%)、
 - ②舗装等の道路要素(22%)、
 - ③自動車(19%)
 となっている。
- ・自動車が危険を感じる対象は、
 - ①道路要素・構成(35%)、
 - ②自動車(25%)、
 - ③歩行者(22%)
 となっている。

バス停付近の追い越しによる危険性と管理棟~南西口付近での歩行者横断による危険性などが指摘されている。

4) 各キャンパス共通の駐車場不足の問題について

調査では、駐車場の不足を述べた意見も多かった。しかし、平成23年3月の吹田キャンパス駐車スペース検討ワーキングの答申では、

大学としては低炭素社会の実現に向けて努力していく必要があることから、**止むを得ない事情によるものを除き、立体駐車場等の駐車場整備を積極的に推進するのではなく、…中略…**各部局が入構許可を自主規制することや入構料値上げにより入講車両台数の総数を減らすなどの、総量規制の実施で対応していくべきであるとの結論に至った。

と述べられており、全キャンパスにおいても今後、建物等の整備にあたって**駐車場需要の見極めを行うと同時に、入構する車両台数の総量をコントロールすることが、駐車場を新たに整備することよりも優先されるべき**であると考えられる。

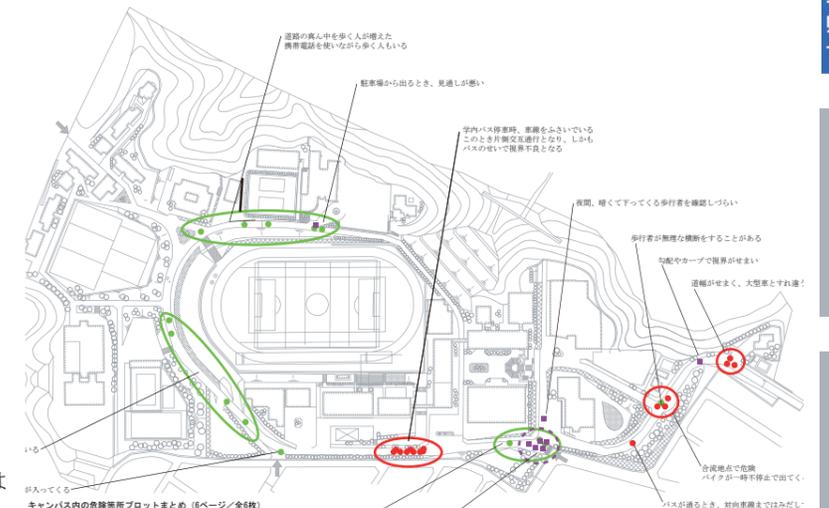
交通ネットワークの改善にあたっては以上の状況把握をベースにした検討を行うこととする。



図a2. 車両の視点による危険箇所図(豊中)



図b2. 車両の視点による危険箇所図(吹田)



図c2. 車両の視点による危険箇所図(箕面)

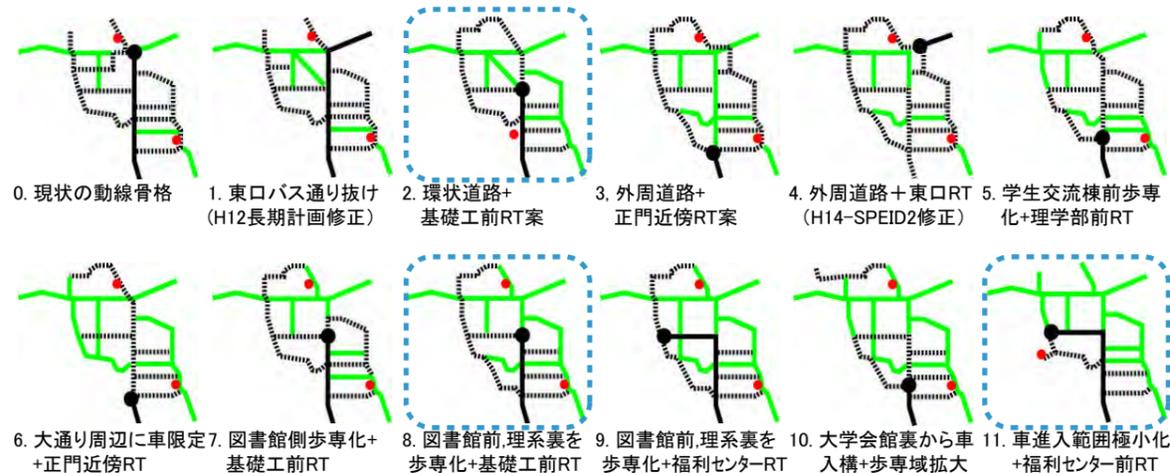


6-2. 豊中キャンパスの交通ネットワーク（その1）

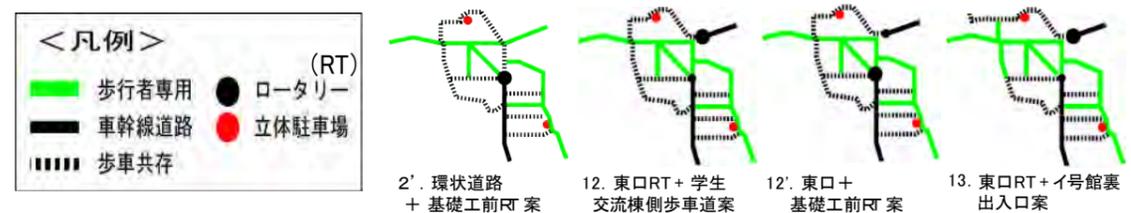
豊中キャンパスでは従来より、自動車と歩行者等の交錯、駐輪、駐車場、自転車等の交通マナー、阪大阪、総合図書館前でのバス転回などの危険性等の諸問題が指摘されていた。本節ではこれまでの検討経緯と状況推移をふまえながら、平成22（2010）年に行われた調査の結果も合わせて示し、今後あるべき交通ネットワークの形態を提示する。

6-2-1. 平成17（2005）年版での検討と結論（豊中）

平成17（2005）年版ではまず、考えられる交通ネットワークの形態を模式化して、安全性、バスルート、立体駐車場、既設駐車場、オープンスペースの広がりや景観、グラウンドの利便性、実現が難しい箇所、費用の面から比較検討した（図a）。その結果をもとに、有力案を修正した諸案で比較を行った（図b）。



図a. 豊中キャンパス／交通ネットワーク形態比較図（その1）



図b. 豊中キャンパス／交通ネットワーク形態比較図（その2）

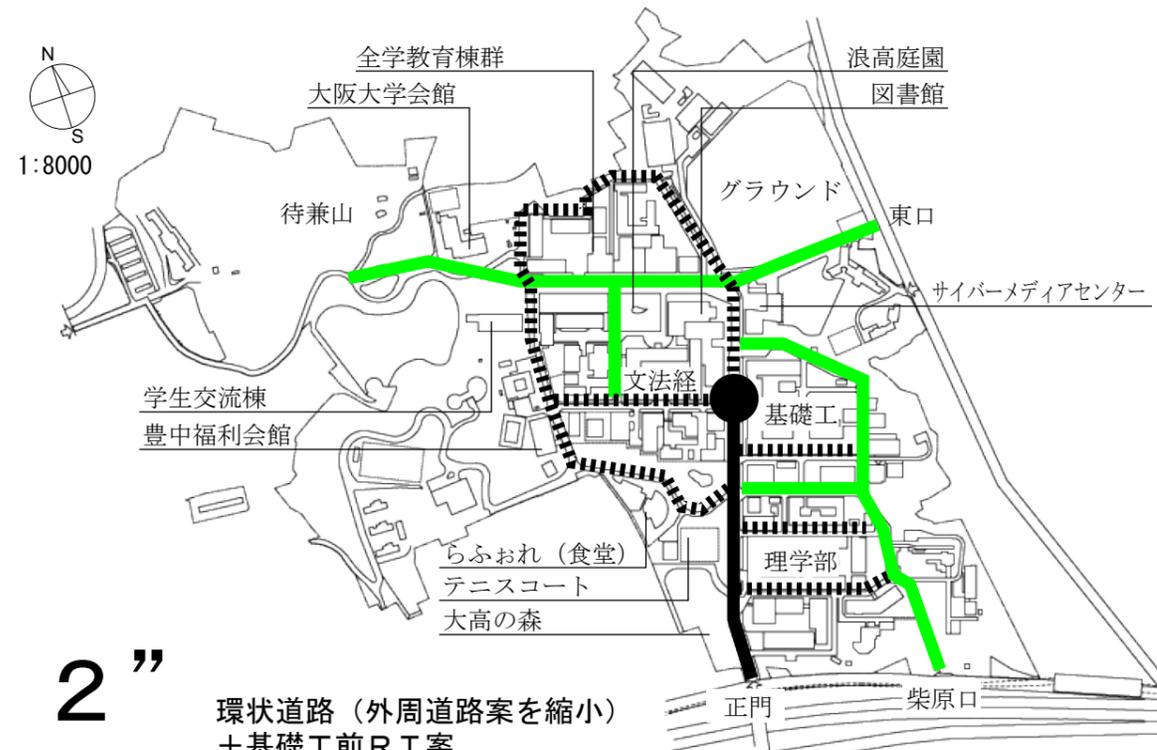
これらの検討の結果、2'案と12'案が優れていること（ただし2'案は、当時、緊急時の車両出入口が正門以外に無かったことが問題視された）、将来的には歩行者優先化をさらにすすめて13案を目指すべきことが結論とされた。

6-2-2. 状況と方針の変化と目指すべき交通ネットワークの形態（豊中）

その後、下記の諸点について状況と方針の変化があり、これに鑑みて、右上図の2"案を、今後めざすべき交通ネットワーク形態とする。

<状況と方針の変化>

- (1) 東口から直接車両を入れることは、物理的に現実的でないこと
- (2) 東口のバリアフリー等整備によって、国際交流会館～テニスコート・グラウンドを介して、緊急時の車両進入が可能となったこと
- (3) 立体駐車場が費用対効果に合にくいことが判明したこと。また大学として省エネ・低炭素を推進する立場から、キャンパス全体としてできるだけ自動車利用を減らすべきであること



注1：歩行者専用道路であっても、サービス車等は通行可能とする。
注2：バスロータリー（RT）の位置は、基礎工前に限らず、周辺計画と合わせて検討し設定する必要がある。

図c. 豊中キャンパス／めざすべき交通ネットワーク形態図

6-2-3. バスロータリーの位置について（豊中）

平成16（2004）年以来、バスロータリーの位置は様々に検討されてきた（次ページ図）。しかし広い敷地を必要とすることや、高低差の調整の必要性などのため、単体工事としての整備では費用対効果が適正になりにくいことから、実現には至らなかった。ここではその経緯を踏まえ、計画の要点と今後の検討範囲を述べる。

<バスロータリー計画の要点>

- (1) キャンパス骨格、特に歩行者の集中や主要な歩行者動線との関係性を適正にすること
特に図書館北側は、キャンパスの中心であるため、これにふさわしい設えとする必要がある
- (2) バスの学内への進入範囲と歩行者等との交錯を最低限におさえる

6-2-4. 駐輪場の考え方について（豊中）

平成22（2010）年に実施した交通関係アンケート（3-2-2節参照）の結果を背景として、平成23（2011）年10月から自転車登録制が開始された。これにより、豊中キャンパス内の自転車の総量と各部署での駐輪数が明確となった（次ページ図参照）。

<駐輪場計画の要点>

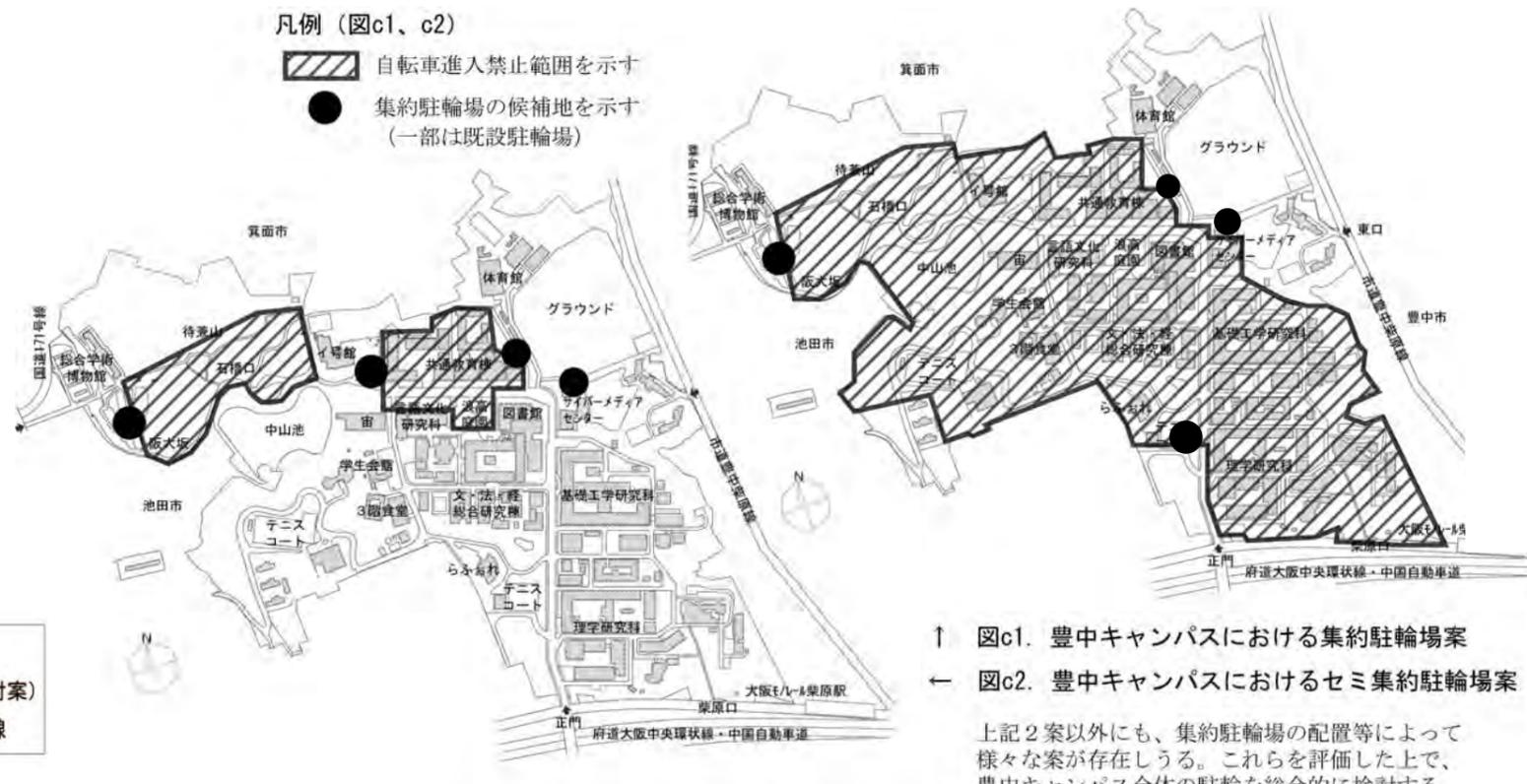
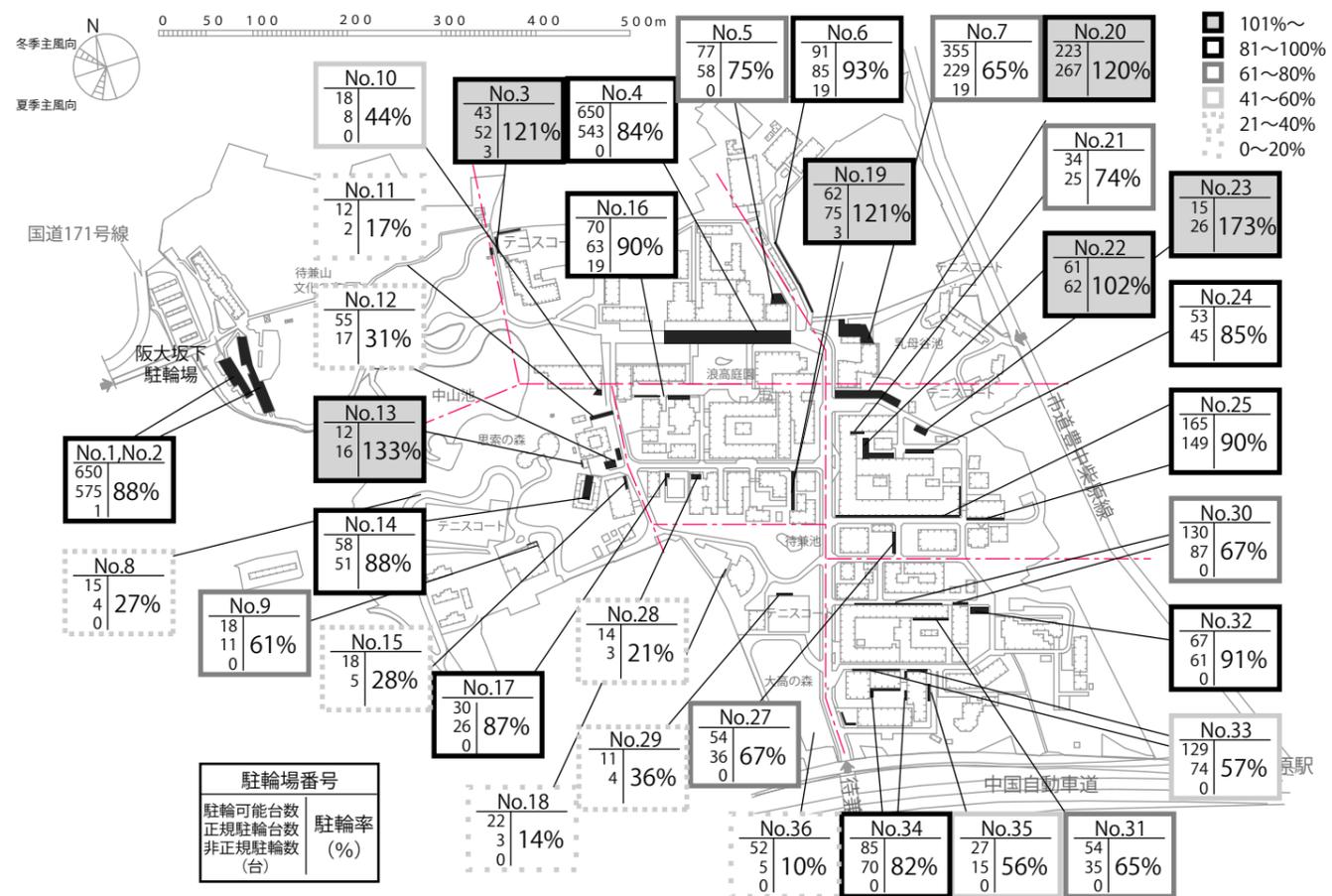
- (1) できるだけ歩行者専用の領域を増やし、駐輪場を集約化すること
- (2) 駐輪場の配置にあたって、学外周辺地域の安全性と学生の利便性に配慮すること
- (3) 十分な台数の駐輪場を確保しつつ、自転車登録制との併用により、放置駐輪を防ぐこと

6-2. 豊中キャンパスの交通ネットワーク（その2）

表. 豊中キャンパスのバス停・ロータリー代替地の比較

それぞれの評価は状況によって変わります

各案記号	A案	B案	C案	D案
各案名称	理学研究科前 バスロータリー案 (駐輪・駐車場・テニスコート併設)	基礎工学研究科前 バスロータリー案	グラウンド南西角部 (図書館側) バスロータリー案	基礎工学研究科北側 バスロータリー案
1. 大学運営上の問題や他の利用との競合	現状のテニスコートは、屋上に併設・復旧できる。	現在は緑地	現状ですら、グラウンドは広さが不足している。	2005年に一度、オープンスペースとして整備されている。
2. バスロータリーを設置できる十分な広さ	現状のテニスコート下部を掘削するので問題ない。	十分な広さが無く、バス転回には切返しが必要。	上記が解決すれば→	十分な広さが無く、バス転回には切返しが必要。
3. バス通行の安全性	キャンパス中心部までバスが入らなくてすむ。	バス転回に切返し必要。	図書館前周辺の大量の歩行者とバスの交錯が残る。	バス転回に切返し必要。
4. 歩行者の安全性	全学教育エリア・図書館から遠く、その間での乱横断などが懸念される。	基礎工前も歩行者通行が多く、現状よりあまり良くならない。	図書館前周辺の大量の歩行者とバスの交錯が残る。	基礎工北側も歩行者通行が多く、現状よりあまり良くならない。
5. バス利用者の利便性	全学教育エリア・図書館から遠くや不便。風雨を避けられるなどバス待ちの快適性は高くなる。街路に面する線は概ね保全できる。現状テニスコート部分を大規模掘削する必要あり。	共通教育棟・図書館から、あまり遠くない。	共通教育棟・図書館から近い。	共通教育棟・図書館から、あまり遠くない。
6. 景観・環境保全	△	△	△	△
7. 土地の高度利用	◎	△	△	△
8. コスト	×	△	△	△
総合評価	△	○	△	△





7. 達成手法

7-1. リーディングプロジェクト

リーディングプロジェクトとは、次頁以降に挙げる各項目のような、屋外共用空間や全学的な福利厚生施設などについての、重点項目としての整備である。次頁以降の各項目以外でも、施設マネジメント委員会等で決定された計画もふくまれる。

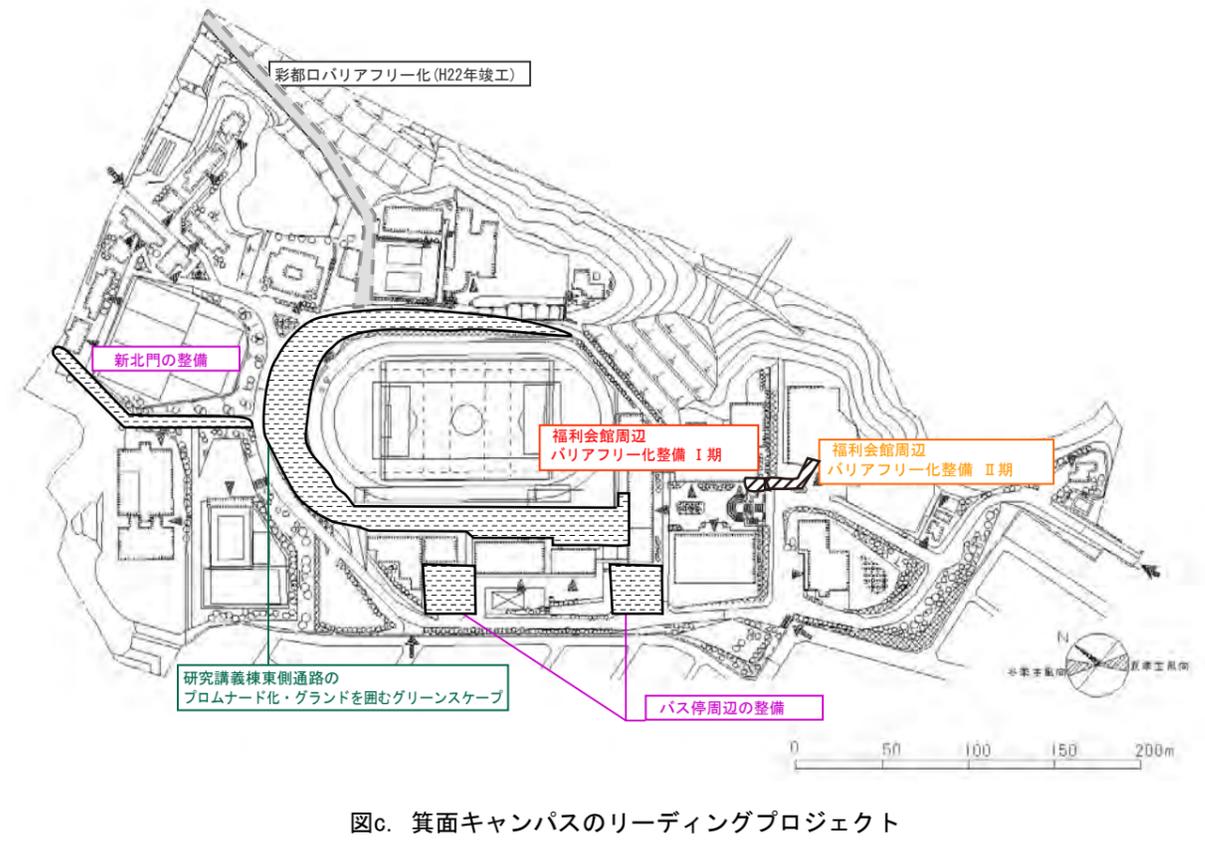
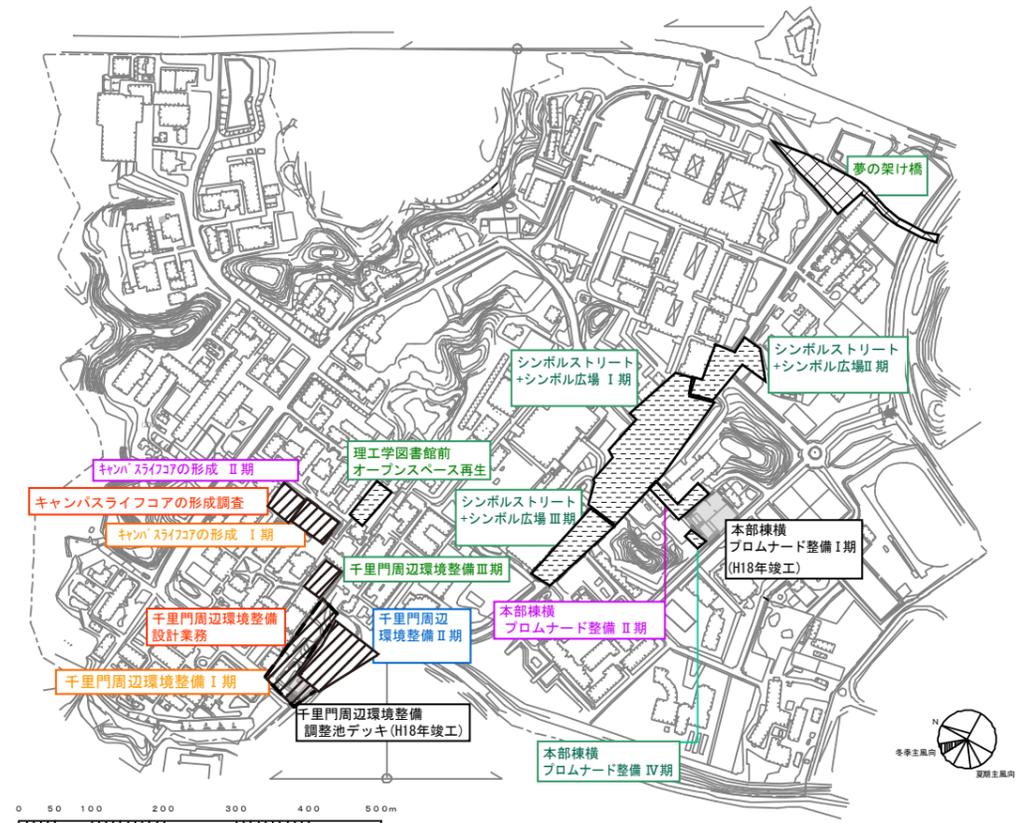
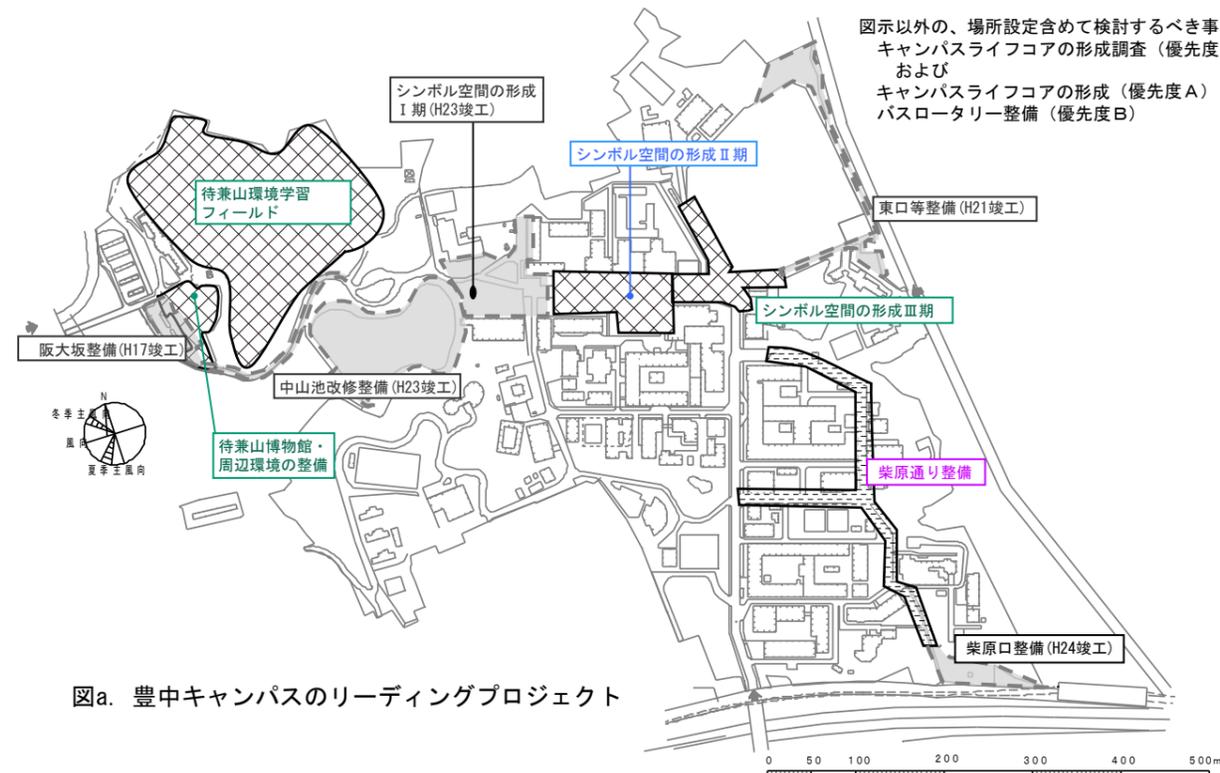
図a.～c. がそれぞれのキャンパスでの、現時点のリーディングプロジェクトであり、表a. はその優先順位の考え方の一例である。ただしこれらの優先順位は、その時々状況によって評価が変わりうることに注意されたい。

表a. 優先順位検討項目（総合優先度は、各評価をA=3、B=2、C=1、S=5として評価）

キャンパス・計画名	(1) 緊急度	(2) 学生福利・利便性	(3) キャンパス間バランス	(4) 重要度(空間補完)	(5) 方針確定度	総合優先度
全キャンパス共通 全体地図標識等新設補完	A	B	A	A	A	A
豊中キャンパス						
浪高庭園より東 文系中通り等	C	B	C	C	B	C
待兼山環境学習 フィールド	C	C	C	C	C	C
待兼山博物館 ・周辺環境の整備	C	C	C	B	C	C
バスロータリー整備	B	B	C	A	C	B
柴原通り整備 (基礎工・理学部歩行者空間)	C	B	C	B	B	B
(豊中) ライフコア 形成検討	A	S	B	B	C	A
吹田キャンパス						
吹田キャンパスのシンボル空間の形成 ・本部棟プロムナード整備 ・シンボルストリート・シンボル広場整備	C	B	B	A	B	B
吹田キャンパス ライフコアの形成	A	S	A	B	C	A
千里門周辺環境整備	B	A	A	A	B	A
理工学図書館前 オープンスペースの再生	C	B	B	A	B	B
夢の架け橋整備事業	C	C	B	C	C	C
箕面キャンパス						
福利会館周辺 のバリアフリー化	A	B	A	A	A	A
新北門の整備	B	B	A	B	C	B
研究講義棟東側通路の プロムナード化・グラウンドを 囲むグリーンスケープ	C	B	A	A	C	B
バス停周辺の整備	C	A	A	B	C	B

凡例（各図共通）

	竣工
	総合優先度 A
	総合優先度 B
	総合優先度 C





学生のキャンパスライフを支援する福利厚生施設のあり方とその整備手法

優秀な学生を獲得して世界レベルの教育・研究を持続するためには、キャンパスライフの充実が極めて重要な課題である。豊中キャンパスでは大阪外国語大学との統合以来、学生数が増え、食堂の混雑の問題が顕著となった。同時に、来客を最低限もてなすことができるようなレストランも存在しない(過去にはあったが、経営上成立しなくなった)。これら食堂・レストラン等については、数量的充足だけでなく、学生が考え事や議論をすることができるゆとりある空間づくりという側面にも注力しなければならない。

また吹田キャンパスにおいても、食堂から極めて離れた研究科等があったり、学外近隣に飲食店がほとんど無いことなど、多くの学生や教職員が不便を感じている。

さらに外国からの研究者の短期滞在、寮や、留学生との混住の問題など、宿舎関係を充実する必要性、ならびに書店その他一般の店舗、ジム等のスポーツ施設に対する要望についても対処していかなければならない。

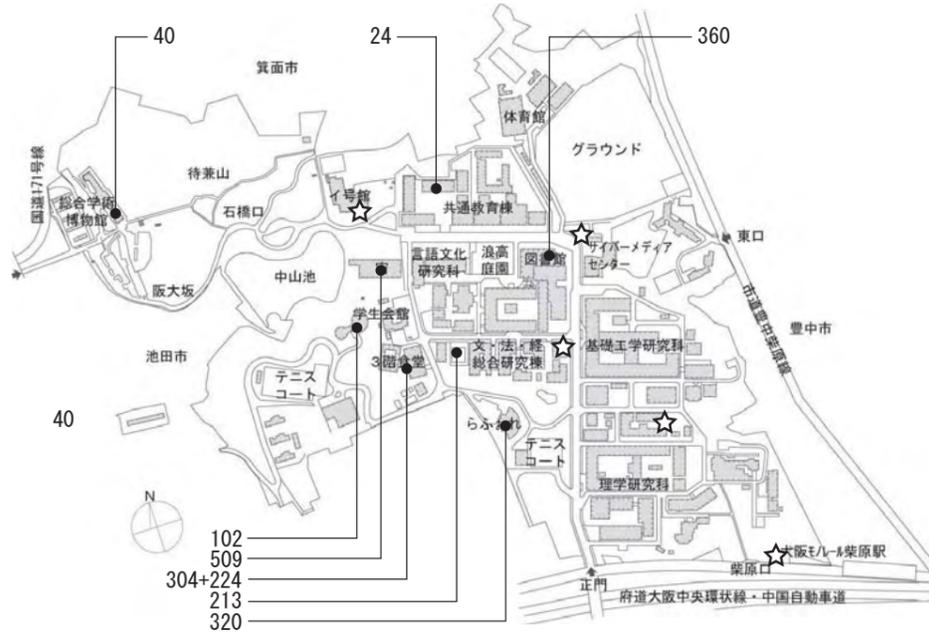
施設整備にかかる経費は今後ますます競争的になり、従来の手法による整備では実現がいつになるかわからない。ニーズの詳細調査を行ったうえで、民間事業者の誘致などの整備手法に重点をおいて、箕面キャンパスも含めて検討をすすめる必要がある。

豊中キャンパスでの福利厚生施設配置の考え方

図aは、豊中キャンパスに存在する食堂・レストラン等の配置(平成24(2012)年3月現在)と、今後計画することが考えられる場所のプロットである。

各所の与条件を整理したうえで広く民間の事業者に対してレストラン等の出店意欲を問う調査を行い、できるだけ大学側の経費がかからない方法で整備する方策を検討する。

食堂・レストランだけでなく、上述の各種店舗やスポーツ施設についても、また吹田キャンパス・箕面キャンパスについても、同様の検討を行うことが重要と考えられる。



図a. 豊中キャンパスでの現状の食堂等配置(数字は席数)と考えうる拡充整備候補地(各候補地については、関係部局との十分な協議・調整が必要である)

吹田福利会館の現状・課題と計画の方針

工学部エリアの吹田福利会館には、食堂、売店、書店などが設置されており、吹田キャンパス北側における生活基盤施設として重要な位置づけにある。この場所を例にとって計画案の考え方を示す。

吹田福利会館ではハードの老朽化・狭隘化が進んでおり、またサービスの内容についても、充実したキャンパスライフをおくるためには、未だ不十分な面が多い。

この場所は、広大な工学部ゾーンを貫くT字型のオープンスペースネットワークの基幹に相当し、キャンパスの「図」を構成する施設やオープンスペースを整備することも求められている。

図cでは平成16(2004)年当時考えられていた増築と建替の2案を示しているが、基本的な考えを踏襲しながら様々な案を、上述のような資金・事業運営面を含めた整備手法と一体で検討しなければならない。

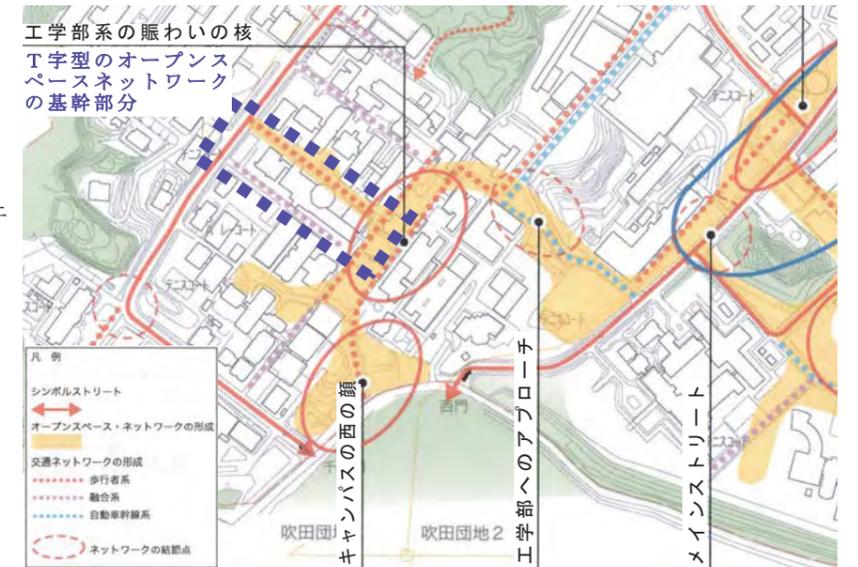
<吹田福利会館拡充の方針>

- ①以下の点に配慮しながら、増築案(A案)と建替え案(B案)を提示する。
- ②ライフコア機能の充実
現状の機能に加えて、コンビニエンスストア、コーヒーショップ、屋台村、宿泊施設、学生ラウンジなどのスペースを拡充し豊かなキャンパスライフを支えるための拠点とする。B案では宿泊施設として、ホテル・アパートマン等を提案する。
- ③オープンスペースネットワーク(キャンパスの骨格への配慮)
工学部エリアの中央軸から北側の原子力系、産業科学研究所方面に抜ける位置にあるため、両案ともモールやテラスを計画する。
- ④景観形成への配慮
A案: 整備当初の優れたモダニズムデザイン(既存食堂)を活かした計画案。
B案: さくら環状通り沿いに6階程度の宿泊施設を配置しアクセントとする計画案。

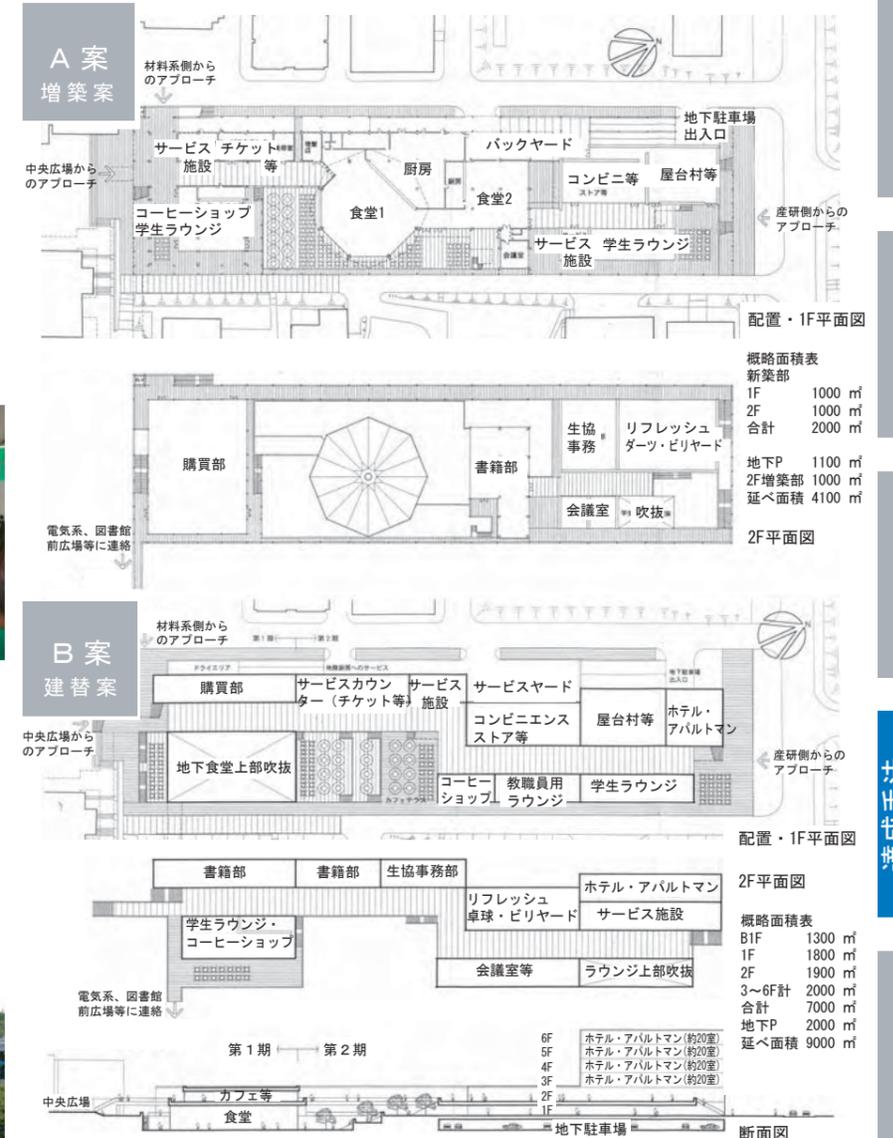


写真上:
食堂ではイベントが行われることもあり、学生の様々な活動を誘発する上でも重要な施設である(写真上はサッカーワールドカップ時のパブリックプロジェクション)

写真下:
現在の吹田福利会館の食堂部分屋根の形状が個性的。



図b. 吹田キャンパスでの主要な敷地候補の位置づけ



図c. 吹田キャンパスでのライフコア拡充案2案



現状の課題と経緯

全学教育機構と文法経・言語文化研究科等校舎群に囲まれたオープンスペースは、全学教育ゾーン、図書館、浪高庭園、食堂などが近接する公共性の高いエリアであり、大阪大学でも最も賑わいのある空間となっている。また、両端に中山池と乳母谷池が隣接し、両池との視覚的つながりや、親水性を確保することにより、大学のシンボルとして相応しい環境に生まれ変わるポテンシャルを有している。

しかしながら、現状は、大量の駐輪、鬱蒼とした庭園、図書館による圧迫などの問題が顕在化しており、シンボル空間形成の可能性が生かされていない。

大阪大学会館改修整備と学生交流棟北側の広場は、中山池の周回散策路整備とも合わせ、平成23(2011)年春に、80周年記念事業の一環として竣工し、豊中キャンパス全体の新しい中心的シンボル空間を形成した。浪校庭園、共通教育メインストリート、図書館北側、グランドコーナー部分、乳母谷池周辺についてもこれと呼応するかたちで整備することが望まれる。



平成23年春に完成した中山池周辺整備



平成23年春に完成した80周年記念整備による学生交流棟北側広場と、改修された大阪大学会館



メインストリートの美しい並木

■ 言語文化研究科棟 北側植栽地の現状の問題点等

■ アナツエダ
強剪定による木切れ
メインストリートの象徴的な景観を築くが、剪定のタイミングが不適切な場合、剪定による樹形の変形が確認できる。

■ トンモクセイ
下枝が上がっているため、歩行者の視界が遮られる。生育は良好。

■ アカシの群生
樹高が高すぎるため、うごき回ることができない。

■ モチノキ
アカシに混生するものが多く、アカシの樹冠の透気性が低く、モチノキの生育に悪影響を及ぼしている。

■ 葉のしたの木の欠損
大雨による葉の落下による影響が顕著である。メインストリートと学生交流棟北側広場の景観を損なっている。

■ 緑地のサワラ、ツバキ
サワラとツバキによる緑地は、内側の生育が著しく伸びている。緑地内は、サワラの根が露出しているが、研究科棟は、東側の日照が得られるためサワラは枯死している。緑地のサワラは、樹齢10年以内。

■ 緑地のサワラ(小)、ツバキ、ヤブコウソウ
サワラとツバキによる緑地は、内側の生育が著しく伸びている。緑地内は、サワラの根が露出しているが、研究科棟は、東側の日照が得られるためサワラは枯死している。緑地のサワラは、樹齢10年以内。

■ コイスカイギ
コイスカイギ(ササキ)は、自給自足の無い緑地のものはほとんど生育不良となっており、枯死のものも見える。

メインストリート周辺の緑地の分析
密度が高すぎ、樹木が健康に生育できていない

計画の方針

オープンスペースの再編、浪高庭園の整理、代替駐輪場の整備、建物とオープンスペースとの関係の改善により、シンボル空間としての質を総合的に形成していく。

● 乳母谷池側の親水性の改善

池の水際に、テラスやデッキなどを設けて、池を眺めたり、憩うことのできるスペースをつくる。

● グランドコーナー部分の整備

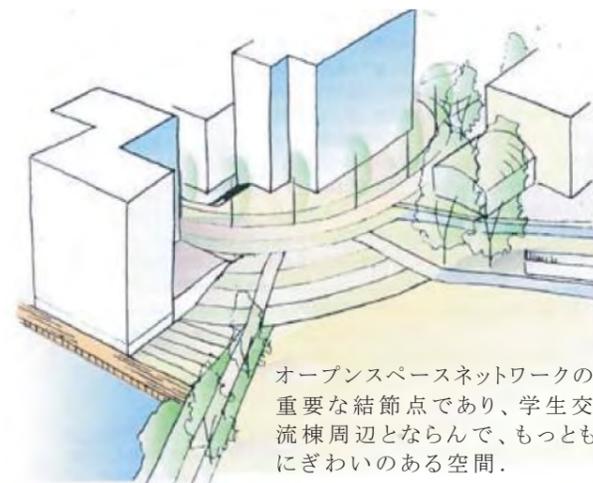
東西と南北の幹線街路が交差する重要な結節点であり、視線がグランド側に向ける場所でもあるため、オープンスペースネットワークの重要なポイントとして、広場化する。モニュメント設置場所の有力な候補。

● 現駐輪スペースの代替駐輪場を整備

オープンスペース中央にある、現在の駐輪スペースを解消し、校舎側に駐輪場を代替する。

● 浪高庭園の再生

芝生等に再整備することにより、人が入り、集い憩えるスペースとする。



オープンスペースネットワークの重要な結節点であり、学生交流棟周辺とならんで、もっともにぎわいのある空間。

グランドコーナー部分の整備イメージ



メインストリート周辺の整備イメージ

メインストリート周辺の整備イメージ

浪高庭園の再生イメージ

学生交流棟北側広場 計画案1
Scale 1/700
0 10 20 30 40 50m





待兼山と総合学術博物館

待兼山は豊かな自然を残した場所であり、大都市近郊に残された貴重な緑であって、その地下には古墳群をはじめとして、弥生時代から近世にいたるまでの住居址や埋蔵文化財の存在することが確認されている。

待兼山の植物や昆虫の生態系を保護し、地下遺構を保存整備しながら、**待兼山全体を博物館と考え**、一体的な整備をめざすこととする。

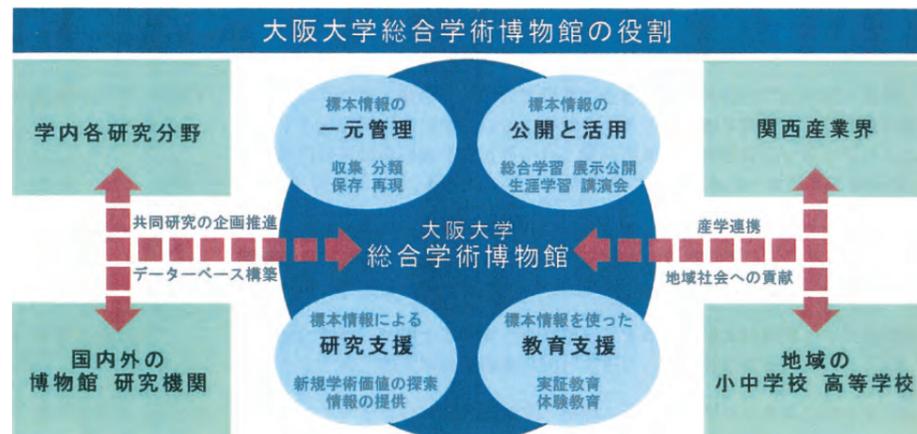
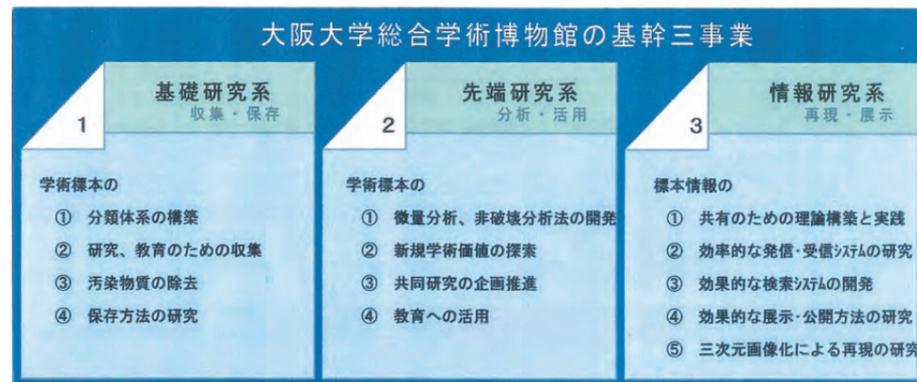
阪大坂下は、主たる歩行者動線に位置する顔として、大規模駐輪場とともに平成18(2008)年に整備された。平成19(2007)年春には、登録有形文化財である旧医療短大跡の建物が、当初の建物意匠を保全しながら「待兼山修学館」として改修整備され、総合学術博物館の機能を担うこととなった。また平成24(2012)年春には、高機能収蔵庫が新築された。

環境学習等のフィールドとしての待兼山

待兼山は、もともとは炭の原料をとるために入会地の林として利用され、アカマツが優占する雑木林であり、典型的な「里山」であった。その後、遷移が進んでコナラクヌギ林へと移行してきており、今後はさらに常緑樹の割合が増えると言われている。

右図では、21世紀懐徳堂ほかが環境学習に活用しているルートを中心として示した上で、待兼山の環境学習フィールドとしての活用と維持管理の方針を示している。

さらに今後は、博物館や21世紀懐徳堂などによるアートイベント等のフィールドとしての位置づけも加え、重層的な活用をはかっていく。



図a. 大阪大学総合学術博物館の事業(上)と役割(下)

1. 北口周辺

- ・樹冠が開けて明るく、また低木や草本を中心に、比較的多様な植物や昆虫等を観察できる。
- ・まとまった広さがあるため観察や講義のフィールドとして適している。

2. 石碑周辺

- ・全体として比較的明るいネザサが優占している。まとまった範囲のネザサを刈ることで、より豊かな植生への移行を期待できる。
- ・石碑の存在により待兼山の歴史を解説するスポットとして優れている。

3. 山頂周辺

- ・全体として比較的明るいネザサが優占している。観察ルートに沿ってまとまったネザサを刈ることで、より豊かな植生への移行を期待できる。

4. 低木がやや多様で四季を通じて観察しやすいスポット

- ・樹幹が高く全体として明るいので、比較的多様な植物を観察できる。

待兼山の緑の維持管理全体方針

- (1) ネザサ等がまとまった範囲で発生しているエリアは、年に1回程度、除草を行う。
- (2) 図示の主要ルートを中心として、最小限の歩行ルートで除草し、倒木等処理を行う。ただし図示以外のヤブ等、刈っても効果が薄いと思われる部分は、当面の間、放置する。
- (3) 除草は、晩夏～秋にかけて行う。この時期であれば、草本の希少種等が死滅する心配はなく、翌春に地面に光が当たることで、多様な種の発生が期待できる。
- (4) ナツハゼ、ネジキ、シャシャンボなどの、里山になじみの深い中高木ぐらゐまでの樹木について、種子をまいたり幼木を植えるなどを試行・検討する。また、ドングリ系ではない実のなる木、たとえばマユミなどを植えることで、全体としての植生・昆虫や鳥類などを含めた多様性を豊かにすることが期待できる。



凡例(図b)

- (緑) ネザサ等の植物の優占
- (赤) 積極的に草刈りするべきエリア
- (赤) 重要な環境学習フィールド・エリア
- (赤) 最も重要な環境学習ルート
- (青) その他の環境学習ルート
- (青) 補助的な環境学習ルート

図b. 環境学習フィールドとしての待兼山



経緯と課題

当該地周辺はバンデグラフ棟をはじめとして、当初の実験施設機能を終えた、あるいは老朽化がちな建物の立ち替わりなど、立て替えにより空間の有効活用が見込まれる建物が集中して存在し、将来的には豊中キャンパスの貴重な拡張可能ゾーンとして位置づけることができる。

一方で、モノレールの開通以来、柴原口は重要な歩行者の出入口となっていたが、長らくその経路は、柴原口～理学部裏～基礎工裏を通して、全体に寂れた印象の裏街路であった。平成24(2012)年春に、大阪府・豊中市・地元との連携により柴原口周辺は植栽等の修景整備がなされたが、そこから银杏通りまでの間は依然として裏通りであり、全体としての修景整備が望まれている。

計画方針

●ゾーン機能の整理と空間の再編

空間の建物建設キャパシティを慎重に見極めた上で、全学的判断によりゾーン機能を設定し、福利厚生施設の誘致も含めて検討することが必要である。

●骨格動線の保持と重要な歩行者空間としての設え

現在のルートを概ね保持しながら、可能な範囲で拡張し（現在は幅2m程度の部分が少なくない）、緑等の潤いとゆとりのある歩行者最優先の空間を整備する。

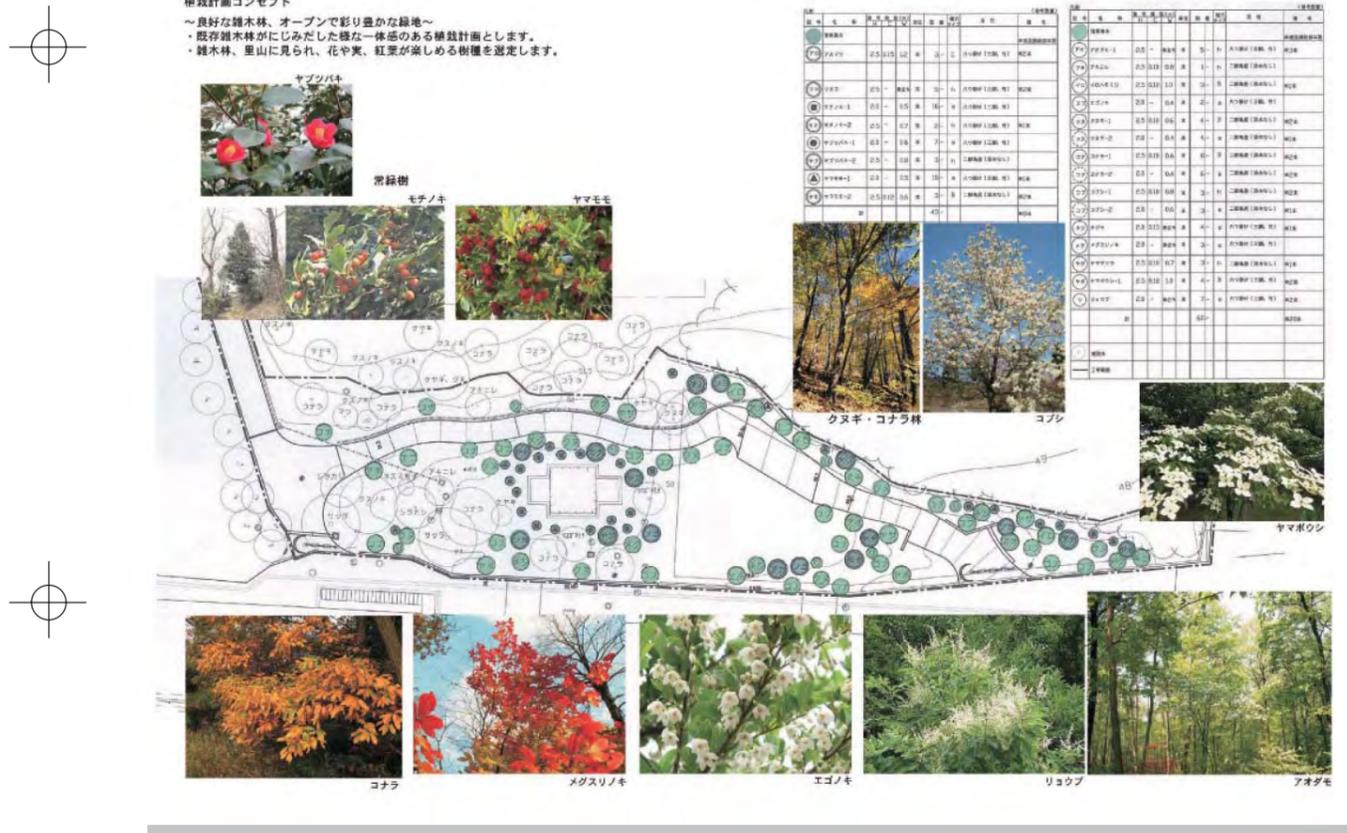
●建物ボリュームの制御と適切な空間スケールの確保

理学研究科と基礎工学研究科の間の街区は、珍しく建物ボリュームによる圧迫感が少ない「空に親しい空間」である。再開発後にも出来るだけ、建物ボリュームによる圧迫感を発生させないように計画を行う。

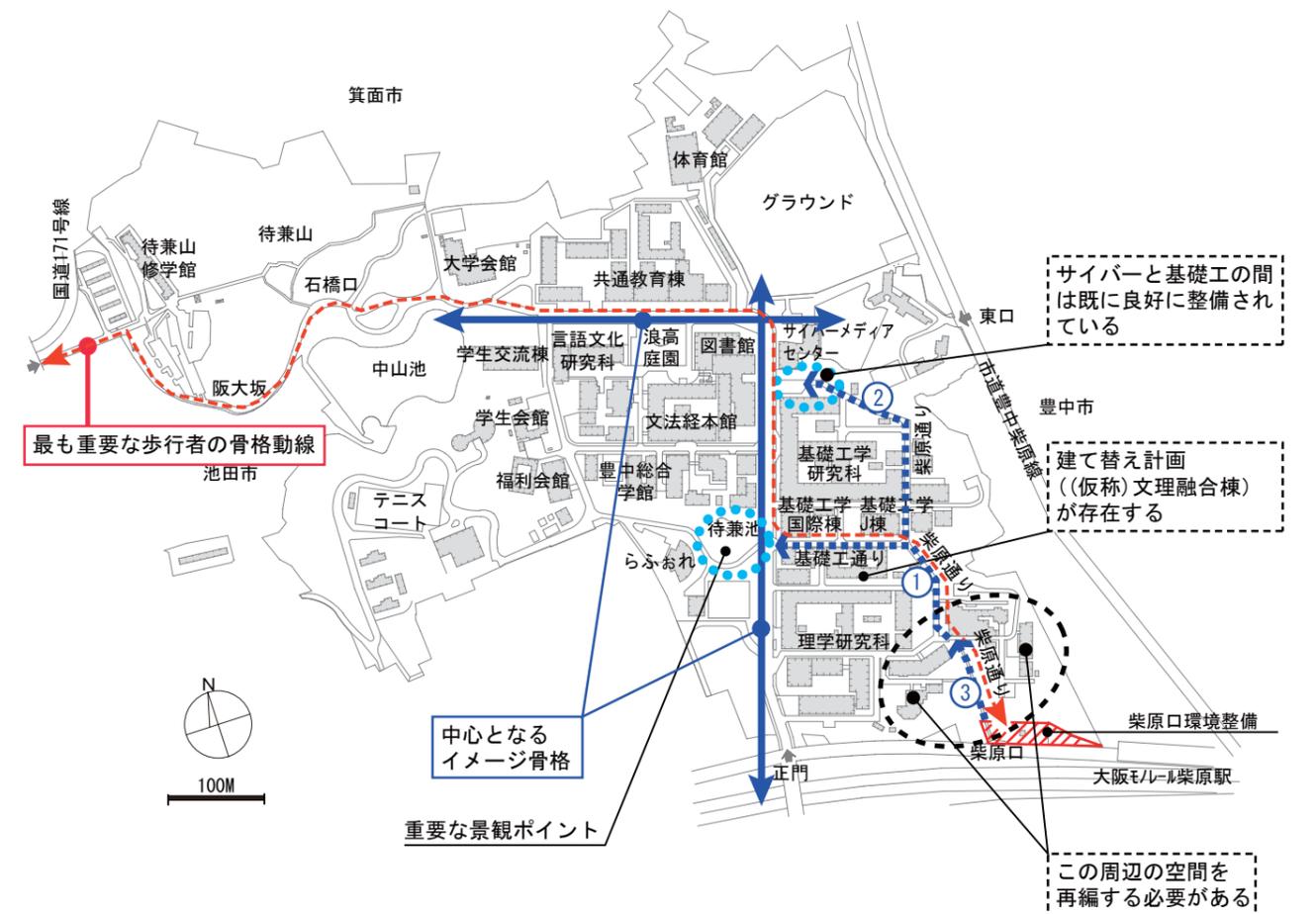
●駐車・駐輪スペースの検討

駐車場については、豊中キャンパス全体としてのキャパシティを低下させないことと、新たな機能空間による需要増に対応した整備を行う。

駐輪場については、集約駐輪場を設置し、阪大坂下や東口方面（サイバーメディアセンター周辺）などの駐輪場と合わせて、キャンパス中央部の自転車を減らすように整備することを検討する。なお、かつて柴原口周辺の駐輪場が学外者の駐輪のために廃止された経緯があるが、これは自転車登録制（平成23(2011)年10月から実施）によって防ぐことができる。



図a. 柴原口環境整備計画（植栽計画図）
 柴原口環境整備計画の緑化コンセプト
 ・四季の移り変わりを感ぜられ、楽しめる植栽
 ・昔の里山～里の植物
 田舎に行けば里には普通に見られる懐かしい植物
 (都心にはあまり見られないもの)
 ・維持管理しやすい植物
 環境に合った場所に植栽
 自然に根付き増え互いに共生するもの





現状の課題

吹田キャンパスの門ならびにその周辺は、地域社会に開かれたキャンパスに相応しい景観を呈しているとは言えない。特に千里門は、歩行者や車両の主要な玄関口であるが、調整池（平成17(2005)年に最低限の修景がなされた）、狭隘な歩道、自動車のサービス路のために、殺風景な環境となっている。また、南側から東側にかけてのオープンスペースがアーバンティのある広場となることが望まれるが、現状では、東側の鬱蒼とした植栽が存置されたままである。

そこで、以下の整備を実施することにより、千里門からGSEコモン東側に連続するエリアを、誰に対しても開かれた、親しみのある外部環境として整備する。

計画の方針

1. 誰に対しても開かれたアプローチ空間

- ①千里門を広場化することにより、千里北公園との景観の一体化を図る。
- ②広場、ゆるやかな階段、スロープ、エレベーターなどを組み合わせることにより、誰に対しても気持ちよく移動できる環境とする。
- ③既存の植栽を整理し、見通しのよい開放的な空間とする。
また警備員詰所のデザインと位置を改善し、総合案内所としての役割を持たせることにより、来訪者を最初に受け入れるわかりやすいエントランス広場とする。

2. アプローチ空間における3案の可能性

- ①A案 大階段タイプ
広くゆったりとした階段による、風格のあるアプローチ空間、階段によるエントランス性の明示
- ②B案 雛壇広場タイプ
地形に沿ったテラス状広場の連続、イベントなど幅の広い利用に対応
- ③C案 自然再整備タイプ
既存の植栽の再整備・充実による、あまり大規模な工事をしないアプローチ空間の再生

3. アプローチ空間のデザイン（東西に連続する壁など）と一体となった門の整備

4. オープンスペースネットワークの形成

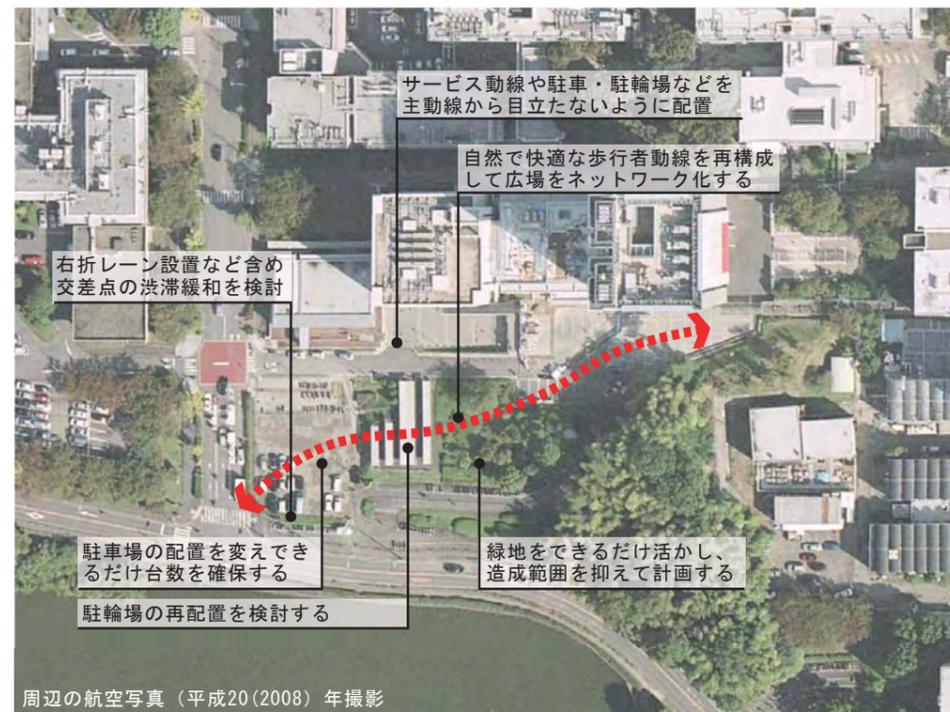
千里門アプローチ空間から工学U1M棟東側に連続するエリアの植栽を整理し、人が集まり、憩うことのできる広場とする。

5. 駐輪場・サービスヤードの充実と景観への配慮

工学U1W棟サービスヤードや駐輪場等と歩行者の主たるアプローチ空間を東西に延びる壁面や並木などの景観要素で分ける（アプローチ空間からのサービスヤードへの直接的な見通しを避ける）。



工学U1E棟東側のオープンスペースのイメージ



周辺の航空写真（平成20(2008)年撮影）



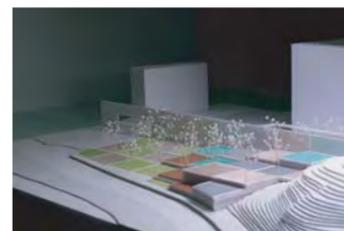
A案配置図



A案 南西方向からの鳥瞰写真



B案配置図



B案 南方向からの鳥瞰写真



C案 西方向からの眺め



現状の課題

樹林池と池のある広場には、大きく成長した樹木や低木・生垣で、視界的にも空間利用からも見通しが悪く、切断されていて、暗く感じる。同時に憩いや集いのための有効利用できる空間が少なく、水際も低木で仕切られ、親水性も生かされていない。

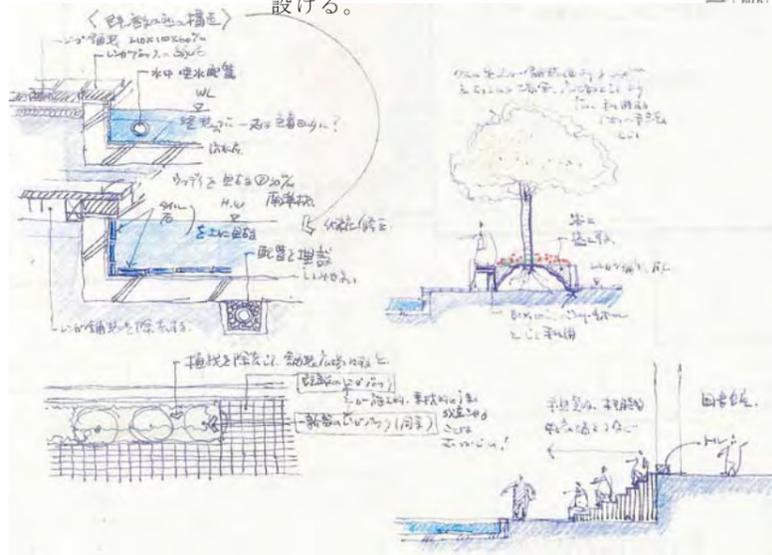
また、動線として中広場と図書館との機能的な軸が接続されていないので、利用者が積極的な参加が生まれにくい。

なお工学研究科内の重要な動線骨格をなしている回廊は、耐震性能の不足と老朽化の問題があり、順次撤去をする。本計画の検討に際しては、現在の鉄筋コンクリート製回廊に代わる、空間の骨格を形作る要素を新たに取り入れることも、合わせて検討する。

計画の方針

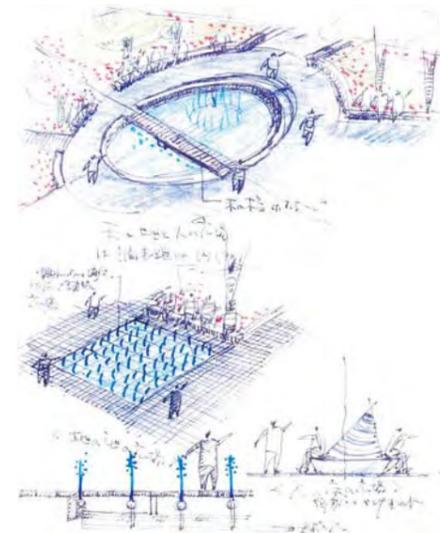
- ① 周辺との視界の広がり確保する。
- ② 参加・交流のできる広場をできる限り広くとる。
- ③ 水際と広場とを一体的空間として連続させ、親水性を高める。
- ④ 退官記念樹は原則として位置を変えないが、やむを得ない場合は移植を考える。
名板柱は朽ちない素材（石・ステンレス等）で新しくデザインする。
- ⑤ 広場の舗装は新しく、レンガ系ブロック・御影石・ウッドデッキなど、親しみと安らぎのある素材でつくる。
- ⑥ 花ものの植物が少ないので彩りのある植物で補植し、四季感を創出する。
- ⑦ 連続するベンチ機能を多く作り、サインなどの装置についてもバランス良く設置する。
- ⑧ 噴水設備やレンガ舗装の再利用を重視して考える。ただし、水中に沈下する設備管、ブルーの塗装については美観上良くないので補修・取り替え等を行う。レンガ舗装も傷んでいるので、再利用は慎重に検討する。

A 案

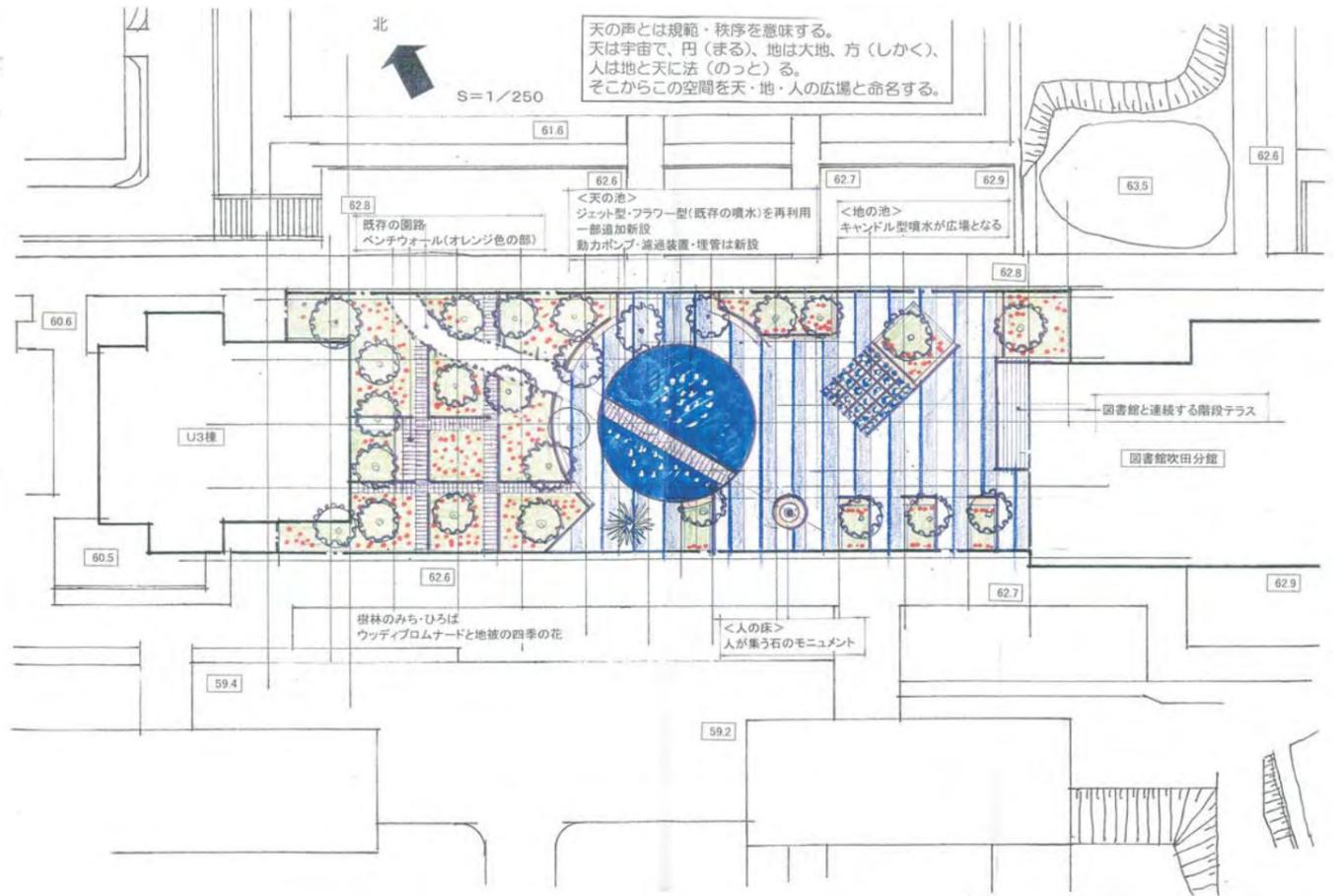
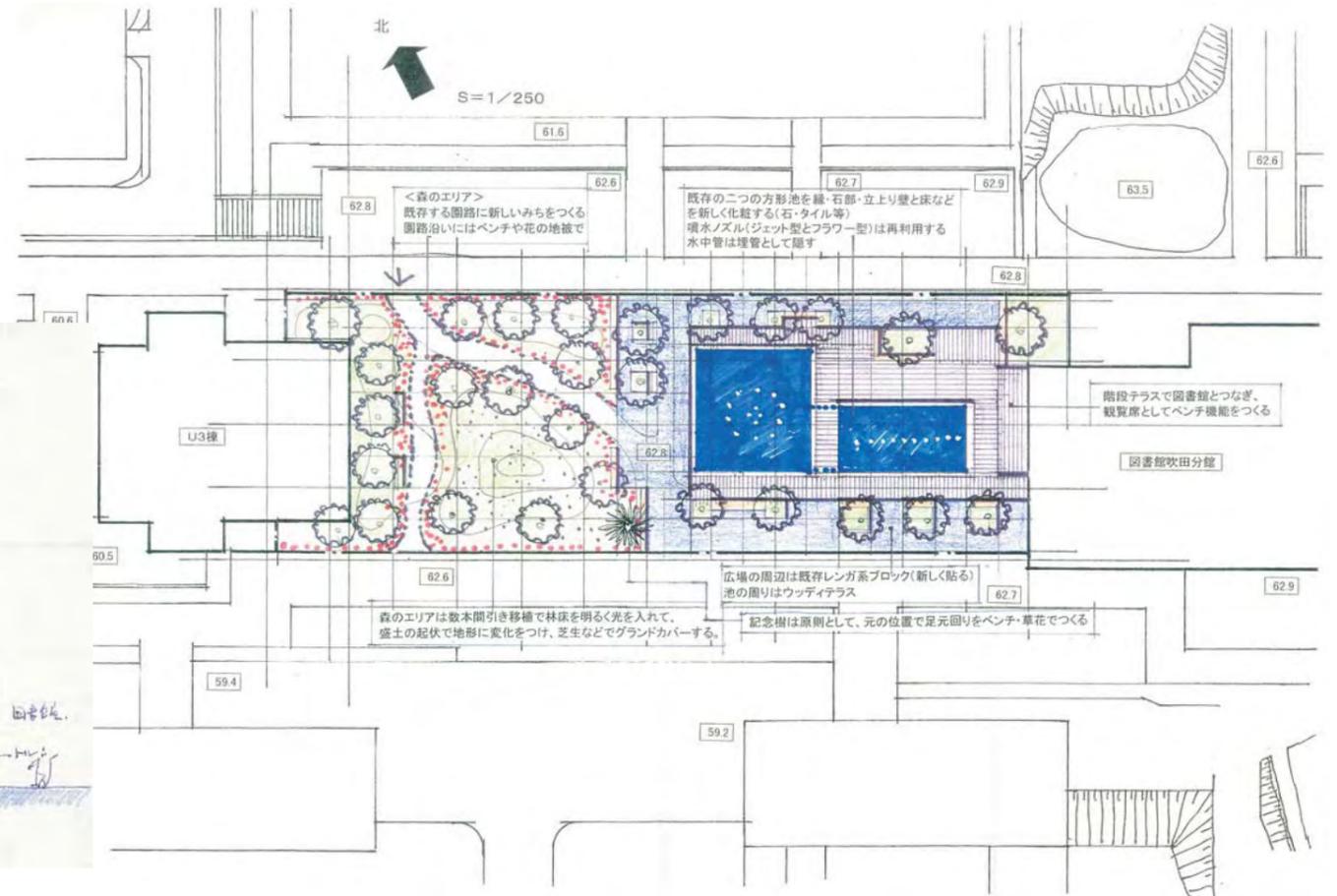


- ・既設の2つの池の位置と形状を残し、縁（エッジ）と立ち上がり、床の部分を化粧する（御影石・タイル等）。
- ・記念樹は、現在置を基本としてその回りをベンチウォール（御影石・木製）などで囲み、地被の花でカバーする。
- ・森のエリアは、高木が密植して暗いので、間引き、移植、枝打ちなどで松林を明るくして遠路、ベンチなどを設ける。

B 案



- ・既設の池とその周辺部を新しく作り変える案。
- ・キャンパスの通路・広場等は、周辺の建築の形態と同様に矩形で、優しいスラロームや円形などの空間形態・構造がない。ここでは、池の空間を、広場の中心に求心力のある円形で構成してブリッジを架ける。
- ・テーマを〈天・地・人〉として、利用できる空間の拡大と開放性の向上を図り、工学部オープンスペースのシンボル空間とする。
- ・森のエリアは、ウッドイプロムナードで人を導き、地被の花でブロックガーデンをつくる。夜の照明、噴水を照らす水中照明などによる演出も考えられる。





建物（新築・増改築・改修）のデザインガイドライン

●オープンスペースとの連続性

シンボル空間、街路、広場など、キャンパスの骨格や交流軸に面する建物は、これらのオープンスペースに対して連続性・開放性を確保し、交流の機会やアクセシビリティを高める。

- エントランスや主要開口部から建物内の様子や活動がうかがい知れる透明性
- 建物低層部に交流スペース・共通スペース
- アプローチ部の小広場化、植栽の整理
- エントランス性の明示（入り口がわかりやすいデザイン）

●景観の文脈の尊重

スカイラインや壁面線など、キャンパスの景観の文脈や秩序を読みとり尊重する。また、周辺建物群の形態、空間構成、外装材、色彩などについて、基調となっているものを分析し、建物のデザインに活かす（同調または対比）。

●図となる建物

交流施設や福利厚生施設など、公共性の高い建物は、周辺環境との調和を保ちつつ、個性的なデザインになるよう工夫する。外観の一部に、アクセントとなるような形態や外装材を取り入れて、華やかさを持たせてもよい（奇抜としないよう配慮する）。

●地となる建物

一方一般の研究棟や講義棟のデザインは、基調となる既存の建物と同調させ、キャンパスの地を形成するよう配慮する。外観には、キャンパスや部局の基調となる形態・外装材・色彩を採用する。但し、手すり・建具・屋外階段など、小さなデザイン要素にはアクセント色を採用し、適度な華やかさを持たせてもよい。

●リニューアルの成果の表現

主要な建物を改修する際には、ファサードの一部に、新しいデザイン要素（外殻フレーム、バルコニー、庇など）を用い、新しい建築要素による表情豊かで秩序ある外観の計画を検討する。

●共通スペース・交流スペースの充実

建物の新築・改修時には、適切な位置に、学生・教職員の交流スペースや、教育・研究のための共通スペースを確保する。

●長く実効的に使用できる配慮

汚れにくく、維持管理のしやすい材料・構法・デザインを採用する。また、将来の用途変更や、先進的な教育・研究に対応できるよう、講義・演習・研究スペースにフレキシビリティを確保する。

●ユニバーサルデザイン

バリアフリーやわかりやすさに配慮する。建物の改修時には、エレベーターの整備改修、段差解消、廊下幅員の改善、便所の改善などを実施する。

●防犯性への配慮

事務室・居室からの見守り（エントランスや外部空間に視線の届く空間構成）の確保、建物内外への防犯設備の導入など。



スカイライン・壁面線に配慮された秩序ある景観（慶応大学藤沢キャンパス）



歩行者空間との親密な関係（立命館大学草津キャンパス）



図となっている建物（食堂と図書館）（ユトレヒト大学）



エントランスホールにつくられたカフェ（ユトレヒト大学）



開かれた表情の実験施設（ユトレヒト大学）

オープンスペースのデザインガイドライン

●キャンパスの骨格への配慮

シンボル空間、エントランスゾーン、メインストリート、副次的ストリート、広場、緑地などのデザインには、キャンパスの骨格形成のために定義づけられた役割を果たすことが求められる。交流のための広場、シンボルストリートの形成など。

●広場のデザイン

交流の場、シンボルとしての広場など、役割に対応したデザインが求められる。広場自体の形態だけでなく、建物・街路・自然など、周辺環境との関係に配慮する。

- 集える場所、憩える場所：株立ちの植栽、舗装・芝生の整備、座れる場所・ベンチ、
- 景観：見通し、建物・植栽などによる囲まれ方、風景の活かし方
- アイデンティティ：舗装、形態、沿道の建物、モニュメント、ネーミングなどによる個性化

●街路のデザイン

交流の場、自然を楽しむ場、シンボルとしての街路など、役割に対応した総合的なデザインが求められる。

- 交流：建物と街路の親密な関係（視線の透過性、アクセシビリティなど）、オープンスペースのネットワークに対応した街路と広場との連続性
- 自然：視点場、法面・擁壁、街路樹などの整備
- 交通の役割に対応したデザイン：歩車分離/融合に対応したデザイン、歩車道比率、車速を抑えるデザイン
- 景観：D/H・スカイライン・壁面線への配慮、建物のデザインガイドラインと連動
- アイデンティティ：舗装、デザイン、建物、植栽、街路樹などによる個性化

●維持・管理に配慮した植栽の計画

適切な配置・樹種・剪定方法・ボリュームの組み合わせによる計画

●ユニバーサルデザイン

段差解消、屋外へのエレベーター設置、建物内エレベーターの利用など

●ストリートファニチャー

サイン、ベンチ、照明、自転車置き場、ゴミ箱、ゴミ置場、バス停屋根、渡り廊下屋根などについて、優れたデザインの導入と統一。

●駐輪場の計画

駐輪場は建物一棟または数棟単位で、所要台数を確保することが望ましいが、豊中キャンパスにおいては、キャンパス全体の集約駐輪場の計画も検討する。



建物に囲まれたモール（京大桂キャンパス）



”間”を大切にしたいアプローチ空間とプラザ（慶応大学藤沢キャンパス）



内と外のつながりを重視した建物のデザイン（慶応大学藤沢キャンパス）



駐輪に対して配慮のない計画



”間”の少ないアプローチ空間（留まるための場所がない）



障害物のある歩行空間



閉じた表情の共通施設



公共性の高い建物でありながら貧弱でバリアのある歩行空間

現状の問題



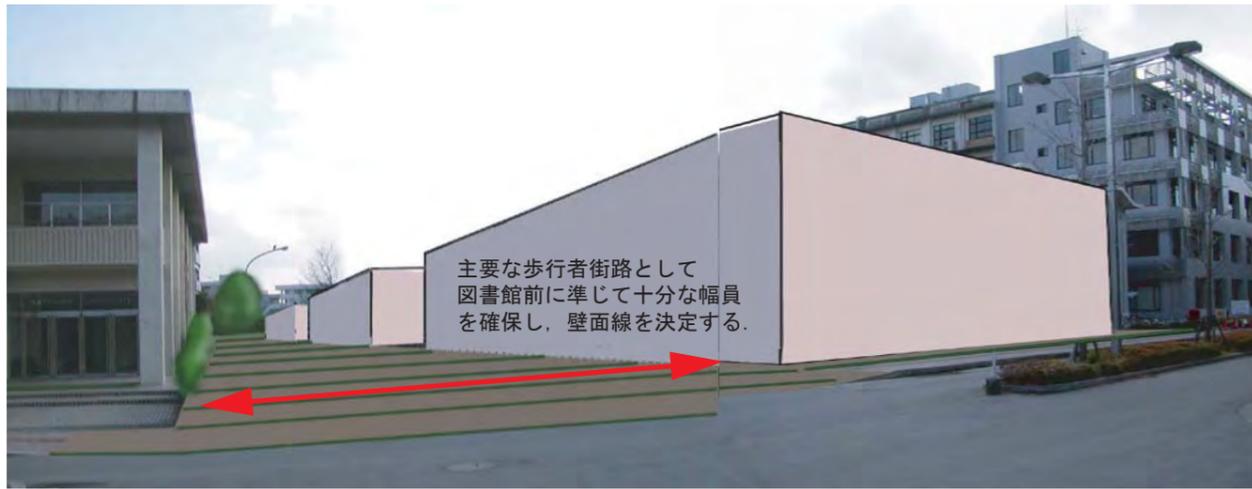


A. 圧迫感を与えない建物ボリュームの考え方 (歩行者動線・広場に対する配慮)

(1) 建替え時に建物ボリュームの圧迫感に注意すべき場所の例 (科学教育機器リノベーションセンターA棟付近)



科学教育機器リノベーションセンターA棟付近を大通りから見たところ：
重要な歩行者動線にあたるこの場所では、将来計画での建て替えに伴う圧迫感が懸念される。



日影検討によって求めた、景観上望ましい建て替え可能ボリューム：
街路を18mの歩行者専用道路と考えたときに、約半分が冬至でも4時間日照を確保できることを求めると、このブロックでは分節された低層の建物が望ましいといえる。

<日影検討から求めた結論>

- 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。具体的には $D/H=0.7$ 以上とすること、および街路の半分で冬至に4時間日照(測定面=GL+4m)を、できるだけ確保することを目指す。
- 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守る。
- 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画する。

(2) すでに建物ボリュームが街路等に圧迫感を与えている場所の例

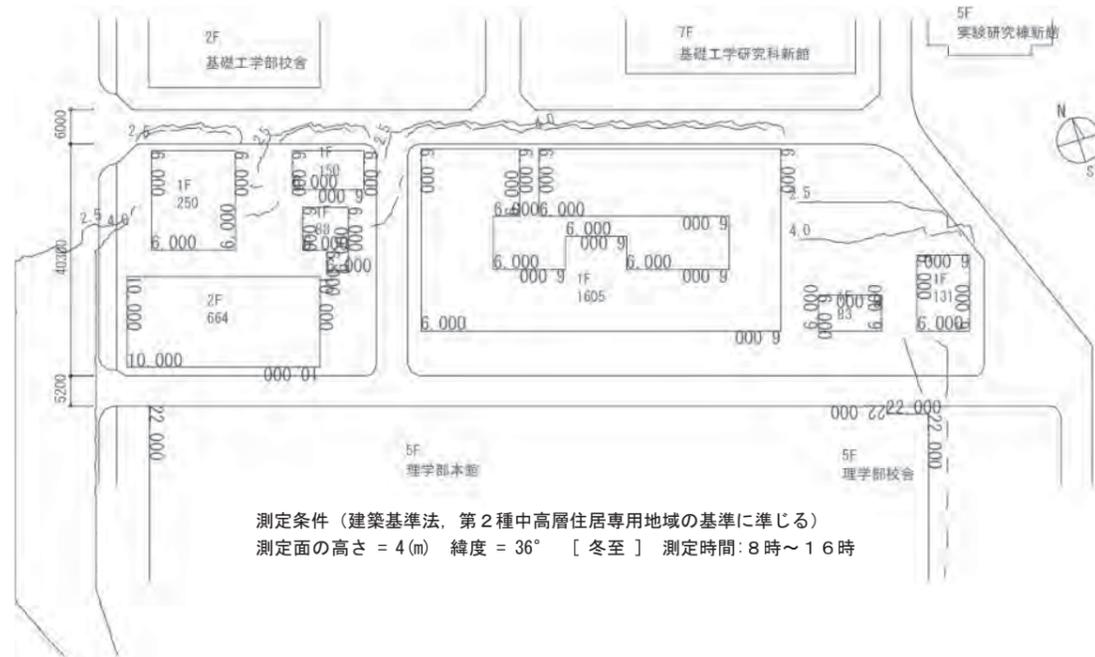


1. 主要な歩行者街路に大きく影を落とし、かつ圧迫感も大きい。この場所の D/H は、道路敷までで 0.7 弱である。最低限、舗装をソフト感のあるものに変えてゆくなど可能な限り歩行者の快適性を高める工夫が必要。
2. 高密度の利用が必要である場合も当然あるが、主たる歩行者動線はこのような高密度であってはならない。
3. 高密度に建て迫った街路。路上駐車も大変多く、陰鬱な感じが強い。
4. 街路の南側に7層の建物があるので、日影が大。今後この街路に面して計画される建物は、複合日影を考慮して、十分な棟間隔をとって計画し、街路がこれ以上暗くならないよう配慮する必要がある。

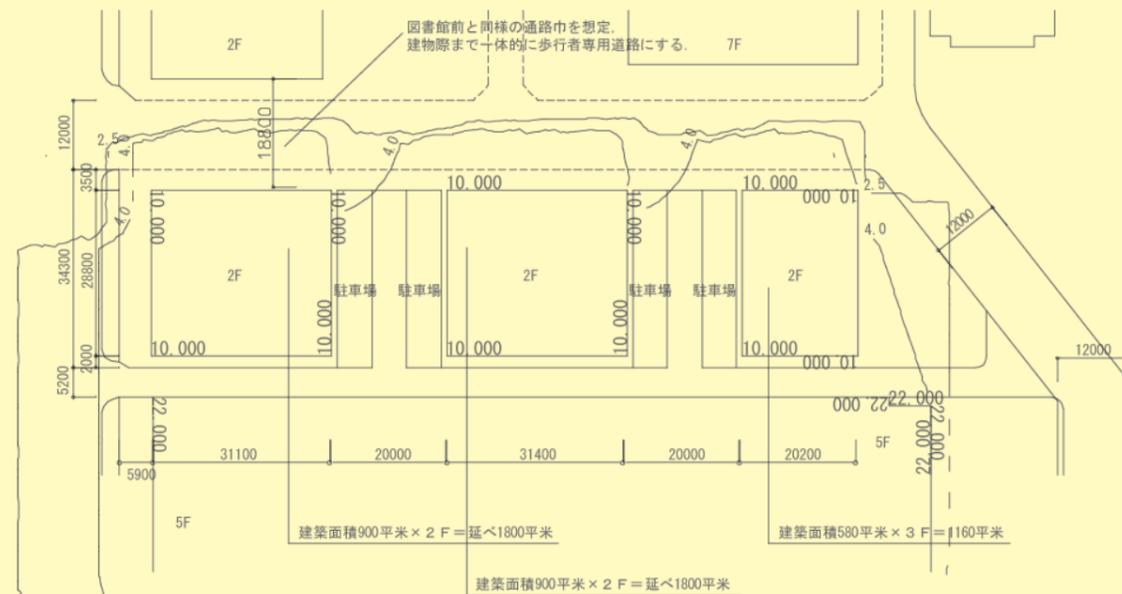


(3) 科学教育機器リノベーションセンターA棟周辺における日影によるボリューム検討の例 (1/1200)

a. 現況 (計2970㎡) : 低層なので明るい、街路の中央で、4時間日影。これを目標の明るさと考える。



b. 低層 (2階建て) を3分棟で建てた場合 (合計: 4760平米) : 低層を分棟化することで、現状と同等の明るさを得られる
それでも現況科学教育機器リノベーションセンター周辺の1.6倍の床面積を確保



<日影検討から求めた結論(再掲)>

- 重要な歩行者街路にあたるブロックでは、建物が圧迫感や暗さを与えない程度のボリュームとしなければならない。具体的にはD/H=0.7以上とすること、および街路の半分で冬至に4時間日照(測定面=GL+4m)を、できるだけ確保することを目指す。
- 上記に則して壁面線を決定し、将来にわたってこれを守る。
- 街区ごとに統一感、リズム感を生むように計画する。

B. 街路に応じた歩車道の考え方

(1) 魅力的空間となっている場所や要素の例



- レンガや石などの美しいペイプメント (舗装) は、歩行者専用空間であることを強くアピールする。
- 裏道的な場所であっても、アイストップは景観上十分に有効である。
- 科学教育機器リノベーションセンターと基礎工の間の街路からは、待兼池周辺がアイストップとして目に入る。

(2) 見直しが必要な場所の例



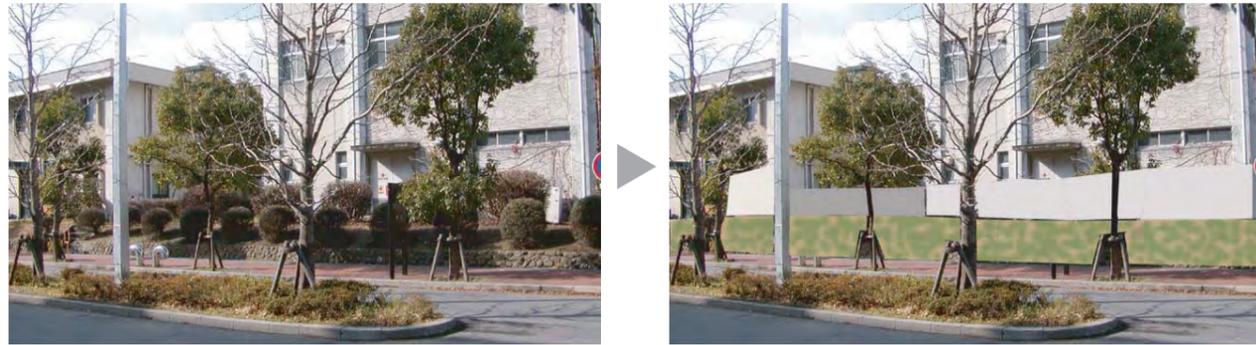
- 人の賑わいがある場所だが、重要な車動線にもあたるため、歩車分離を進める必要がある。

C. 植栽と街路の関係性

(1) 見直しが必要な場所の例



- 歩道の高木、低木、建物足下の中低木と、3層以上の重層的な植栽で、閉塞的な感じがする。
- 同様のことは、オープンスペースにも言える。現状の植栽は街路に対して閉鎖的で、重く暗い。



植栽が過剰に重層的で、街路と建物敷が分断されているので、現状の植栽をある程度残しながら、中低木を中心に整理撤去して見通しを確保し、芝やタマリユなどの地被類や草本植物を多く取り入れる。また、道路と建物敷の段差が大きい場所では、石積みや小擁壁類を極力廃止して、街路との親和性、一体性を高める。

D. 中庭の計画指針 (将来の新規・改修)

(1) 見直しが必要な場所の例



1. 宇宙・地球科学科棟中庭: 非常に閉鎖的な空間。右の化学・高分子棟入口と2層分程度のピロティでつながっておけば、見通しとともに、人の往来が生まれるので、改修の機会があれば検討の価値はある。

(2) 魅力的空間となった場所の例



1. 全学教育棟群の中庭は、それぞれの建物の入口や動線と適切に接続され、空間が人々の活動に適した設えとなっている。
- 2, 3. スチューデントコモンズ前の広場も、樹木が適切に間伐されるとともに、建物が広場に対して開放的に整備されて、有効に活用されている。

E. 建物入口と街路の関係性

(1) 見直しが必要な場所の例



1. 大通りに背を向けた位置に入口があり、孤立感のあるオープンスペースになっている。改修の機会があれば、中庭とのピロティによる連絡を検討する価値があると思われる。
2. 街路から遮断されるように計画され、街路との親和性・一体性を欠いている。植栽の一部撤去と、歩行者仕様の舗装を車道へ伸ばす工夫だけでも人を呼び込むことができる。
3. 入口が街路から引き込み過ぎて、内向きな空間を構成している例。庇の形状や舗装の工夫などによって、街路に対して正面性をアピールする設えが必要である。
4. 通り抜けによって、人を呼び込む設えであるが、重苦しい。
5. 街路からの引き込みを工夫している例であるが、天井高さが低く薄暗いのが惜しい。



A. 街路：歩行者系

(1) 空間構成の改善が必要な場所の例 (庇のある直線的な歩行者通路)



せっかく池と緑のある中庭に沿っているのに、生垣によってオープンスペースとの関係性を絶たれ「眺める庭」になっている。一体的な舗装を施し植栽の配置を変更することで、オープンスペースと一体となったアメニティのある遊歩道となる。



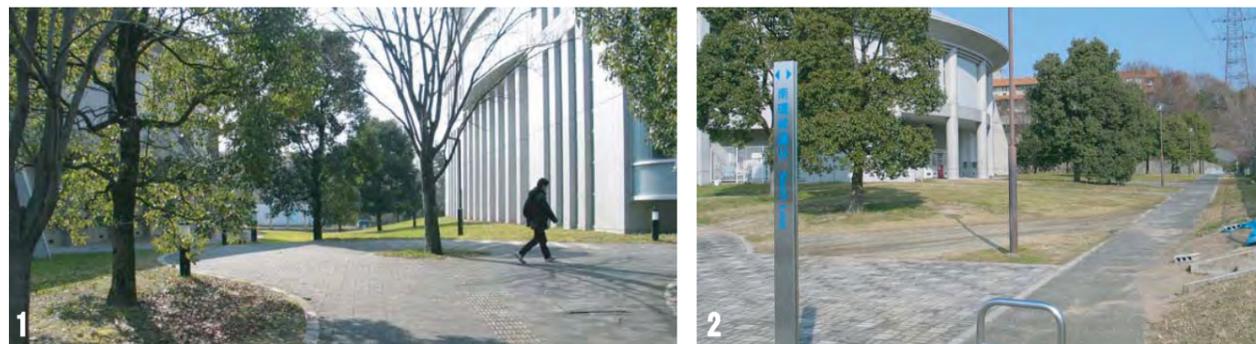
(2) メンテナンスによって改善が可能な場所の例



1. 通路と植栽が、生垣と側溝によって分断されている。
2. 中心部から離れたのどかな印象の歩道であるが、舗装や植栽のメンテナンスが必要。
3. 遊歩道として整備されているが、植栽のメンテナンスが行われていない。



(3) 魅力的空間となっている場所の例



1. 緑と遊歩道が一体化して魅力的な空間が形成されている。
2. 通路と植栽の間に明確な境界がなく、緑をより身近に感じることができる。



本部前の広場・南側の通りは、歩道や花壇、スロープなどの整備を行うことにより吹田キャンパスの顔となる華やかな空間に生まれ変わった。今後、北側の街路との関連性をさらに強めることで、キャンパスの中心としての位置づけをより向上していく。

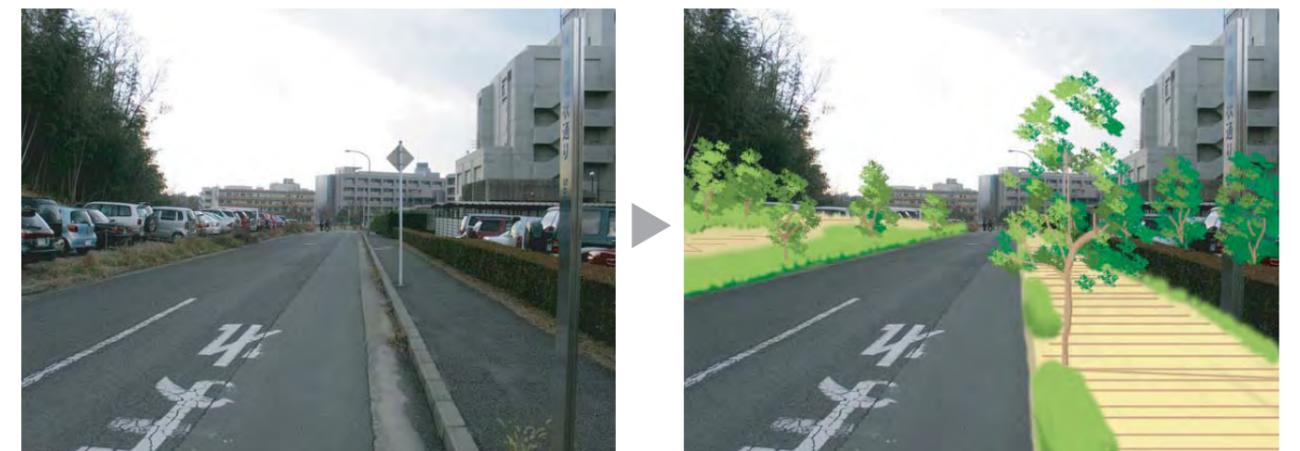
(4) その他見直しが必要な場所の例



1. 幅の広い植栽帯を活かせていない、直線的な歩道。
2. 裏道を上がっていくような印象である、キャンパス中央から工学部へのアプローチ。駐車場の中を通過してアクセス。
3. ほとんど手つかずで荒れた通路

B. 街路：自動車幹線系

(1) 見直しが必要な場所の例 (歯学部系横の車道)



メインストリートから入ってすぐの自動車道であるが、両側が駐車場になっていて並木もない。道路標示もはげている。駐車場の緩やかな緩衝帯として、並木は不可欠な要素。魅力的な遊歩道を組み合わせて、人が快適に歩ける道にする必要がある。



(2) メンテナンスによって改善が可能な場所の例



1. 2列の並木の密度が高すぎて、鬱蒼とした印象を与える。交差点の舗装色が景観を損ねている
2. 密に植わった緑が壁となり、道路と周辺の関係性が絶たれている。

(3) 魅力的空間の例



1. 植栽や建物とのバランスがよく取れている並木道。
2. 開放性の高い並木と広場が道路と建物の関係を良好に保つ。
3. 正門としてのシンボル性が求められるアプローチ部分は常に質の高いメンテナンスが施されている。
4. 一体的に整備された並木と正面の大木のアイキャッチがシンメトリーを強く感じさせる、非常に並木道らしい道路となっている。

(4) 魅力的であるが見直しも可能な場所の例



1. 美しいアイストップがあり、緑や歩道の整備もできているが、右側の駐車場が未整備な印象が強調され、バランスを欠いている。
2. 4車線並の大通りであるが、全体に閑散とした印象である。周辺建物との関係性を考慮した植栽配置を行い、アイキャッチや中央植栽帯などのアクセントを設ける必要がある。

C. 広場

(1) 見直しが必要な場所の例 (人科系建物前のオープンスペース)



正門からのアプローチがメインストリートと交わるコーナーに位置し、反対側には生命科学図書館のシンボル性の高い建物が建つ高ポテンシャルなオープンスペースであるにもかかわらず、周囲は生垣によって完全に閉ざされている。またオープンスペース自体も整備が十分でなく、魅力に乏しい空地となっている。キャンパスイメージを印象づける重要なオープンスペースと位置づけ、メインストリートに開かれた、並木などと一体的な整備をはかる。またスペース内にモニュメントやアメニティ施設などを整備し、キャンパスの潤いを創出する。

(2) 魅力的空間となっている場所



1. 医学部のシンボル広場であるホスピタル・パーク
2. 医学部の威厳を示す、前庭としての芝生。広場というよりは見せるための庭として機能している。

(3) 魅力的、またはポテンシャルが高いが、さらに見直しが望まれる場所の例



1. キャンパス全体の中心、イメージの核、賑わいの核となるべき場所が駐車場として利用されている。
2. 図書館と回廊に囲われた中庭だが、それらとの関係性は薄く、魅力に乏しい
3. 工学部系の中では最も賑わいのある広場であるが、舗装・植栽配置・ストリートファニチャーといった広場を形成する各要素に一体的な調和が感じられず、キャンパスの主要な広場としては、魅力に乏しい。



(3) 魅力的、またはポテンシャルが高いが、さらに見直しが望まれる場所の例 (つづき)



4. ただでさえ暗くなりがちなピロティの広場が、掲示板に囲われより暗く、閉鎖的な印象になっている。
5. 入り組んだ工学部の建物配置から生まれる中庭。植栽や舗装を工夫することで、変化に富んだ魅力的な広場とすることができる。
6. UIE棟の大階段・デッキスペースの前が、臨時とはいえ駐輪場となっている。オープンスペースのコンセプトが全く活かされていない。
7. 広い空地を用意しただけでは広場にはならない。



D. アイスストップとしての施設配置

(1) 改善が可能な場所の例 (キャンパス南東部の施設開発用地)



この場所に計画される施設には、アプローチからのアイスストップとしての役割と、周辺一帯の景観を統合する求心的デザインが求められる。

(2) 魅力的な空間構成となっている場所の例



1. 生命科学図書館が正門からのアプローチを受け止めるアイスストップとなっている
2. 上りのアプローチの正面という、アイスストップとして格好の位置に建つレーザー研の施設であるが、魅力の乏しいものとなっている。
3. アプローチに対して正対していなくても、建物の形状やデザインによってはアイスストップとなりうる。
4. シンメトリー性の強い並木道を、歯学部が真正面から受けている。

E. 幹線街路から引き込まれた建物の構え (工学部・産研・微研などのアプローチ空間)



各街区の主要な入り口が、幹線街路から引き込まれた奥行きのあるアプローチとなっている。歩車分離や駐輪の整理などをできるだけ整理していきながら、これらの基本的な空間構成は受け継いでいかなければならない。



7-3. キャンパスアクションプラン（その1）

直接的な施設整備ではない種々の取り組みや活動によって、キャンパスの維持管理機能や、快適性および周辺環境などを適正に保つ一助とするための、実行計画のメニュー提案を行う。（なお平成17(2005)年版キャンパスマスタープラン・平成21(2009)年策定キャンパスマスタープランにおいて、これらは単に「アクションプラン」として記述されていたが、今後は「キャンパスアクションプラン」とよぶこととする。）

2005年版においては、図のような1)~3)の枠組みのイメージがしめされた。各項目の内容については、次ページの一覧表を参照されたい。次ページの表ではこれまでの成果や実績を参照しながら、今後のとりくむべき方向性を示している。

1) 大学が主として行う取り組み

従来からの施設マネジメントであるが、その場限りの対策を行うのではなく、中長期を見据えた先見性のある施策と、統合的かつ柔軟な運営が求められる。

※ 図中の1)~3)の位置づけは、必ずしも明確・固定的な分類ではなく、あくまでイメージの一例を示している。場合によって、図とは全く別の場所に位置づけられることもありうる。

大学シンボルの形成

レンタサイクル制度

HANDAI CAMPUS DESIGN ユーザー参加型点検評価

特色ある各種のキャンパスマップ整備

キャンパス生態系保全プログラム

キャンパスレンジャー

リサイクルクラブ

防犯パトロール活動

コミュニティバス (学内バス・医療循環バス等)

アート・インスタレーションイベント

コミュニティガーデン

里山学校

植物探検隊 @秋の待兼山を訪ねて

中山池と里山を使いこなそう

3) 地域、社会、産業と連携していくための取り組み

サテライトキャンパス、インターンシップ、ベンチャーインキュベーションを展開しながら、地域への様々な働きかけや施設開放、地域からの提案やキャンパス計画への参画などの相互交流をはかりながら取り組んでゆくべき課題である。行政との協働や、都市計画においてキャンパスの役割を位置づけることも考えられる。

2) サポート型（参加・提案型）の取り組み

学生や教職員などの活動による、大学組織が直接的に関与しない学内NGO的なマネジメントの形態。大学としてこれらを支援していくことで費用対効果の高い維持管理機能を期待できるとともに、大学運営への参加意識と大学に対する誇り・愛着を高める効果や、学内・地域コミュニティの醸成効果を期待することができる。また学生、教職員の参加によるデザイン検討や自発的なマネジメント提案があればそれを支援するなど、継続的に意見を汲み上げてゆくしくみが求められる。

図 キャンパスアクションプランの諸項目とその位置付けイメージの例※



7-3. キャンパスアクションプラン（その2）

表. キャンパスアクションプラン一覧（※印は、2009年策定の箕面キャンパスマスタープランにおいて記述されたもの。それ以外は2005年策定のマスタープランによる。）

	取組みの性格分け (○ … 結びつきが強い △ … やや結びつきあり)			平成17(2005)年版キャンパスマスタープラン(豊中・吹田) および 平成21(2009)年版箕面キャンパスマスタープラン における定義・解説等	大阪大学全体のなかで2005年以降に状況が 変わった事項など ()内は付帯的状況		今後より強く望まれる追加的提案事項
	大学が主として行う 取組み	サポート型 (参加・提案型)取組み	地域、社会、 産業と連携 してゆくための 取組み		☆ … 平成21(2009)年以降に新たな実績がある ○ … 状況好転または実績あり △ … やや好転またはやや実績あり × … 状況が悪化している		
コミュニティバス	○	-	△	現在キャンパスの空地の至る所が駐車場と化している状況は誰も好まないと認識しているわけではない。コミュニティバスはキャンパス内と最寄り駅を循環するもので、パークアンドライド方式などの入構規制の導入とともに検討の時期にきている。	○	スクールバスが運行されている。ダイヤの適正化や増便の要望も多いが、毎年、学生の意見を聞いて予算の範囲内で改善が図られており、良く稼働している。 箕面キャンパスでは、旧大時代時に千里山バスによる通勤通学の足として、バス路線のない経路からの運行を行っていたことがある。	引き続きダイヤや便数の改善を検討するとともに、新規ルート開拓の可能性も模索する。医学部附属・歯学部附属の両病院と最寄駅等をつなぐ医療バスも需要が高いと考えられる。
大学シンボルの形成	○	△	-	アンケートによれば現在のキャンパスには阪大をイメージできるような施設や場所が乏しく、シンボルになるものを望む声も多く見られる。それには単に施設を建設するのではなく、適塾や懐徳堂、湯川記念室など阪大にゆかりのある資源を如何に活用するかが重要である。とりわけ大学の歴史や伝統的資源を集約し、広報していくことが望まれる。	○	平成23(2011)年春に、旧イ号館が大阪大学会館として整備され、合わせて学生交流棟北側が広場として整備された。また中山池も周回遊歩道などが同時に整備されている。 吹田キャンパスには平成18(2006)年に、本部棟南側広場が整備された。 箕面キャンパスには、外国学図書館とA棟・B棟で囲まれたシンボル性豊かな広場と、素晴らしい眺望をもつ大階段が存在する。	イベント等ともあわせ、学生の自主性を支援するしくみを探り入れることを考えたい。
レンタサイクル制度	○	△	△	キャンパス内の自転車の数は豊中において既に歩行者空間を埋め尽くすまでに至っている。本来、通学・通勤の足としてキャンパス内の移動手段として、最適な乗り物であるはずのものが、その量の多さと駐輪スペースの少なさから問題となっている。レンタサイクル制度の導入によって必要な場所に必要だけの自転車を利用できるようにその循環のシステムを考えて配置し、キャンパス内における自転車の総量を規制する。	-	(豊中キャンパスにおいては阪大坂の自転車進入規制が(賛否はあるものの)キャンパス内の駐輪減少と事故減少には大きく寄与した。 箕面キャンパスでは、旧大時代時に不要となった電動アシスト自転車を利用して、レンタサイクルの利用を行っていたことがある。)	学内専門家のノウハウ提供やコンサルティング参加が望まれる。
回遊散策路の構築と開放	○	△	△	施設の開放と防犯安全対策は矛盾しやすい条件である。学内の危険な場所に適切な対策を講じるとともに、日常の点検評価が重要である。コミュニティや人の目の存在もまた、物理的対策と両輪をなすものである。	☆	中山池を周回する遊歩道が、石橋3丁目自治会、石橋水利組合、池田市、大阪府との協力により、平成23(2011)年春に完成した。	活用方針や維持管理等についても、地元等と連携することが望ましい。
キャンパス生態系保全プログラム	○	○	△	火を使って良いルール、木を切って良いルール、剪定のルールの策定、植栽計画コード、里山形成プログラム、営育成の可能性検討などが考えられる。	☆	平成23(2011)年に緑のフレームワークプランが策定された。 豊中キャンパスでは柴原町タケの会と連携したイベント・清掃・間伐活動などが行われている。 箕面キャンパスでは、環境サークルGECSが、彩都との境界に位置する樹林地・河川・彩都西部中央公園を主フィールドとした環境学習活動の運営協力を行っている(主催は彩都協議会)。	緑のフレームワークプランの整理加筆修正、および里山保全プログラムにより、イベントと連動したより実効的なしくみの確立が必要。 (近年、牛や山羊の放牧による除草が、国内外で注目をあつめている。グランド等広い面積の芝生(他、地被類)化と合わせてシンボル形成に寄与できる可能性もある。)
特徴のある種々のキャンパスマップ整備	○	○	△	生態系マップ、アートマップ、ハザードマップ等の整備や絵葉書の作成、販売等を通して大学の現状を把握し、広報に繋げる。	△	障害学生支援ユニット、CSCD、安全衛生管理部、キャンパスデザイン室などでいくつかの試みがなされている。2012年2月現在、障害学習支援ユニット、工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻、キャンパスデザイン室が連携して、バリアフリーマップの作成を検討している。	これらを活用した広報の充実や、諸団体の有機的なつながりが期待される。
ユーザー参加型点検評価	△	○	△	学生や教員が普段利用する研究棟内を定期的に点検するキャンパスバトロールや点検評価チェックシート、利用者アンケートによるデータを公開することで定期的に改善提案を汲み上げ、リニューアルにつなげていくことが重要である。	☆	施設マネジメント委員会・施設部により、各部署への点検評価照会(アンケート形式)やキャラバンが行われている。2010年にはキャンパスイメージアンケートや、構内交通安全に関するアンケートなどが実施された。また、学生生活調査や留学生生活調査も行われている(3章参照)	学生が主体的に企画・提案するワークショップ的活動の萌芽がみられる。教職員や学生による自主的な諸活動を、大学として支援していくしくみが求められる。
キャンパスレンジャー	△	○	△	大学キャンパスはアンケートでも指摘されているように、維持管理が適切に行われているとはいえない状況である。これは単に環境美化に要する経費の問題だけではない。学生や教職員の環境美化に対する高い意識が必要であろう。キャンパスレンジャーは学生や教職員が有償ボランティアとして組織し、バトロール、屋外清掃、大学来訪者へのキャンパスツアー、キャンパス改善提案など幅広い活動を行うもので、自ら率先して環境美化を行うことで、参加者のもとより、その活動を見る者への啓蒙にもなり得ると考えられる。また大学側も積極的に支援することが望まれる。授業の課題として取り組むことも考えられる。	△	箕面キャンパスでは、旧大時代において、学生教職員が参加し、構内の除草及び清掃を月1回程度実施していたことがある。 (障がい者雇用の一環として、エコレンジャーによる取り組みが開始されている)	有償ボランティア・アルバイトの形態をとることで、費用はかかるものの対効果の大きい成果が得られる可能性がある。 ただし、留学生にあっては母国の文化により参加できない場合があり得る。そうしたときに不利を被らないような、自由を尊重する配慮が必要である。
地域と連携・交流したイベント活動 ※	△	○	△	箕面キャンパスでは、毎年7月上旬頃の土曜日において夏祭りを開催し、フリーマーケットや盆踊りを実施して付近住民の参加も盛んである。 様々なアクションプランの素地となりうる活動である。	☆	箕面キャンパスでの間谷地区との夏祭りのほか、豊中キャンパスでも柴原町タケの会と連携したイベント・清掃・間伐活動などが行われている。	地域と連携・交流したイベント活動は、様々なアクションプランの素地となりうる活動であり、今後大学としてのサポートを改めて検討してゆく必要がある。
地域の清掃・美化活動への参加 ※	△	○	○	(構成員が近隣の地域に対しても意識を高める効果があると考えられる)	☆	豊中キャンパスでは柴原町タケの会と連携したイベント・清掃・間伐活動などが行われている。	諸活動を、大学としてサポートしてゆく姿勢が求められる。イベントや有償ボランティアと関連させて企画してゆく必要がある。
防犯バトロール活動 ※	△	○	○	(箕面キャンパスでは、近隣住民からこれを要望する意見があった)	-	(平成21(2009)年策定の箕面キャンパスマスタープランで提案された。)	同上
アート・インсталレーションイベント	△	○	○	オープンキャンパスや大学祭に合わせて実施し、キャンパスを地域に開放する。 地域の芸術家の協力を求めるとともに、ピエンナーレ形式で優秀な若手芸術家を表彰する場を提供する。	○	CSCD、21世紀懐徳堂、総合学術博物館等で様々な取り組みが行われている。	さまざまな活動を企画する諸団体の有機的なつながりが期待される。
里山学校	△	△	△	キャンパスの自然豊かな特性を生かし、動植物や農林業に詳しい地域住民や学生、教職員らのボランティアを募り、キャンパス内を広く市民学習の場として開放し、イベント等を支援する。	○	21世紀懐徳堂主催、総合学術博物館共催による植物探検隊は、平成23年秋の開催で第6回を迎えている。そのほか単発イベント的なものも、いくつか試みられている。	緑のフレームワークプランの整理加筆修正、および里山保全プログラムにより、イベントと連動したより実効的なしくみの確立が必要。
リサイクルクラブ	△	○	△	大学生協や環境資源委員会の支援、ISO14000sの導入、フリーマーケット、バザー等のイベント支援など	☆	生協において紙製弁当箱を使用して、リサイクルを行ったり、学生サークルでもPRなどの活動を行っている。	さまざまな活動を企画する諸団体の有機的なつながりが期待される。
コミュニティガーデン	△	△	○	リザーブ用地や荒れている既存の植栽部分などを学内外の有志にレンタル・アドプトすることで美しい庭園を再生させる。	△	工学A1棟周辺などでは、教員が自主的に植え、管理しているアジサイなどがみられる。	教職員や学生が自主的にキャンパスを花・緑で美化する活動を、大学としてサポートしてゆく姿勢が求められる。



◆ 学生のキャンパスライフを支援する福利厚生施設のあり方

優秀な学生を獲得して、世界レベルの教育・研究を持続するためには、キャンパスライフの充実は極めて重要な課題である。豊中キャンパスでは、大阪外国語大学との統合以来、学生数が増えて、食堂の混雑の問題が顕著に表れている。食堂等については、数量的充足だけでなく、学生が考え事や議論をすることができるゆとりある空間づくりという側面にも注力しなければならない。

一方で、施設整備にかかる経費は今後ますます競争的になり、従来手法による整備では実現がいつになるかわからない。ニーズの詳細調査を行ったうえで、民間事業者の誘致など、整備手法に重点をおいた検討が望まれる。

◆ 建築キャパシティの限界と将来更新検討（建物、オープンスペース、緑地等のバランスなど）

基礎工学研究科、医学研究科・医学部附属病院周辺や工学研究科・微生物病研究所周辺など、キャンパスの一部に、すでに相当高密度に建物が建てられている状況があり、部分的に、建築可能な空間を限界まで使い切っている。各キャンパスとも、厳しい高さ制限（航空法によるものほか）がかけられており、高層化にも限度がある。

建物を建設するにあたって、従来は、駐車場や駐輪場の需要増や緑地とのバランスが十分検討されずに計画される場合があった。

快適性や景観の側面のみならず、災害時の対応を考えたとき、避難や一時退避のためには、建物周辺には収容人員にみあった十分な空地が必要であるが、今現在はそのような検討が十分されているとはいえない。

一方で、キャンパス内には低層で土地利用効率が悪く、老朽化した建物も数多く存在する。エネルギー利用効率の面からも、建築物を適切に集約高層化して、土地利用効率を高めることは重要な課題となる。

これらの検討は、キャンパスの建物の建築キャパシティを見極めることにもつながり、新たな土地取得等も含めた長期的ビジョンでの将来更新検討を行うためにも、極めて重要な検討となる。

◆ 防災・防犯、省エネ・低炭素化の取り組み強化（低炭素推進計画や防災計画等との関係性）

サステナビリティは、大学キャンパスにとって、ますます重要な課題となってきている。低炭素推進計画との整合をはかりながら、大学全体としてのめざすべき取組を明確化し、キャンパス計画に反映していく必要があると考えられる。

平成7年(1995)年の阪神・淡路大震災、そして平成23(2011)年の東日本大震災では、学校が避難場所や支援基地として極めて重要な役割を担った。広域避難施設としての指定を受けているのは、豊中キャンパスの体育館とグラウンドだけであるが、万一の際にはキャンパスの多くの部分が、これに準じる役割を担うことも想定される。キャンパス全体の防災計画や緊急時の対応体制とも合わせて、検討されることが必要である。

◆ 広報やユーザー参加による点検評価（アンケート等）の強化や、地域との連携

構成員が自身の所属するキャンパス空間に関心をもち、愛着を深めることができるためには、キャンパス計画において学生や教職員がかかわりをもつことも非常に重要である。これまでは、キャンパス計画ご意見箱、アンケートやヒアリングなどの限定的な場面しかなかったが、今後は、定期的なアンケート調査はもちろん、清掃に関するイベント「キャンパス・クリーンデイ」のようなものや、整備に関するワークショップ等、より幅広く奥行きあるかたちでの企画や参加が期待される。関心をもって参加してもらうためには、日ごろからのキャンパスマネジメントの広報もまた、大変重要である。

キャンパスは教育・研究の場であると同時に、建物が密集している大都市近郊において、貴重なオープンスペースを比較的多く内包した豊かな空間をもっている。昔のような塀で閉ざされた大学キャンパスは、地域にとってはある種の迷惑施設の様であったが、近年の大学キャンパスは教育研究面での社会への貢献に限らず、地域に潤いを与える空間としての役割や、周辺に居住する学生たちとの共生など、様々な側面において、地域との連携が期待されている。

◆ 豊中キャンパスにおける阪急石橋駅～阪大坂下までの通学ラッシュや自転車と駐輪の取り扱い

大阪外国語大学との統合後、豊中キャンパスに学生が増えたことによって、これらは大きな問題となってきている。警察や行政、地元と共同して対症的な対策をとりながらも、交通マネジメント（例えば、大阪モノレール等の公共交通事業者への働きかけと提携によって、通学ルートをコントロールすることも考えられる）や空間マネジメントによる積極的な対策も、長期的には考えていく必要がある。

集約駐輪場や駐車場の計画などを、キャンパスや周辺地域の空間キャパシティを踏まえた検討を行い、これらの在り方に明確な方向性を与え、キャンパス内だけでなく周辺地域を含めて、歩行者優先のより安全な空間としていかなければならない。

